

# 山 嶽 寮

甲南山岳会通信第63号

2008年10月

- |          |                           |      |
|----------|---------------------------|------|
|          | 2007年現役海外遠征支援金募集結果のご報告    | 武田雄三 |
|          | クビ・カンリ初登頂までの軌跡            | 谷 勇輝 |
| 随 想      | ジョギングで健康維持                | 矢吹 操 |
|          | 関東で一人ぼっちの健康維持             | 大勝規弘 |
|          | 山の男の歌                     | 中澤章浩 |
| 紀 行      | “風の大地・パタゴニア”紀行            | 福田信三 |
|          | いい年をして、いやはや               | 柏 敏明 |
|          | チベットトレッキング行動記録            | 浪川純吉 |
| 論 考      | プロ登山家の誕生                  | 雨宮宏光 |
| 追 悼      | ニッコリ・ニンマリ・ニヤリ・ニタリ         | 平井幹男 |
| 図書紹介     | 「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」 | 越田和男 |
| ホームページから | わたしの夏休み 56年ぶりの慰霊アルプス行     | 松方恭子 |

甲南山岳部・甲南山岳会

	2007年現役海外遠征支援金募集結果のご報告	武田雄三	1
	クビ・カンリ初登頂までの軌跡	谷 勇輝	3
随 想			
	ジョギングで健康維持	矢吹 操	13
	関東で一人ぼっちの健康維持	大勝規弘	15
	山の男の歌	中澤章浩	19
紀 行			
	“風の大地・パタゴニア”紀行	福田信三	20
	いい年をして、いやはや	柏 敏明	27
	チベットトレッキング行動記録	浪川純吉	35
論 考			
	プロ登山家の誕生	雨宮宏光	40
追 悼			
	ニッコリ・ニンマリ・ニヤリ・ニタリ	平井幹男	59
図書紹介			
	「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」	越田和男	62
会員短信			
	秋の集会 / 総会・慰霊祭への出欠はがきから		64
報 告			
	秋の集会 木曾福島		74
	定時総会		75
	慰 霊 祭		77
ホームページから			
	わたしの夏休み 56年ぶりの慰霊アルプス行	松方恭子	78
	山行とつどい		80
	現役の書き込み		96

## 2007年現役海外遠征支援金募集結果のご報告

募集責任者 武田 雄三

頭書の件、大学山岳部主将 谷 勇輝君 が同志社大学山岳会・日本山岳会関西支部共催「クビ・ツァンボ源流域学術調査隊 2007」に参加するにあたり個人負担額が120万円と多額に上る為、此れを支援するべく会員の皆様にご寄付をお願い致しましたところ、

応募総口数 120口 (61名)

応募金額 120万円

と目標を達成する事が出来ました。此れも偏に幅広い皆様のご支援の賜物と改めて厚く御礼申し上げます。

## クビ・ツァンボ源流域学術登山隊 2007

日本山岳会関西支部・同志社大学山岳会 共催

### 1. 目的

- (1) クビ・カンリ(6,721m)、アプシ(6,254m)、ランタチェン(6,198m)の初登頂
- (2) 本活動を通じて関西を中心とした若手登山家の育成
- (3) ヤル・ツァンボ河の最源流となるクビ・ツァンボ河の源の確認と源頭への到達  
地球温暖化による地球環境調査（氷河後退）
- (4) 河口慧海が白巖窟からマナサロワール湖へ抜けたルートの調査
- (5) 標高（気圧と酸素濃度）が閉鎖集団中での認知処理に及ぼす影響の研究

### 2. 実施時期

2007年8月5日 日本発 ～ 10月10日 本隊帰国

（9月14日 12:40(ネパール時間)、クビ・カンリ(6,721m)に千田登攀隊長以下6名登頂）

### 3. メンバー

隊長 和田豊司 日本山岳会／同志社大学山岳会

登攀隊長 千田敦司 日本山岳会／同志社大学山岳部サブコーチ

隊員 谷 勇輝 甲南大学理工学部 4回生 下里直樹 同志社大学文学部 4回生

石川敬三 同志社大学工学部 3回生 小谷紘平 同志社大学工学部 2回生

小林博史 同志社大学政策学部 1回生 藤井良太 京都府立大学農学部 2回生

寺倉惣吉 同志社大学山岳会

（コック1名、キッチンスタッフ1名、リエゾンオフィサー1名）

# クビ・カンリ初登頂までの軌跡

谷 勇 輝 （理工4年）

## 私と山との出会い

私と山との出会いは、高校時代でした。もともと山に興味はなかったのですが、当時山岳部の顧問をしておられた先生に誘われ、なんとなく始めた登山でした。しかし、だんだんと山の魅力に目覚め、次第に北アルプス等日本の代表的な山に憧れるようになりました。高校時代は顧問の先生に連れられて、関西近郊の山、穂高・槍ヶ岳・劔岳等の北アルプスに登りました。またクライミング（岩登り）を知ったのもこの時期でした。

## 憧れの‘ヒマラヤ’へ

大学入学後、山への想いを抱きつつも、当時山岳部に部員がおらず事実上の休部状態だった事もありワンダーフォーゲル部に入学しました。しかし、それまでよりも交友関係が広がった事もあり、次第に海外登山への憧れを抱き始めた私は、より高みを目指した登山をしたいと考えました。

そこで、自分が山岳部を復活させ、伝統ある甲南大学山岳部のOB諸氏の力をお借りして、山岳部として海外登山をしようと思い、当時部員のいなかった山岳部に入学しました。しかし、部員がいないという事は、技術指導をして下さる先輩がなかったという事であり、自分自身で学んでいくしかありませんでした。

そこで私は、社会人山岳会（大阪山の会）や、文部科学省が主催している登山リーダー研修会に参加する事で、自分のレベルを上げていきました。前述したように、それまでにも海外登山への憧れは持っていましたが、その憧れが形を

成してきたのはこの時期でした。社会人でアクティブに登山をされている方や、海外登山の経験者と行動する機会が増え、海外登山・ヒマラヤ登山といった世界がそれまでよりも現実味を帯びてきたのです。

海外登山と言っても、世界にはたくさんの山があります。標高が高かったり、有名な山ならばヨーロッパやパタゴニアやその他世界各地にあります。私はそれよりも、人が入る事の少ない、人間を拒んでいるかのようなヒマラヤに心惹かれていきました。昨今、商業化されていく登山の世界において、今回の遠征で目指した地域は外国人未開放地域であり、世界中に残された数少ない未踏峰です。私にとってはこの上なく魅力的な計画でした。

ここからは私が遠征中に記していた日記をもとにして、また当時の記憶を掘り起こして記したいと思います。

## いよいよ日本を出発！

8月5日、出発の日。一年も前からこの日のために仲間と共に準備を進めてきた。深夜にも関わらず、大勢の関係者に見送られてタイ／バンコクへ行き、トランジットでネパール／カトマンズに到着。これから起こるすべての事に期待感を弾ませてネパールに入国した。

カトマンズの空港を一步踏み出ると商業目的のポーターたちでごったがえしていた。人ごみをかき分けながらエージェントの用意した車に乗り込み早々に宿へと向う。宿はカトマンズの繁華街タメルから数キロ離れた所にあり、千田

さんが常連とだけあってオーナーはとても親切で快適そのもの。

ここカトマンズはやはりヒマラヤトレッキングの準備基地とだけあって、タメルにはたくさんさんの登山用具店がひしめきあっており、コピーからオリジナル商品に至るまでありとあらゆる装備品が並んでいた。タメルの登山店ではこれからの登山に備えて地図やストック等を購入した。

ネパールでの夕食は決まってダルバート。バート（ご飯）・ダル（豆スープ）・サブジ（野菜の炒め物）・チキン・タルカリ（おかず）が一般的。日本ではあまりイイ噂を聞いていなかったのですが、この宿のダルバートはとても美味しかった。それにバートのおかわり自由などに驚いた。こんな感じでネパール独特の空気・習慣・食文化に触れてとても充実していました。海外遠征とは単に山に登りに行くだけではなく、異国の地で生活することで登山以外のところにも海外遠征の醍醐味が隠れているのだと実感しました。

## ネパール高所順応

チベット高原の標高は約 4,000m もあり、一気にチベット高原へ上がってしまうと体が高度に馴染めずに異常をきたすおそれがありました。その為、チベット高原に上がりキャラバンを始める際、スムーズに高度順応ができるように体を馴染ませる為、あらかじめネパール国内の Gosainkund で順応トレッキングを行いました。

期間は 8 月 8 日から 13 日にかけて、登山の出発地となる Dhunche (2,030m) から Gosainkund へ向けて徐々に高度を上げて、最高到達点 4,850m（最高宿泊高度 4,300m）まで順応を済ませました。

8 月 8 日、カトマンズ市内から登山基地となる Dhunche (2,030m) までバスに揺られること 8 時間。バスは外人トレッカーとローカルで超満員。あふれたローカルはバスの屋根の上にあがって、あたかもオープンカー気分だろうか。しかし、あれだけの悪路を走るバスの屋根上に座って、よく転げ落ちないと少し感心した。

バスの座席には、薄いスポンジが敷かれているだけで、大きな振動がくるたびにケツが割れそうな振動が伝わってくる。Dhunche 手前の道路が土砂崩れで寸断されていてバスの通行が不可能なハプニングもあったが、乗客は徒歩で崩れた土砂を超えてその先の安定した道まで抜けた。すると、もう一台のバスが待ち構えており、早々乗り込んで再び出発し無事予定通り Dhunche に到着することができた。

翌日よりいよいよ登山の始まり。この時期はまだネパールはモンスーンの影響で雨が多い為に、登山道の周りには草木が鬱蒼と生い茂り、湿度が高くムッとしたような感じで日本の山となんら変わらない様子だった。

でも、数日経つと徐々に背の高い樹木が少なくなり、周りの景色が開けてきた。ある時ふと後ろを振り向くと、当たり前なのですが遠方に初めてヒマラヤを望むことができました。そこで改めてここは「ここはネパール！目の前の山が夢にまで見たヒマラヤ！」と思い自然と胸がわくわくしました。

しかし、そんな景色を堪能しているのも束の間、標高 4,300m に達すると次第に高度の影響が出始めました。やはり睡眠時は酸素の供給量も少ないせいなのか理由は定かではないが、深夜頭痛により眠れませんでした。そんな頭痛を抑える為にバファリンを服用したのち 30 分もすると効果は歴然と表れ、頭痛はあっという間

に消え去ってそれまでの食欲不振も回復しました。バファリンを服用することは高度障害の根本的解決になりませんが、その日一日を快適に過ごすという意味では頭痛薬（バファリン）は必須な薬で、今回最も使用頻度の高い薬でもありました。

因みに私は医薬品担当でないので正確ではありませんが私の見る限り、今回の登山で使用頻度の高かった薬は、下痢止め・整腸剤・頭痛薬・風邪薬でした。

### ついにチベット高原へ

Gosainkund での順応を無事に終えてカトマンズに戻ったのちチベット入国に備えて登山準備に取り掛かりました。

私たち学生は皆、遠征初体験の者ばかりでしたが、経験豊富な和田さん・千田さんを中心としてメンバー各自役割を分担してスムーズに準備を進めることができました。

チベットへ入国する日の朝、天井に荷物を満載した大型バスが宿まで迎えに来てくれた。社内はメンバーの座席以外は荷物で満載の状態。数時間バスに揺られると、ネパールとチベットとの国境の町、Kodari へと到着した。両国の間を隔てているかのように濁流と化した川にかけられた橋を渡れば、そこはチベットだ。

ただ、やはり中国領であるチベットとの国境だけあって公安による厳重な警戒が重苦しい雰囲気だ。濁流と化した川の轟音がさらに独特な雰囲気を醸し出している。

入国後メンバーは C T M A (China Tibet Mountaineering Association) が準備していたランドクルーザー3 台に分乗して思い出深き Zhangmu へと向かった。Zhangmu は断崖に創られた町で日用品等なんでもそろえることができる。Zhangmu を発つと次の町 Nyalam(3, 800m) まで

一気に登っていく。ここで効果を発揮するのが、ネパールでの高度順応。誰一人として頭痛等の高度障害を出す者はいなかった。

チベットではネパールと大きく違う点がやはり食文化の違いがあげられるだろう。中国領だけあって毎日中華料理。もちろん味は抜群においしいのだけれど、油の使い方が尋常ではない。とにかく料理は油まみれな状態。

さすがにほぼ全員、腹を下してしまい食事の際は食卓に必ず百草玉・正露丸と新三共胃腸薬が登場した。

### やっとBC到着

7日間のチベットキャラバンを済ませてようやくBCに到着した。ランドクルーザーはBCまで国道（未舗装の道）から外れて、現地で雇った案内人を乗せチベット高原の道なき道を走った。

増水した川の水にタイヤを完全に漬けながらも力強く渡り終える。無事に渡り終える度に乗車していた隊員より歓声が沸いた。しかし、いよいよ悪路の続く道にドライバーも限界に達し、先に進むことを拒み始めた。

結局予定していた地点よりも4km程離れてはいたものの、近くに水場もあってなかなか快適な立地条件であった。なにより、目の前には悠然と腰を据えるアブシを眺めることができとても気持ちがいい。

和田さんの判断によりここをBC (E. 82. 20. 4 N. 30. 06. 21 H 4, 800m) とし、いよいよここからが登山の本番。プジャ（安全祈願祭）をして、気持ちを新たに登山に集中した。

### BCでの生活

BCでの生活はコック ダワのおかげで極めて充実していました。日本にいるよりも充実し

ていたのでは?と思えるほどに。

メンバーは2人一つ3人用テントを共同で使用することになった。食事については毎朝コック補助のニマが甘い紅茶のモーニングティーを運んできてくれる。その後食堂テントへと移動すると、焼き立てパンやご飯に味噌汁が出てくる。昼食にはカレーパンや天ぷらうどん etc。

また15時にはパンケーキやドーナツと紅茶を欠かさず用意してくれる。夕食は巻き寿司やうどん、かつ丼などなど、メニューは日本食が中心。

チベットでキャラバン中は宿泊していた宿で油コトコテ中華料理にお腹がギブアップしていたので久しぶりのあっさりとした日本料理に皆舌鼓を打った。

朝昼夕食は決まってメンバー全員で食事をする習慣になっており、その際何気ない会話をする事で互いの体調などを知ることができ、充実したBC生活となりえました。

また夕方になるとエンジン式の発電機をまわしてパソコンを立ち上げ、ほぼ毎晩関係者からのブログへの書き込みを見ていました。甲南OB諸氏より沢山書き込みをしていただいても勇気づけられました。

ある日、高度順応を兼ねて近くの高台へ登りBCを改めてまじまじと見つめました。見渡す限り人っ子一人いないチベット高原にポツンと我々のテント村が出来上がっています。すると、何でまたこんな辺境の地にまでわざわざ足を運び、さらに山登りをするのだろうかとか少々感慨深い思いに駆られました。その答えは未だにわかりません。

甲南大山岳部の某OBの方がおっしゃっていたことを改めて思い返しました。「山に登りたいから登る」ヒマラヤに行く理由はそれだけで十

分と。

## ルート工作&荷揚げ

C2 手前のクレバス帯から登攀具を使用するようなルート工作を行った。

チームは2チームに分けてそれぞれ分かれてルート工作&荷揚げ作業を行いました。ルートには高度な技術を必要とする箇所は無かったが、私を含め学生は皆はじめての経験なので、千田さんより登頂までのルート工作のスケジュールの組み方や、休養の入れ方、荷揚げの時の重量配分など、タクティクスの創り方を教わる事ができました。

実際6ミリ程度のダイニーマロープをハーネスに結びつけ、トップでクレバスの上を渡る際はとても緊張した。



C1~C2にて

自分の歩いているところの両サイドには大きく口を開けたクレバスがあり、その間にいる自分の居場所は当然スノーブリッジの上であった。クレバスの底は暗くて見る事ができない。四つん這いになって体重を分散させてそっと横断。緊張の連続だった。

荷揚げに関しては、今回キャンプごとに移動

する方式としたので比較的量が少なくすんだ。ただし、自分たちだけですべての荷物を担いで登頂することを命題に掲げていたので高所での荷揚げは特にしんどかった。でも終わってみれば、そうすることで何物にも代えがたい充実感を味わうことができた。

## アタック ～ 登頂

9月20日アタック当日。前日にC2で後発隊と合流し、皆で一斉に頂上を目指した。天候は上々。さすが6,000m越えとあって気温の冷え込みが厳しい。アイゼンを付ける指先の動きも鈍くなる。この日は記念すべき日ではあるが、今までの登山活動を積み重ねてきた結果、今日に至ったので特別な思い入れなどはあまり感じなかった。とにかく今日 Summit して、明日BCに戻りコック ダワの美味しい飯を食べようと考えていた。

序盤から急な雪壁登りだった。雪質も堅く締まっておりアイゼンの爪の刺さり具合がとても気持ちがいい。気を付けなければならないのは雪庇とスリップのみ。メンバーで代わる代わるリードを交代してどんどん高度をかせいで行く。天気もまずまずであったが、山頂に近づくにつれてだんだん雲行きが怪しくなってきた。どうも帰路が不安になってきた。



クビ・カンリ頂上

そしていよいよ Summit に到着。メンバー同士で抱き合ったり、JAC や甲南の旗を掲げて記念撮影会。でも辺りは濃いガスで埋め尽くされていた。長居は無用なので撮影会を早々に済ませて下降の準備に取り掛かった。

先発隊により前日、下降路の偵察をしていたおかげで北面への懸垂下降の地点も容易に判断できた。1P 程懸垂下降で降りてあたりを見回すと何も見えず、ホワイトアウト状態。それに拍車を掛けるようにネパール側から強風に苦しめられた。

ホワイトアウトのおかげでチベット側のクレバスを警戒するがあまり、ルートがネパール側へずれてしまい、崖に出てしまった。無線の電池も尽きてメンバー間のやりとりが上手くできない。とにかく、このルートは明らかにネパール側へ寄りすぎていると判断し、登り返した。ゴーグルを外して眼を凝らし辺りを見るが、一向に視界は晴れる兆しがない。でも少し右側(チベット寄り)にコースを取ると、徐々に傾斜が

緩やかになって、高度を下げるにつれ視界も開けてきた。すると遠くの方にC2が見えるではないか。心底安心した。よし、これで帰れるぞ！と。しばらく歩くとC2に到着。登頂できた事もさることながら、無事に帰ってこれたことに、皆胸をなで下ろした。

翌日、そろってC2を撤収し、スノーバーやフィックスロープ等すべての登攀道具をザックに詰め込みBCへと帰路についた。



登頂の翌日クビ・カンリをバックに

### クビ・カンリ登頂後の第二の目標へ

クビ・カンリ登頂後にベースキャンプにて十分な休養を取ったのち第二の目標として周辺の山への試登を試みました。メンバー構成は登頂メンバー7名のうち、ルート工作中に足の小指を負傷した隊員1名を除く6名を2パーティーに分け、それぞれアブシ、ムクチュン（仮称）の試登を目標としました。

私は千田登攀隊長・下里隊員と組みアブシへ、他のメンバーはムクチュンへと向かいました。アブシ(6,254m)はBCから天気の良い日は常に望める位置にありました。その姿は何とも存在感があり悠然とした姿が印象的でした。

クビ・カンリを登頂したのに何故アブシを試

登するのかと問われた時、理由を説明するのは極めて困難です。しかし、あえて答えるのであれば、「目の前にこんな立派な山がある」しがつて「試登せずにはいられない」といった心情でした。また、このような辺境の地に来て、一つだけでは勿体無い。体力・精神的・装備品共にまだ充実しているし、登山日の猶予としてはBC撤収日から撤収準備を差し引いた4日間ありました。

以下は私が現地からBlogを通じて報告した「アブシ試登記」をそのまま載せたものです。

### アブシ試登記

9月20日

アブシへのアタック当日の朝、当日の行程をふまえて辺りはまだ暗い230に起床する。朝食中にテントからあたりを見渡すと真っ暗。当てにしていた月明かりは全く役に立たない…。辺りが明るくなるまで出発を遅らせようか議論がされた。実は前日のアプローチの段階で、テント地へ早く到着することができたので、下部より翌日のアタックルートの偵察を済ませていた。その結果、当初の予定していた国境稜線から派生する北西尾根 or 国境稜線は氷河の侵食で、尾根の末端はやせ尾根となり登攀不可能。その為、北西尾根の北側の氷河をつめ、尾根へ上がったからピークを目指すラインを見出していた。

しかし下部からは、果たして北側の氷河から北西尾根へ雪が繋がりがプラトーへ上られるのか、たとえ上がったとしても、その先が登攀可能なのかどうか、不安と期待が入り混じる。

議論の結果、前日の下部からの偵察により、氷河上のラインは読めていた為、ヘッドランプをつけて行動することにする。

ピッケルを刺してクレバスが雪に隠れてヒドゥンクレバスと化していないか慎重に確かめつ

つ、朝のしまった雪にアイゼンを軋ませながら  
どンドン氷河をつめていく。

しばらく進むと早速我々の行く先に大きな口  
をパツクリと開けたクレバスに行く先を遮られ  
た。そこで左右を見渡し横断できそうな場所を  
探し、ピッケルを突き刺しながら慎重に渡る。  
もし、足元の氷化した雪が崩れたら即座に奈落  
の底である。このようなクレバス帯はしばらく  
続き、下山時に横断箇所を間違ひ転落しないよ  
うに赤旗を立てながら前進する。しかし赤旗は、  
上部でも使うため、最小限しか使えない。

迷路のような大クレバス帯を抜けきったころ  
には、辺りは明るくなり、横断してきたクレバ  
ス帯の全容がはっきりと分かる。大きいものは  
深さ30~40mはあろうか。大クレバス帯を抜け  
ると傾斜のゆるい雪原となっており北西尾根へ  
と繋がっていきそう。しかし、先はカーブして  
いるので、そうだと確信が持てない。そんな  
不安を抱きつつもクレバスが見当たらないので  
ドンドン進む。すると尾根へ伸びる急な雪壁が  
私たちを待ち構えていた。「ヨッシャ！これで北  
西尾根まで登れる！」

その急な雪壁は尾根上のプラトーまで伸び、  
その中腹にはクレバスが隠れているのが見て取  
れる。ロープを出すか否か谷が偵察しに行く。  
クレバスは深いものの、少し迂回すれば何とか  
ノーロープで行けると判断。慎重にクレバスの上  
を越え、急雪壁をこなし無事プラトーへ出る。  
そこから上部を眺めるとジャンクションピーク  
がガスの中、薄っすらと見える。相変わらず上  
部はガスがかかっており何とも気が重い。

小休止の後、雪稜を一気に駆け上がろうとす  
るが、プラトーの高度が5,600m、1mも登ると  
直ぐに息が切れて立ち止まってしまう。高所では  
一定のペースを保つことが難しい。約5,800  
mまで雪稜を上がる。その先には岩の小ピーク

が現れた。ネパール側の急でガレたルンゼを少  
し下り、小ピークを巻いてコルに出ることがで  
きた。

これより上部は、やせた岩稜でガスも晴れず、  
先のルートは不明確。20分程待機するが、いっ  
こうにガスが晴れない。おまけにネパール側よ  
り強風に乗ったあられが顔を打ちつける。フー  
ドをかぶり顔をそむけたくなる。

8:00 ネパール側の急な雪壁を登るのも一つ  
だが、雪が繋がっているか不明確なので、千田  
さんがこの先の岩稜を偵察に行った。しばらく  
すると無線で「何とか登れる。気を付けて登っ  
てきてくれ。」と入る。

そこは浮石が氷によりコンクリートされてい  
るだけのとても不安定な岩稜であった。その上、  
スラブ状の岩の上に薄雪がちりばめられており  
安易にアイゼンをおくと一発ではじかれてスリ  
ップして滑落してしまう。

岩稜の両側は1,000m以上スツパリと切れ落  
ちている為、スリップは絶対に許されない。一  
度岩稜の右側に落ちればネパール側へ、左はチ  
ベットへと、ノーロープのバンジーである。慎  
重に岩稜を登り千田さんと合流する。その先は  
ロープがないと突っ込めない為、1P千田さん  
がリードする。ハーケンを2本打ち、岩壁を乗  
っ越す。ロープはフィックスされセカンドに下  
里が登り、谷が最後にハーケンを回収しながら  
登る。クラックにジャミングしたり、アックス  
をかませてトルキングしたりと多用なクライミ  
ング技術の応用である。

その後、一時も気を許すことができない岩稜  
帯に行く。相変わらず、辺りは真っ白雲の中。  
加えて、強風の為に岩稜上で立つことができず  
に四つんばいで進む。

その後、もう一箇所だけロープを出した後、雪稜に出る。そこから上部に行くにつれてますます傾斜が増し、急雪壁となる。その雪壁を登り切るとジャンクションピークに出た。しかし、この時既に手持ちの赤旗は使い切り、これより先、突っ込むか否か議論がなされた。

BCの和田さんに無線で、今後このガスがはれる傾向にあるのか調べてもらった。それによると、徐々に回復傾向にあると…。にも関わらず、現場の状況は小康状態。むしろ悪化しているのでは？と感じられる。何とも悩ましい…。

ビバークとの意見も出たがアブシはセカンドステージ。余分なリスクを負いたくない。和田さんの予報が悪化するのであればすぐさま撤退するのにな～。

しばらく様子を見たが、回復の兆しがないので、現場の判断により1210撤退を決断。残り標高差約200m。BCに居るときにはこの先の様子が確認できていた。雪庇を気にしなければならぬが、雪稜のステージである。悔しい。

ジャンクションピークより1P懸垂下降で下り、その後はバックステップで慎重に下る。ロープを出した箇所の終了点には赤旗をさしており、岩にスリングを巻きつけ懸垂下降の支点とする。それ以外の箇所ではバックステップで慎重に下る。

その途中、ロープなしでは危険な箇所があり、同様に岩にスリングを巻きつけネパール側へ1P懸垂下降して雪壁に下りる。そこでのスリップはネパールへの大滑走であるため、慎重にバックステップで下る。数百メートル下り、支尾根を巻きようやく元のコルへと戻ることができた。ここまで戻ってくると危険箇所の8割方はクリアー。後は雪稜を一気に下りプラトーへ。そこから雪壁を1P懸垂下降する。

…

しかし着いた所が何とも気分が悪い！クレバス上であった。静かにその場を立ち去り、緩い雪原を下る。登行時に比べて雪が吹き溜まっており、疲労感と重なり、靴が重く感じられた。しかし、帰りのクレバス帯では疲労と言ういい訳は通じない。一度気を抜くと2度とBCへは戻れない…。気を入れ直し慎重にクレバス間の細いスノーブリッジを渡る。

クレバス帯を抜けると後はテントまで一直線である。安堵と疲労感によりどっと疲れがでてくる。上部の雲は一向にはれる兆しがない。アブシの頂は私たちに最後まで微笑んではくれなかった。



アブシ(6, 254m)

翌朝、テントをたたんで氷河を下る。その際ひっそりと私たちにその頂を見せてくれたが、直ぐにまた雲のかなたへと消え去ってしまった。これで氷河を歩くのも終わりかと、噛みしめながら写真を撮る。届かなかった頂があるであろう天空を、複雑な思いで睨みながら……

## 最後に

この度は本遠征に御支援下さり、改めてこの場をお借りしてお礼申し上げます。

本当に有難う御座いました。

この登山が成功を遂げたのも偏に皆様方からの温かいご協力ご支援を賜ることができたことと存じております。

私はこの遠征を通じて多くの人と接して、沢山の事を経験しまた得ることができました。

2009年4月から社会人の第一歩を踏み出すのですが、これらを今後の人生の糧として物事

に取り組んで参りたいと思う所存であります。そして、絶対にもう一度ヒマラヤに登りに行くこと記して最後とさせていただきます。

\* \* \* \* \*

日本山岳会関西支部・同志社大学山岳会 共催

### 「クビ・ツァンポ源流域学術登山隊 2007」の成功を祝して寄せられたメッセージ

#### クビ・カンリ登頂 雨宮宏光

本日(9月14日)、日本時間午後3時55分、千田登攀隊長以下、学生5名全員、クビ・カンリ初登頂しました。チベットの日本との時差は約3時間です。

#### クビ・カンリ登頂 越田和男

遠征隊のHPの掲示板に祝意と謝意を表しておきました。登山活動以後の調査活動も気合を抜かず楽しんで貰いたいと祈念しております。

(クビ・ツァンポ登山隊 掲示板掲出文)

祝クビ・ツァンポ初登頂初

登頂おめでとうございます。

後輩谷君がお世話になっております。お陰様で甲南山岳会の多くの会員がHPを通じてこの遠征を身近に楽しんでおります。今日の写真で登頂を実感しました。同志社山岳部とJAC関西支部のご尽力に厚く御礼申し上げます。

残された登攀活動終了後の活動も気合を抜かず楽しんで下さい。

谷君、土産話を楽しみにしております。

#### クビ・カンリ初登頂 福田信三

谷君そして隊員の皆様、クビ・カンリ初登頂、おめでとう御座います。

と共に今までの努力が上手く実って良かったね。

くそ暑い関西にチベット涼風を感じました。日本に帰るまで、気をつけて。

### クビ・カンリ初登頂を祝す 廣瀬健三

谷君、頑張ったようですね。はじめての海外遠征で、予定どおり登れたのは幸運。これも貴兄の普段の努力の賜物でしょう。又、和田氏、千田氏という凄い登山家に率いられて行動でき、学ぶ点多かった筈。現役の山岳部員達と未踏峰に登れた事、良かった。

御同慶の至り。カトマンズに戻るまで、アクシデントに遭遇せぬように。元気に帰着して、カトマンズで森本カンロク兄達と存分に祝杯をあげてください。

#### 追記

初登頂は幸運だったと記しましたが、千田登攀隊長の「クビ・カンリ初登頂記」を再読すると、相当厳しい状況下での行動だったようです。

優れたリーダーのもと、隊員の皆さんが日頃鍛えし力を發揮、気力を振り絞って目的を達成された事と思います。敬意を表します。

### クビ・カンリ 祝初登頂 牧野 宏

谷君 おめでとう。

本当に嬉しい、いいニュース、美しい写真に感謝感動。

帰路お気をつけて。

### クビ・カンリ初登頂 武田雄三

谷君、夢の実現オメデトウ。「初登頂成功」本当に良かった良かった、土産話を楽しみにしています。

残りの日程も十分楽しんで来てください。

遠征をご支援戴いた山岳会の皆様に、あらためて御礼申し上げます。



## — 随 想 —

### 最近はコレ

## ジョギングで健康維持

矢吹 操 (昭45理)

昭和41年理学部に入学。体育会系クラブに入りたいと思うも小生、球技が全く駄目。中学、高校と文科系クラブ。よって個人競技でチームの足を引っ張らないクラブを希望。

入学当時、小学校6年生の同級生、南里君から山岳部への誘いがありましたが、学業、実験、お遊び等々でズルズルしているうちに3回生。

中途からでも入部はOKと言う事と、1年先輩で理学部の赤田さんも3回生からと聞かされ入部を決意。

さて、社会人になってからは転勤族。大阪、東京、岡山、香川、ブラジル、徳島、愛知と単身赴任での勤務。

約20年前頃からウォーキング、ジョギング、マラソンといった足腰を鍛える運動が流行っていました。

単身赴任ということもあり、食事もいい加減でしたので、健康維持のため手っ取り早くできるジョギングを始めました。

用意する道具、別に無し。好きな格好でよし。但し、靴だけは専門店で値段が張っても自分の足に合った靴にした方がよい。

小生の場合、休日だけのジョギング(当人はマラソンのつもり)を始めました。

お酒を多く飲んだ翌日、体調不良、雨が降っているときはパス。又、その日の調子によって、10km走るつもりが8kmになったり、15kmになったりと誠にいい加減。だからこそ継続していると思っております。

ブラジルに赴任していた折、休日に社宅から工場まで走っておりました。その時、現地の人

から「ブラジルで走るのは泥棒と警察官だけだ。走るのは止めていた方がよい。」と言われました。しかし、ブラジルでもマラソン大会はあったのです。

毎年12月31日、サンパウロ市の大ビジネス街、パウリスタ通りからスタートするサン・シルベストレ・マラソン(約15kmのコース、賞金も出る)大会があります。これに参加しました。

沿道の観客からは「シネース(中国人)」やら「コーリアーノ(韓国人)」と声援をかけられました。残念なことに「ジャポネース(日本人)」との声援は掛けられませんでした。小生の顔が日本人顔でなかったのか、あるいは、今までこの大会に日本人の参加がなかったのかどうか？

それはさておき、ジョギングが健康維持につながっている、ジョギングで健康管理が出来ていると固く信じて、体調やグランドコンディションが良いときに武庫川の河川敷(西宮市側)を走っております。

北は報徳学園の横、南は阪神武庫川駅南の全長7kmの間。500m置きに距離の標識があり、その日、何km走ったかが計算できます。

走り始めた39歳頃は10kmがちょうど1時間でした。そこで、大会に参加し完走して正式記録を入手しようと思いました。

私の場合、初めからタイムは諦めていました。持久力をつけるために徐々に距離を伸ばすことを考えました。ただし10kmが50分を切れるまで頑張ってみよう。

東京勤務の折、千葉県佐倉市での大会、朝日佐倉健康マラソンに参加しました。雨が降る寒い日、スタート、ゴール地点は学校の運動場。地面はジュークジューク、からだはビショビショ。それでも49分57秒。

それ以降、20kmかハーフマラソン大会に挑戦することになりました。でも、意外に20km、ハーフマラソン大会は少ないです。

10年ほど前、芦屋ハーフマラソンに参加、2時間6分38秒。これが小生の記録。ハーフですよ。お間違いなく！

その後、仕事の都合や加齢というか、体調の関係で練習も少なくなり（ズル休み）、現在では2時間20分がやっと。

昨年9月に60歳。還暦までにはフルマラソンを完走したかったのですが、小生の不注意で事故（自動車事故ではありません）、半年間リハビリ、運動が出来ない状況でした。

今ではほぼ元通りの身体といってもリハビリはまだ続けています。兎に角、フルマラソンに挑戦し、時間に関係なく完走したく思っております。

因みに、健康診断では血圧以外、ほとんどの項目は正常範囲内。

汗をかいてシャワーを浴び、スッキリ。その後のビールの美味しいこと。スポーツをされる大半の方が、そう思っておられると勝手に推測しております。このときのビールの味が忘れられないがために、ジョギングをしているのかもしれない。



## 関東で一人ぼっちの健康維持

身近で手軽なスポーツを・・・

大勝規弘（昭57理）

朝、起きると突風の音が響いている。部屋に保管しているロードレーサーを横目で見ながら『自転車は諦めよう。』と独り言を呟く。マッスルトレーナー（重りが入った靴）でのウォーキングに切り替え、家の周辺を一時間歩く。

今から10年前の30歳後半、健康に無頓着な生活を送っていましたが、体重が80kgに近づき体重を落とすのも動きが悪くなっている体では中々体重が減らない事に気が付いた。体重に影響され難い運動を模索していたら会社の何気の無い会話からヒントを得た。『自転車の速度って何キロでるかなア？』『そら、30キロ程度は出るんとかやうか。』『それやったら、電車通勤と変わらんア。』とこんなノリでマウンテンバイクの通勤を始めた。片道30キロ、一時間で到着する予定が二時間かかった。ただ、朝の風が心地良い、自転車の速度が今まで見た事も無い風景を見せてくれる。やたらスカートが短くした女子高生が私の前を自転車で塞いでいる。抜かすのを躊躇いながらも前を急ぐ。皇居、東京駅や日比谷公園も新鮮で都心で木々の香りを満喫する。秘密のご褒美を貰ったような優越感を感じる。それでも仕事を終えた帰りは気が滅入った。サドルに座った瞬間、お尻に痛みが走る。真っ暗な道路では自動車がストレスをかすめられ、肝を冷やされる事も度々あった。都心の景色も朝とは違い、やたら、ラーメン屋の黄色や焼肉屋の赤色の看板が目立つ。疲労と空腹と後悔の戦いの中、やっとの思いで帰宅。帰路は苦痛だけだったが、往路の楽しさが忘れられず、

総務からは『何か事故があっても労災になりませんヨ。』と脅かされながら続ける事になる。

体重の変化よりも体型の変化が大きく、ブヨブヨだった体が動ける体が変わっていた。自転車にも手を加えた。タイヤをオフロード仕様のゴツゴツしたものから細身のロードタイプに変更、ブレーキも制動力の高いものに換え安全性を増した。サドルもお尻が痛くならないタイプ（実際はあまり効果がありませんでした）に変更。二時間かかっていた往路も一時間15分で到着するようになった。時間が早くなったので当初遇っていた女子高生の姿は無くなっていたが、季節折々で変わる街の姿に感嘆していた。

とは言え、夏の暑い期間は照り返しもきつく、新たな（涼しい？）スポーツへ挑戦しようと考えていた時、たまたま、町内の回覧板でカヤック体験教室を見つけました。一人では寂しいので会社の同僚と申し込む事にしました。カヤックとはクローズデッキ（ボートのようにお椀型でなく、中央に乗り込む所が開いているタイプ）でパドルと言う一本の棒状の両側に水を捕らえる面を持ったもので手漕ぎする舟です。高校のプールでカヤックを体験するのですが、当初、企画者側は体験教室と言うよりもロール（転覆しても体の反動で反転し元に戻る）を行うための教室としたかったようでした。ただ、参加者は本当の初心者が多く、結局、パドルの使い方や乗り込み方などの初心者教室（回覧板の触れ込み通り）になってしまいました。インストラ

クターの人達が何でも無い行為でも大騒ぎです。プールなので流れも無いのに乗り込む事すら難しく、乗り込めたとしても不安定でグラグラ左右に揺れる。ジッとしていても揺れは止まらない。上半身はパドルを持ったままで平静を保とうとしても顔は強張った状態で下半身を小刻みに動かし、転覆する恐怖と戦っていた。度胸一発、パドルで漕いでみる。すると自転車と同じでパドリングしている間は安定している。最初は安定させるためにパドリングしていましたが、その内、体が自然に安定させる方法を覚えてくれた。不安定だったので気付かなかったが、水面を滑るように進んでいる。公園によくある手漕ぎボートとは比較にならないスピードでした。パドルに角度を付けて水に浸けると進路も急激に変化する。カヤックは船底が平らなので直進性が無い代わりに回頭性が高い乗り物である。パドルの操作で真横にも移動できる運動性能は激流の中でも自由に操船でき、狙ったポイントに操船している自分の姿を想像するとその魅力に引き込まれてしまった。その教室が終る頃には同僚とカヤック購入を計画していた。カヤック専門店が車で30分のところにあり、その店で買うと初心者教室は無料といった特典もあり早速購入。同僚は購入予算が付かず、断念。一人でカヤックを楽しむ事になった。

荒川上流の玉淀と言うところに静水（流れが緩いところ）があり、そこで初心者教室を受けました。激流で転覆した時、すぐに復帰できるロールをマスターするのが玉淀でのメインテーマ。転覆すると重量の重い人の頭が下になり浮力があるカヤック本体は上になるので安定してしまいます。だから、その状態から復帰するには技術が必要な訳です。体をひねる事で重い頭を水面近くまでもっていき、反動でカヤック

（下半身）・上半身・頭と水面に上げていくのです。他に何人かの初心者はいましたが、ほとんどが二人一組。一人が乗り込んで転覆、もう一人が支え、転覆からの復帰を練習するものでした。ただ、転覆すると上下左右が混乱し、体がどちらの方向を向いているか判らなくなります。そんな時、もう一人が支えながら体勢を整えたり、息継ぎをさせたりして援助しながら練習するのです。カヤックは転覆しても水が入ってこないように搭乗者とカヤックの間をスカートと言うもので塞いでいます。一人ぼっちの私は一人で転覆し復帰出来ないと一度舟から脱出（これを脱艇と言う）します。舟の中は水浸しになり岸まで泳いで引っ張り上げ、中の水を全部出して再び乗り込むと言った効率の悪い練習を行うしかありませんでした。他の組は濡れる事もなく、私が1回脱艇をする間に何回も練習し、お互い意見を言い合っていました。一人の者同士で組を組む場合もありますが、行ってみないと組めるかどうかとも判らない状態です。ビショビショになるだけで苦痛でしかなく、最初の情熱は冷める一方でした。仮にロールが出来ても激流に一人で入るのには問題があります。カヤックは上流から下流に降りていくのでカヤック搬送用に最低2台の車も必要です。複数人数が必要なスポーツは予定が決まらない者にとって問題はある事を痛感させられました。

一人で出来るスポーツはやっぱり山歩きと考え、関東の山歩きを捜してみました。関東では秩父に比較的安易なハイキングコースがあり、ここならば危険と言ったレベルにもならないので、行ってみました。この辺の山は小さな子供から老人まで楽しめ、危険とは程遠い山でした。複数のコースを結んで長いコースにしたりしました。最初は楽しかったのですが、一通りハイ

キングコースを歩くと次に行きたくなくなり  
ました。(実際は一人の山歩きが寂しいので楽しみ  
より虚しさの方が大きかったと思います。)

やっぱり、自転車中心で考えようと再認識し  
た訳ですが、会社での立場が係長から課長へと  
変わっていく中、自転車通勤もやり難くなった  
時、土日に集中して走る事を試してみました。  
サイクリングロードで走ってみたのですが、走  
っている自転車はロードレーサーと言われるド  
ロップハンドルで速度もマウンテンバイクとは  
全く異なる速さで走っていました。サイクリン  
グロードではマウンテンバイクは邪魔者でした。  
ロードレーサー購入を計画したのですが、今度  
は天井知らずの金額にビックリ。体に合わせて  
サイズを選ぶような買い方をすると知ってもど  
のようにしたら良いかも判りませんでした。今  
と違って敷居が高く感じたものでした。その敷  
居を低くしたのは予算でした。用意出来る金額  
に限度があったのでその予算で購入しようとす  
ると年度替わり前の格安品でした。品質はそこ  
そこ、金額はリーズナブルと言う事で今のロー  
ドレーサーを購入。自転車と言うならばマウン  
テンバイクもロードレーサーも同じと感じられ  
ますが、乗ると全く違う乗り物です。登り坂で  
も加速出来る程の能力です。自重14Kgのマウン  
テンに対して9Kg弱程度のロードレーサーでは  
大きな変化があると考えませんでした。実際  
乗ってみると車体の軽量化は走行性能では劇的  
でした。平均速度は20Km/時間から30Km/時間  
に、距離は倍になっても疲労度は少なく、最高速も  
50Km/時間に。こんな自転車で通勤してみたの  
ですが、楽に行ける一方、タイヤの磨耗が激しく  
タイヤ代を惜しみ止めました(マウンテンが勿  
体無いのが主な理由ですが)。今はサイクリング  
ロードを3時間で78キロ走るのが私の自転車ラ

イフです。

ロードレーサーで長続きしているのは走行時  
間を午前中に行っている事が挙げられると思いま  
す。カヤックは自動車で片道2時間かかり、山  
も電車で1時間半、ほぼ一日潰れてしまいます。  
その点、自転車は家を出た瞬間から運動開始な  
ので時間を有効に使えます。午前中になっている  
のは体力的な理由です。午後まで走ると走行  
距離は100キロを超え、月曜日の仕事に差し障  
りが出ると思われるからです。一度、160キロ  
近く走って見ましたが、腕の力も抜ける程消耗  
し、体力が戻らない年齢を痛感しました。また、  
午前中に終わる事は午後に家族サービスを行え  
る点も大きなメリットです。

私の所有している自転車が最新のロードレー  
サーでない事も影響しているかもしれません。  
自転車は集団で走ると先頭以外は風の抵抗がな  
い分、体力が温存出来、全体として早く走行す  
る事が出来ます。冬山のラッセルと同じ原理で  
す。私のような単騎の走行者も時々この集団に  
入れてもらって早い速度での走行を行います。  
この場合、先頭になったら全体を引っ張って走  
るのが暗黙の了解ですが、年代物の自転車だっ  
たり年齢がいった人ならばローテーションに加  
わってはかえって足を引っ張るのでローテーシ  
ョンには入れません。ヘルメットやサングラス  
で顔が見え難いのでどうしても自転車で判断し  
がちです。最新の自転車や高額な自転車はロー  
テーションに入るのが原則ですが、入って遅く  
なると『何だ?』って事になる訳です。その点、  
私の自転車だと義務もなく、集団走行の楽しさ  
だけを享受できます。最近はこの集団走行につ  
いて行くのもやつの時もあり年齢を感じてい  
ます。

また、天候や路面の状態での無理もしません。一人で行えるメリットは止める事も簡単に出来る事です。季節風の場合は風が吹き続けるので走行に危険はありませんが、冒頭にあるように突風の吹く場合は止めます。自動車と併走している時に突風が吹くと結構危険です。水溜りが残っている時も同様に中止です。そして、自転車でサイクリングロードを走っている事は私の周辺で何もトラブルが無い事なのです。3月は彼岸花で赤く染まり、その後、黄色の菜の花とピンクの桜の花を見ながら走るのはとても幸福を感じる時間です。



一人でしかも手軽でいて運動量が多い健康維持方法は今のところ自転車ですが、職場でのトレンドはマラソンです。東京マラソンの影響もあり、また、皇居がランニングコースとして意外と有名で女性でも安心して走れるスポットらしいのです。一周5キロ、所々に交番があり警察官が24時間詰めている。何かの事故を想定しても比較的安心な場所なのは事実です。今、これに参加するかどうか悩んでいます。今度は集団なのである程度の不自由さを我慢しなければなりません、強制力が働くのも事実です。最近はやらない理由を考える事もたまにあるので良い機会とも考えるようになりました。ただ、行き成りランニングも自信がないので取敢えずは自宅周辺を回ってみようかと考えています。

関西に居れば生まれ育って所でもあり、仲間を集めるのにも苦勞する事が少ないと思います。地の利もあり六甲など運動するスポットに困らないと思います。今現在、皆様も何らかの健康維持を行われていると思いますが、何かの都合で仲間が集まらない場合は自転車をお勧めします。ママチャリから想像している自転車とロードレーサーでは全く違う乗り物です。高齢者の方もそれなりのスピードで走っておられます。マラソンでは足が心配な方も自転車なら体重が自転車に支えられているので安心して始められます。景色の変化が少ないウォーキングに比べれば色々な風景に出会えます。ピチっとした服装に抵抗があると思いますが、誰も服装なんか見ていません。自転車に乗るのに楽だからそんな服装になっているだけです。どうしてもロードレーサーに抵抗がある人は折りたたみ自転車と言う方法もあります。少し値段を出せば軽量の折りたたみ自転車もあります。京都や奈良、鎌倉などでの移動手段としても良いのではないのでしょうか。また、ツーリングでも行きは自転車、帰りは電車も可能です。これなら服装やスピードを意識しなくても乗れるので家族とゆっくり走る事もおかしくありません。皆様も自転車で健康維持をされては如何でしょうか。



## 山の男の歌

中澤章浩

(甲南大学昭和51年卒業)

新聞の広告欄で標記のCDが売り出されているのを見つけた。今や団塊の世代を対象に青春の歌や昔の演歌が編集されCDセットとして手頃な値段で売り出されている。

果して山の歌が商業ベースに乗るかどうかわかりながら心配しながら、かつて山で唄い覚えた歌が懐しく、正調はいかなるものかという興味も手伝ってすぐに申し込むことにした。

その後届いたCDを眠い目をこすりながら慣れない手つきで再生してみた。

低音で流暢に唄い上げるプロ歌手の声を聴きながら三枚のCDを一気に聴いたが、果して、違和感と後味の悪さが残るだけだった。

その訳を自分ながら分析してみると、先づ第一に楽器が用いられていること、第二に歌詞が思っていたのとはかなり違い、洗練されていないイメージが常につきまとったこと、第三に唄い方に余裕が感じられること。この三点であった。

他のテントに撤収を宣言し、断わりながらも怒鳴るようにして大声で、やがてしんみりと唄ったあの歌。なけなしの酒に酔いながら合宿を振り返りつつ、先輩の口伝え通り手拍子で唄った歌。

童謡あり替え歌あり艶歌あり、しかしやはり

「びかー」は山の歌、山男の歌であった。

剣見るな～あら 赤谷～ん尾～根でよ ♪

空きっ腹に最後のエッセンを詰め込みながら合宿の辛さを忘れて唄う歌。男の歌。

あの歌が本当の山の男の歌だ。歌詞はおぼろげながらもCDには追隨を許さない。

CDはお蔵入り、おそらく二度と聴くことは無いだろう。



## 一 紀 行一

### “風の大地・パタゴニア” 紀行

福田 信三 (昭39理)

2008年2月22日

ヴェノスアイレス発バリローチェ行きの飛行機に雷が直撃。その瞬間、機体が震えた。そして、機内がシーンと静まり返った。しばらくして、“今の落雷で機体のシステムがダウン”のアナウンス。結局、6時間遅れでバリローチェに到着した。

バリローチェは、ブエノスアイレスから、1,700km南西、海拔770m、飛行機だと、ブエノスアイレスから約2時間の距離である。南緯40度、パタゴニアの北端に位置する。そして、ナウエル・ウアピ湖に面した、アンデス山脈の麓にある、スイス系の移民が作り上げた美しい町で、建築様式や、料理などに、その影響を感じることが出来る。周辺は素晴らしい自然に囲まれていて、アルゼンチンのリゾート、スキーのメッカでもある。日本での情報は少ないが、近くであれば軽井沢の比ではないと思う。

われわれがここに来た理由は、陸路、国境を越えてチリ側に移動するため、明日、バスと船を7回乗り継いで行く。

2008年2月23日

快晴無風、8時45分発。いよいよアンデス山脈越え。3つの湖を越えていくため、バスを4回、船を3回乗り換える。途中はバリローチェ国立公園の景観を楽しみながら進む。見上げればアンデスのトロナドール山、3,491m、目を落とすとコバルトブルーの湖水。しかし、落とし穴もある。国境の入国審査。2時間以上もかかってしまった。理由はどんどん来る観光客を捌く検査官は一人。そして決してあわてず、入念

に荷物をチェック。

我々はただひたすらに待つのみである。



国境のトロナドール山

1日ばかりでの移動がまさに観光ということになり、中でもオソルノ山はハイライト。富士山より約1,000m低いものの、その山容はチリ富士そのものである。夕刻、プエルト・モンに着いた。



オソルノ山

2008年2月24日

ホテルを出ると町中が異常な霧の中で先が見えない。極度の乾燥で草木が自然発火し、その

煙が早朝の湿気を霧化してしまうようだ。そのためか焦げ臭い匂いが漂っている。これが原因で、飛行機が飛ばず、約5時間待ち。どうも今回の旅行は飛行機についていない。

しかし、空港を出てまもなく眼下の景色はまさにフィヨルド独特の複雑な入り江。テレビで見たノルウェーの海岸線とまったく同じ形状に驚いた。氷河の侵食は北半球も南半球も同じなのだ。約2時間の飛行だったけれど、目を見張る景観に窓に顔をこすりつけ、その時を忘れていた。

プンタ・アレナスに昼過ぎに到着。ここは、南米大陸最南の都市で人口は12万人でマゼラン海峡に面している。1520年に、マゼランがこの、太平洋と大西洋を結ぶ海峡を発見したときからの歴史を持つ町であり、海運上非常に重要な位置にあったため、厳しい気候にも関わらず、発展した。しかし、パナマ運河開通により、南パタゴニアの静かな町に戻った。町の高台から見るマゼラン海峡は思ったより幅が広く、対岸のフェゴ島がかすんでいた。

市内のマゼランの銅像などを見た後、バスは一路プエルト・ナタレスへ。途中、マゼランペンギンの営巣地へ立ち寄った。



営巣地へ向かうマゼランペンギン

背丈約50cmの中型ペンギンで、ちょうどこの時期は昨年10月に産卵した赤ちゃんペンギンを見ることが出来、産毛でモコモコだった。サイズは大人並みだが目はやはり愛くるしい。

2008年2月25日

プエルト・ナタレスはパイネ国立公園の入り口の町というだけで、特に見るところは無いので早速バスへ乗り込む。途中、国境に近い牧場で昼食、羊の丸焼き、アサード。“昼に食べてもアサードとは？”なんてギャグがすっ飛ばすほどうまい。まず焼き方が違う。鱈や秋刀魚の開きのように背骨を中心に開き、岩塩を塗って串で炉端焼きする。朝9時頃から約3時間、裏表をこんがり焼き上げる。部位によって味は異なり、いずれも美味しい。さらに、赤ワインにぴったり。口の中で肉とワインが噛み砕けて融合し、新たな味を出してくれる。牧童風の親父が肉をどんどん持ってくる。そしてその奥さんが、どんどんワインをついで行く。今回の旅行での最高の美味。“メタボ”は忘却の彼方へ。更に、はるか草原の彼方には、トーレス・デル・パイネの岩峰がかすんで見えた。思わず“天宝”。



アサード(貼り付けのラム)

アマルガ湖が見え始めるといよいよ公園は近い。今日はとりあえず目的のホテルまで直行。トーレス・デル・パイネの岩峰を右手に見ながらバスはクネクネ道を進んだ。蛇行するセラノ川の袂のホテル、Rio Serrano に到着。

2008年2月26日

なんとなく眠られない夜を過ぎた早朝、窓を開けて仰天。真っ赤に燃えたトーレス・デル・パイネの岩峰。この赤はなんという赤だろう。そして刻々と変化する。思わずカメラを探し出して数枚撮ったけど、結果は判らない。自分の技術では無理だろうと思い、目に焼き付けた。いよいよ最大の目的のひとつ、トーレス・デル・パイネへ。この岩峰はパイネ国立公園の看板的なもので、3つの岩峰が並んでいる(2,700m・2,800m・2,850m)。因みに“トーレ”は英語の“タワー”の事らしい。そして、もうひとつの目玉、パイネ・グランデ(3,050m)、パイネの中心にもかかわらず、Tシャツでも暑い。そして、無風。

旅行者にとっては幸いだけど、風の大地はどこへ？



パイネの岩峰

グレー湖、湖畔の道をグレー氷河までトレッ

キングを開始したが、湖の水位が高く路が水没のため、中断せざるを得なかった。やはり、温暖化で氷河の融解が激しいようだ。おかげで、サルトグランデの豪快な滝、その背後のパイネ・グランデの主峰(3,050m)を見ることが出来た。

昼からはトーレス・デル・パイネに近づくトレッキング。ノルデンフェール湖の対面に見えるトーレス・デル・パイネは1200万年前、氷河によって削り取られたために出来たという。尖った3つの岩峰を分ける深い谷間、そこにモレーンの急傾斜を見ることが出来る。この奇岩とも言うべき姿はパイネ国立公園の看板であることに間違いは無い。周辺の湖の間を走る道路のいたるところから、向きを変えてその雄姿を誇っている。



パイネを覆うレンズ状の雲

2008年2月27日

この日は、アルゼンチンのカラファテへの移動日。チリ側のフィヨルドが入り組んだ地形に対して、アルゼンチン側は広大なパンパ(平原)。国境はそのパンパの真ん中にあり、道路を遮断する白い棒とバラックの管理棟があるだけ。本来は風が吹きすさんでいるのだろうけど、今日は乾燥して暑い。自然発火の可能性を予測する看板は、危険の赤印となっていた。360度地平

線で凹凸の無い平坦が無限に広がっているように見える。パタゴニア地方の面積が日本の3倍というのを、ここで知らされたようだ。

何も無いかに見えるパンパにもらくだの一種、グアナコや狐がのんびりとえさを食べている。入国手続きは約2時間。これが普通のような。一路カラファテへ。



グアナコ

2008年2月28日

カラファテはロス・グラシアレス国立公園の観光基地の町で、氷河の水を満々とたたえたアルヘンティーノ湖に面している。湖の先にアンデスの山々が聳え立っている。その山脈に太平洋からの湿った風がぶつかり大量の雪となり、氷河となってアルゼンチン側に流れてくる。最低気温でも $-5^{\circ}\text{C}$ と高いために、融解、凍結の繰り返しで短いサイクルで繰り返され、斜面をどんどん流れてくるらしい。パタゴニア南部には40以上の氷河群が広がり、その規模は南極大陸、グリーンランドに次ぐ。氷河群を代表するペルト・モレノ氷河は地球温暖化が叫ばれる中、現在もお活発に成長を続けており、年に600m以上の速度で前進、アルヘンティーノ湖に崩れ落ちる。

ペルトモレノ氷河を目の前に見たとき、その

美しさ、その青さに息を呑んだ。この汚れのない吸い込まれるようなブルーは何なんだ？ ヒマラヤやニュージーランドで見た氷河は土や埃の堆積で薄汚れている。確かにその下には氷河ブルーを見ることが出来るのだが。氷河崩壊は湖水へ崩れ落ちるばかりではなく、内部崩壊や割れの方が頻繁で、銃声のような“パン”、“バチ”という音は、思わず“ドキッ”としてその方向に頭を振りその箇所を凝視する。



ペルト・モレノ氷河の先端部

展望台からは高さ60mの幅は5kmくらいの氷壁と向き合うことになる。観覧者はどこが崩壊するか首を左右に動かさずじまなし。誰かが“出たー”の叫びに皆が動く。15,6階のビルが倒れるのと同じだから、迫力満点。巨大な氷のドミノが後ろから押され次から次へ海へ倒れこんでいく。その瞬間海面が盛り上がり波を発生して、氷壁に衝突する。その衝撃で次のドミノが又倒れこむ。いつまで観ても飽きない。崩壊が一段落すると海面のうねりは緩やかになり、無音の海に戻る。しかし、これをうまく表現できる文才の無いのが残念である。

観光のおまけに氷河トレッキングなるものがある。鋼鉄製のいかにも丈夫そうなアイゼンをはかせてくれる。自分ではいはいけない。そ

して、リーダーから歩き方、上り方、下り方を教わる。そして、約、1時間氷河ウォーキング。当然慣れない人はけつまずいたりするけど、サポーターがすばやく介護。至る所にアイスホールが口を開いているが、手をとって中をのぞかせたりもする。クライマックスは大きなアイスホールの壁をアイスクライミングする。当然アイスバイルを両手に持ちアイゼンの前2本で軽快に登っていく。最後はややオーバーハングにもかかわらず難なく超えた。そこで、観衆から大拍手。その後、ウィスキーの氷河ロックのサービス。フランス人グループと一緒にいたのだが、その飲みっぷりがすごい。グラス半分のウィスキーは、水のごとくさっと喉に消えた。



アイスクライミングショー

2008年2月29日

氷河崩壊を氷河湖のアルヘンティー湖から見るクルージングに出かけた。この湖に流れ込む氷河は昨日見たペリト・モレノやパタゴニア最大のウブサラ氷河、そして先端部の高さが最も高い(135m)スペガツィーニなど10ほどである。船長によって今日見る氷河が決められるようで、予定表は役に立たない。幸い、我々は最大のウブサラに近づけるとのことである。

世界中からの観光客をのせた双胴船は、スペ

ガツィーニ、ウブサラの順に巡った。出航してしばらくはおとなしい観光客、氷山が出始めるとにぎやかにデッキへすっ飛んでいく。フランス語、ドイツ語そしてスペイン語が目立った。アジア系はわがグループのみであった。



後退した氷河

船が最短 200mまで近づいたとき、見上げた氷壁は、海面に立ちはだかるような城壁のようで威厳さえ感じた。今にも崩れそうだけれど、不思議なバランスで直立を持ちこたえているように見える。全体がブルーに包み込まれており、小ブロック間の隙間は、光が入るのかさらに濃いコバルトブルーを呈している。数10kmを何年かかってここまで来るのか知らないが、海との面会が氷河にとって死なのか生なのか。

氷河もさることながら、クルージングの目玉は浮遊する氷山とその背景の山々の美しさであろう。勿論氷山は氷河が海に崩落したもので、やっとながら止まれるくらい小さなものから、10m以上の高さで100坪はあろうかと思われるでかいものまで、さまざまである。しかし、その内部から発するブルーはどの氷山も実に美しい、そして澄んでいる。ブルーの海面、ブルーの氷山、ブルーの空そして少し雪を残した山並みを見ると、殆ど自然の入っていないパタゴニア

の自然を感じる事が出来た。同時に、便利ではあるが少々手が入りすぎているスイスアルプスのことが頭に浮かんだ。



あくまでブルーの冰山

2008年3月1日

カラファテからウシュアイアへ飛んだ。今日からは観光編。

プンタ・アレナスが南米大陸最南端の町に対してここは南極大陸に最短(1,000km)で、世界最南端の町である。そのわけはウシュアイアはフェゴ島のアルゼンチン領にある。フェゴ島はもちろん南米大陸から南に離れているためである。こんな最果ての地でも人口は4万人、金や石油の地下資源もある活気のある町である。町の中心にあるメルセー教会はちょうど土曜日の夕方のミサの最中で、予想より多くの信徒が礼拝していた。やはりここまでくれば空中の塵も少ないのか、太陽の光が直接感じられる。特に夕方の斜めからの光を正面で受けるとき、殆ど何も見えなくなってしまう。

2008年3月2日

ビーグル水道クルージング。フェゴ島をアルゼンチン、チリの2国で分ける水道で、中央部が国境であるが狭い所は1kmしかない。実に明

石海峡の1/4、直ぐ目の前です。ダーウィンが乗っていたビーグル号の名をとってこう呼ばれるとのこと。太平洋と大西洋を結ぶ航路でもある。

クルージングはこの水道にある大小さまざまな島や岩礁に生息する、アザラシ、ペンギン、ウミウなどの動物を見て回る。確かに、岩礁を埋め尽くさんばかりのウミウ、ハーレムの中でもめごとをして大声を出しているアザラシや海面で潜るタイミングを計っているペンギン。

いつまで見ても飽きないが、その糞の悪臭のために長居は出来ない。



ウミウとアザラシ

2008年3月3日

ウシュアイからヴェノスアイレスへ。

やはり日本からの距離が遠すぎるためかあまりなじみが無い。そして、タンゴ発祥の地くらいしか知らない。しかし、殆ど黒人を見ない洗練されたヨーロッパ調の町並みで、気候も凌ぎやすく、距離が近ければ何度も来たい気がした。たった、1日の滞在では何も知ることが出来ないが、タンゴだけは見ようと、タンゴショーに出かけた。

旅行最後に大きなショック。タンゴのかっこよさ。バイオリンのきしみ音、切れの良いリズム、相手を蹴飛ばしそうなステップとにらみつ

けるような視線の衝突。狭い舞台からはみ出し  
 そうな急速な移動。久しぶりの陶酔状態でした。  
 いま少し若ければ習ってみたいと、わが身を忘  
 れてしまった夜でした。



## 福田会員が取りまとめた「山岳遭難捜索保険」のご紹介

### 平成20年度山岳共済会 山岳遭難・捜索保険

日山協山岳共済会の会員(年会費 1名1000円 高校生以下1名500円)の方は個人でも、団体を通してでも  
 山岳遭難・捜索保険の山岳登はんコース、軽登山コースの、どの加入タイプでもご加入頂けます。

(1Sの1は、入院・通院のセット型を意味しております。)

＜山岳登はんコース＞								
タイプ名	保険金額							
	1S	S	1B	B	1C	C	1E	E
死亡・後遺障害	100万円	100万円	162万円	162万円	238万円	238万円	500万円	500万円
遭難捜索	100万円	100万円	150万円	150万円	200万円	200万円	500万円	500万円
入院	1,000円	0	1,000円	0	1,500円	0	2,500円	0
通院	600円	0	600円	0	900円	0	1,500円	0
賠償	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円	1億円
保険料	5,820円	3,530円	7,490円	5,200円	10,440円	7,000円	21,680円	15,950円
共済会年会費	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円	1,000円
合計金額	6,820円	4,530円	8,490円	6,200円	11,440円	8,000円	22,680円	16,950円

＜軽登山コース＞		
	保険金額	
	I	II
死亡・後遺障害	184万円	284万円
救援者費用	300万円	300万円
賠償	1億円	1億円
入院	2,000円	4,000円
通院	0	1,700円
保険料	2,000円	5,000円
共済会年会費	1,000円	1,000円
合計金額	3,000円	6,000円

\* \* \* \* \*

詳しくは

日本山岳協会山岳共済会の団体傷害保険制度

<http://www.moon.sphere.ne.jp/jma-kyousai/html/premium.html>

をご参照ください

## いい年をして、いやはや

柏 敏明 (昭41経)

一昨年、森本さんや関学の青木さん、小西さん（以下敬称略）とダウラギリのトレッキングに参加すべく準備を進めていましたが、直前の検査で冠動脈の一部が細くなっていることがわかり、血管を拡げるステントを3本入れる処置を受けたためトレッキングを見送るはめとなりました。

スキー行を共にしながら仲間を募り、関学の青木、小西、甲南の森本、塩崎、浪川そして小生の6人で計画をたてることになりました。小生としては一昨年のリベンジの気持でした。3月から月一回、梅田のがんこ寿司に集まり、小西を隊長に祭り上げて、打ち合わせや調査を始めました。ツアーに参加するのではなく、我々自分で計画をしようとカトマンズにあるコスモトレックをツーリストに決め、場所はどこがええ、6kmは登れるで、いや、自信がないわ。と、楽しい飲み会の結果、世界で最も美しい谷の一つと云われるランタンヒマールをトレッキングし、ここなら我々も登れるだろうとヤラピーク(5,520m)を目指す事となりました。その間、小西、浪川も心臓に問題が生じましたが、どうにかクリアをし、無事全員が参加に漕ぎ着けることが出来ました。

塩崎と浪川はカトマンズからチベットのラサを見てきたいと9月25日に先行出発をし、我々、4人は10月8日深夜、青木一家の見送りを受けて関空を出発。9日午後、カトマンズのチベットホテルで合流をしました。コスモに挨拶をした後、タメルハウスでダルバートを食べ、ロキ

シーを飲みながら、チベットの土産話やこれからの計画に期待を膨らませました。



翌10日は、コスモで今回世話になるシェルパやコックとの顔合わせを行い、テント等の装備の点検を行いました。リーダーのカイラ・タマン(40才)、ゴンバ・シェルパ(36才)、パサン・カジ・シェルパ(24才)。3人ともチョーオーユーから帰ってきたばかりで、8千メートルの経験者という豪勢な顔ぶれ。リーダーは片言の日本語がしゃべれ、小生にとっては大いに助かりました。コックはドルガ・ライと云い、数年前に富山に住んだ事があって、日本食も出来、道中大いに楽しませてくれました。ちなみにサーダーという呼称は8kmをアタックする隊が使用し、通常はリーダーと呼ぶそうです。

折良く、チョーオーユーから下山された関学の南井氏がコスモに来られ、中華料理の四海酒樓で昼食を共にしながらチョーオーユーのお話を聞く。9人中7人が登頂、南井さんはペースメーカーを装着して頑張られた由。その後、チ

ベットから帰って数日間カトマンズを歩き回っていた塩崎、浪川の案内で、猛烈なクラクションや浪川さえも怖がる交通戦争の中をクマリの家などの市内見物。マーケットで値段を聞き違え、10倍の値段で岩塩を何キロも購入しても気付かず、安かったと喜んでいたり、パチモンのレキのストックを買って、使う前から壊れてしまった者など、おなじみの失敗を繰り返しながら、羽毛服やユマールを借りたりして準備を進める。夜は日本食の華というレストランで食事。

10月11日(木) 晴一時小雨 数日前の大雨でドウチェの手前が決壊し、交通止めになっているとの情報に不安を抱きながら、コスモが仕立てたバスに乗り込む。6時30分にチベットホテルを出発。便乗者を拾いながら進む内にバスは満員となる。今、話題のタタ社製の中古バスの為、左のサイドミラーは途中で取れ、峠ではギアから黒煙が吹き出すなど、ハラハラドキドキしながら山道を進んで行った。弁当はなんと梅とシャケと高菜の握り飯。それにチキンナゲットとみかん。結構旨く、コックは当たりであった。

情報通り、カルカイスタンを過ぎた所で道路崩落による通行止め、バスを降ろされる。40分程歩いて、コスモが手配した迎えのバスに乗り込む。ドウチェ、シャブルベンシ方面のバスはこれしかなく、コスモと関係あるのかなのか、手配師のようなあんちゃんが金を取りながらドンドン詰め込む。板バネが折れるのではないかと思うほど、車内は勿論、屋根の上も超満員となる。こんなに詰め込んだバスは初めての経験であった。それが千尋の谷を見下ろしながら結構なスピードで山道を飛ばすため、暑さの汗と

冷や汗がミックスで吹き出した。ドウチェに17時過ぎ到着。7割方下車してホッと一息。日も暮れた19時30分にシャブルベンシ(1,430m)のブッダホテルに入った。すぐに湯豆腐、卵スープ、キノコ炒め、大根の酢の物、マカロニとビールで夕食。覚えてたのネパール語、ダニヤバード(有難う)、ミートチャ(美味しい)、アリアリ(少し)等を連発する。

10月12日(金) 晴 6時、ティープリーズの声で起こされる。洗面を済ませ、外に出ると、小規模ながら我々の隊の荷物の小分け作業しており、雇用して貰おうとポーターがそばにたって指名を待っている。昔、憧れた光景である。



今回の隊は我々6名、シェルパ3名、コック1名、キッチンボーイ兼ポーター6名、現地雇いのポーター2名の計18名の隊編成であった。8時出発、直ぐに吊り橋を渡って、ランタンコーラとポータコシに挟まれた山道に入る。家の近くの里山を毎朝1時間余り歩いたおかげか、皆に遅れずについて行ける。途中、猿の群れや巨大なハチの巣を対岸に見ながら、徳沢から横尾に至るような樹林帯を進むが高度は余りあがない。遠くに雪山が見え出してくる。40数年前、若き血を燃やしたガネッシュヒマールがここから見えると聞いていたが雲に隠れて判らな

い。残念。途中バンブー (1,970m) で長大な滝を見ながら昼食をとり、16時30分に狭い谷間にあるラマホテル (2,340m) のジャングルビューホテルに着く。

10月13日(土) 小雨後晴 小雨の中8時発。小川の流れてマニ車を回す水車を横目に、観光客用の馬や、ヤク、牛等とすれ違いながら、樹林帯の高度をあげる。リバーサイド (2,767m) でヨーロッパの若者の隊と前後しながら進む。開けた牧草地のゴラタバラ (2,759m) でそば、飯、みそ汁、ひじきの昼食。マニ石の長い壁、メンダンを右回りに歩きながら、開けた谷にあるランタン (3,330m) のエコハウスに17時着。客室は石造りの二階建ての小綺麗なヒュッテであった。全般にこの街道のホテルは思ったより清潔で外装はカラフルである。母屋の仏壇には曼陀羅とダライ・ラマではない高僧の写真が飾ってあった。夕食は、焼き飯、茸スープ、オクラ、缶詰の鰯。

10月14日(日) 晴 連日、1,000m弱の高度を上げてきたが、今日は400m程なので、ゆっくりと7時40分に出発。1時間程、緩やかな道を詰めると、一挙に視界が広がり、雲でずっと見えなかった山々が姿を現す。小生にとって初めてのヒマラヤとのご対面である。こっちがナヤカンガ (5,862m)、あれがガンチェンボ (6,387m)、手前がボンゲン・ドブク (5,930m)、そしてランシサ (6,427m) とカイラが山名や峠の名前を教えてくれる。ランタンリルン (7,245m) は前衛峰に阻まれ未だ見えない。空が真っ青である。ヒマラヤヒダが美しい。馬や牛、水牛、ヤクが放牧されている。名前の判らない高山植物があちこちに群生し可憐な花を咲かせている。「ランタン谷の上部は、ヒマラヤでも最も美し

い谷の一つである」とトニーハーゲンに云わせた天上の楽園を、今、まさしく歩いているのである。チョルテンに迎えられ11時45分にキャンジンゴンパ (3,730m) のブツダホテルに着く。周囲はヒマラヤの山々に囲まれ、広く明るい土地に2階建てのホテルが何軒も建っている。とてもランタン谷最奥の村とは思えない程開けている。村に入って初めてランタンリルンと対面する。村からは緩やかなおとなしい山に見えた。昼食を取った後、13時30分、高度順応の為、軽装でキャンジン・リ手前の鞍部まで登る。白いエーデルワイス、リンドウの一種でヒマラヤンブルーのクワックなど、可憐な花があちこちに咲いている。タルチョがはたためく頭に立つと、正面にランタンリルン、ランタン氷河を挟んで右にキムジュン (6,745m) が聳え立っている。ここから見るランタンリルンは氷壁を纏った険しい山容である。暫し大阪市大隊の偉業を偲ぶ。ランタン氷河から聞こえてくる雪崩の音を背後に聞きながら、15時50分キャンジンゴンパに戻る。夕食は巻きずしに酢の物、チャパティの揚げたもの、ベーコンとジャガイモの炒め物。結構な味付けであった。今回のトレッキングでは、我々が年寄りだとドルガが配慮してくれたのか、ギトギトした肉類などはでなかった。この夜は遅くまで、ポーター達の歌声や手拍子が聞こえていた。

10月15日(月) 晴後霧 8時出発。高度順応のため、昨日登ったルートを更に登る。天候は崩れ、山々の眺望はきかない。キャンジンゴンパの上部に使用されなくなった飛行場が見える。10時20分タルチョピーク (4,250m)、11時ブツダホテル着。昼食後、装備の点検。靴にアイゼンが合わない者やハーネスが短すぎる者がいて、事前の点検不足を露呈する。近くの牧場の

斜面にロープを張り、エイトカン、ユマールの訓練をする。ユマールは初めて使用する登山具だが、結構腕力がいい、エイトカンも体を振られて難しかった。パサンからエイトカンは絶対ロープからはずすなとくどいほど云われる。夕食後、同宿のフランスのパーティから、一昨日、ヤラピークを登ったがラッセルがきつかったと聞く。彼らはガンジャ・ラ (5,130m) を越え、ドクプを経てカトマンズに帰るそうである。



10月16日(火) 小雨後吹雪 小西から体調が思わしくなく、慎重を期してヘリでカトマンズに降りると申し出があり、話し合った末、青木が付き添って降りる事になる。ヘリヤコスモとの連絡のため、カイラが残り、残りのメンバーで出発する事になった。小西の無念の気持ちはいかばかりか。青木の配慮に感謝する。酒、タバコは勿論、不必要な物はすべてブッダホテルにデポし軽量化に努める。小西、青木に頑張ってこいよと声を掛けられ、又、来年、行こうと言い合って8時30分出発。30分ほどで尾根に取り付き、その後、ずっとトラバースをしながら高度を上げる。出発時、小雨だった天候が雪になり、尾根上、ジャンクションピークの辺りから吹雪となり、みるみる雪が積もりだす。ポーターは運動靴にビニールの袋を被せただけの者もあり、途中でビニールシートを被ってうず

くまり、これ以上進むのは嫌だとかね出す者も出てくる。リーダーがいいため、他のシェルパが必死になだめる。夏の放牧で使う小屋、カルカで昼食を取る。火を焚くもポーターが周りを取り囲み、あたる事が出来ない。彼らが主役だからと苦笑いしながら機嫌の直るのを待つ。やっと説得が効き出発。6ピッチ目の15時40分に今回のBCとなる4,150mのカルカに疲労困憊で着く。足の骨を折った馬が一頭放されており、この世界ではいずれ死ぬしかないなど哀れを誘う。シェルパも疲れていたのか。我々用のテントを一張りしか雪の上に張っておらず、すぐにもう一張り張らす。シェルパ、ポーター達はカルカの中で固まって寝るようである。テントに入り、雨宮さんからお借りしたパルスオキシメーターで酸素濃度を測る。皆、70台から80台で先ずはクリアする。足先の冷たいのが気になったが、シュラフに入れば戻らるだろうとその時は気にしなかった。高度障害の軽いのは各人出ていたようであるが、深刻な人はいなかった。念のため、この日からダイアモックスを一錠飲み出す。今回、慎重を期してAEDや医療用酸素をレンタルして行ったが幸いにも使用する事はなかった。

10月17日(水) 快晴 昨日とうってかわった快晴。8時30分出発。尾根に取り付く。30~50cmのラッセルをしながら60分ピッチで登る。左にランタンヒマール、キムジュン。右に目的のヤラピークサウス。対面にはナヤカンガ、ガンチェンボ、ドルジェラクバ、ボンゲンドブク、ランシサリ等が聳え立つ。ボンゲンドブクのヒマラヤヒダがひととき美しい。4ピッチ目の12時10分、ヤラピークカルカAC (4,800m) に着く。シェルパのパサンとゴンバの二人は、休む間もなく偵察とルート工作のために出発。15

時頃、カイラが到着する。小西、青木は昨日の天候が悪く、ヘリが飛ばず、今朝の9時45分にカトマンズへ向けて飛び立ったそうである。後で聞くと25分でカトマンズに着いたそうである。余談であるが、今回、我々は東京海上日動火災の海外旅行保険の登山中のみ連動割増に入っていたお陰で、治療代は勿論、ヘリ代やホテル代、青木の付添費用、又、後述する小生の凍傷に拘わるすべての費用をこの保険で賄う事ができた。小西達を見送った後、カイラは我々の二日分を5時間弱で追いついた事になる。明日のアタックに備えて準備をする。靴下は新しい物を用意していたが、ふと、一足では足りないのではないかと5本指のインナーを履くことにした。ほんの少し湿りを感じたが寝ている間に乾くだろうとそのまま履いてしまった。

10月18日(木) 快晴 いよいよ、アタックである。3時に起床。朝食を済ませ、パサンが皆のアイゼン、ハーネス等をチェックする。頭や体は絶対に冷やすなとパサンが忠告してくれる。3人のパーティが我々のテントの横を通り、ヤラピークの右側へトラバースしていった。足が少し冷たく感じたが、スキーの時とそう変わらないので気にしなかった。ヘッドランプを点け、パサンを先頭に、塩崎、浪川、柏、森本、ゴンパ、カイラの順で一本のメインロープに繋がって出発する。膝までのラッセルに苦しみながら、高度を上げる。カイラにピッチが合わないので隊を分けてくれというも、夜明けまではこのままで行ってくれという。昨日のルートワークで氷河入口に張ってあったフィックスを利用して直登する。パサンが軽いのでラッセルが効かず、塩崎が苦しんでいる。フィックスを越えた所でメインロープを切って、パサン、塩崎、浪川、カイラと柏、森本、ゴンパの二つのパーティに

分ける。ほとんど休みなしで頂上直下の雪面までたどり着く。ここで、パサンが2ピッチ、約120mのフィックス工作を行う。現役時代なら何の問題のない雪面であるが、どうしてもフィックスに頼ってしまう。新雪でステップが崩れ、ユマールも右に左に揺れ、安定が悪く、思った以上にしんどい。やっと頂上直下の稜線に着く。



チベット側を覗き込むと千メートル以上も切れ込んでおり、フィックスを握りしめる。シェルパ達も今までは余裕の行動であったが、頂上までの稜線上のフィックス工作は慎重に時間を掛けて行っている。30m位のフィックス工作に30分位かかった。浪川が今の気温マイナス18℃と教えてくれる。いよいよ最後の登りである。両側が切り立った稜線をフィックス頼りに登る。頂上は狭く立つ事が出来ず抱えるようにして座り込む。10時。標高5,520m。ヒマラヤにおいては低いヤラピークサウスではあるが、小生にとっては最高峰の山となった。青木、小西が一緒ならもっと嬉しかったのだが。快晴、無風。シシャバンマ(8,027m)をはじめ次々とカイラが山名を教えてくれるが覚えきれない。市大隊が登頂し、ランタンリルンで亡くなった隊長名を冠したモリモトピーク(6,750m)が印象に残った。次々と入れ替わって頂上に立ち30分程で

下山に掛かる。



フィックスを回収しながら、一気にACまで下る。キッチンボーイが熱い紅茶を持って迎えに来てくれる。足下を見ると運動靴にビニール袋を巻いた姿である。12時50分AC着。既に撤収の準備が完了していた。昼食後、13時20分出発。15時10分BC着。一昨日には一面に積もっていた雪が綺麗に消えていた。ガンチェンボをバックに全員で記念写真を撮る。さすがに疲れていたのか、夕食後シュラフに潜り込むとバタンキュー。



10月19日(金)快晴 足の指から凍った感じが取れず、凍傷にかかったのではないかと感ずるも、皮膚の色も少し紫かかっている位で痛さもないため靴を履く。歩いても全然痛さを感じないのでそのまま出発する事とする。カイラが各自のペースで出発してくれと云うので、どうせ、皆に追いつかれると先行して7時30分BCを出発。ナヤカンガ、ガンチェンボ等を正面に見ながら快調なペースで下山する。キャンジンゴンパに11時40分着。塩崎がチベットで仕入れてきたスコッチで乾杯をする。旨い。カイラに無事下山した事を村の衛星電話を通じて、コスモ経由小西達に連絡して貰う。昼食後、関学OBの森川さん率いるパーティと出会う。彼らもヤラピークを目指すとの事。ポーター達はテントやシュラフを干している傍でトランプバクチに興じている。夕食後、ゴンパが持ってきてくれたお湯の入った洗面器に足をつける。猛烈な痛みが生じるが皮膚の色は少し紫がかった位であった。いわゆる黒色に変色と云うほどでなかった。何の手当もせず靴下を履く。明日はヘリで下ろうか、歩いて下るか迷ったが、まだ、凍傷の認識が甘かったので、馬を手配して貰って、その後は歩いて下る事にする。

10月20日(晴時々小雨)4頭の馬が揃うのに時間がかかったが、8時30分に出発。途中、馬が暴れて振り落とされそうになり、たてがみにしがみつくと。馬はやはり楽である。12時20分にランタン村に着く。昼食後、個人装備もゴンパが持ってくれ、徒歩で出発。足の痛みは感じない。高所順応の成果か、体調も快調そのもの。浪川のピッチにピッタリ付いていって少しもしんどくない。ゴラタバルで小憩の後、ラマホテルのチベットゲストハウスに16時20分に着く。ここで飲んだバター茶はコクがあり、美味しか

った。

10月21日(土) 快晴 7時40分出発。快調に飛ばす。滝の出会いで昼食後、15時にシャブルベンシのブッダホテルに着く。柏を除いて3人は近くの温泉に入りに行き、積もった垢を落とす。夜は打ち上げ、気持ちばかりのビール差し入れと残ったエッセンで、シェルパ、ポーター達と暫し歓談をする。日本から持参した贈り物や不要になった装備等を抽選で渡すと大喜びであった。気のあった連中と好きな事を言い合い、笑い合い、頂上までも登れた事に感謝。只、青木、小西達と最後まで一緒出来なかった事が残念であった。



10月22日(日) 快晴 7時30分コスモが予約したバスで出発。往路と同じく、手配師がどんどん客を乗せる。屋根の上も満員。カーブの度に悲鳴が上がる。道路はまだ回復しておらず、途中で降ろされ約30分歩いて、コスモが仕立てたバスに乗り込む。色々トラブルを起こしながら、18時にやっとチベットホテルにつく。青木、小西と一週間振りの再会を果たす。小西の体調は大事に至らず、回復した由。なによりであった。小西とカイラに同行して貰い、トラベル・メディカル・センターに行く。完全な凍傷で指を切るか切らずに済むかは、4~6週間後の

判断との診断を受ける。治療の後、皆が待っている日本料理の華へ行き、打ち上げをする。

10月23日(月) 通院。皆はコスモ訪問後、三々五々ショッピング等に出かける。

10月24日(火) 通院。谷君と合流。彼の案内でヒマラヤそばを食べる。夕食は西濱君とカイラが加わり、ホテルでチベット鍋を囲む。

10月25日(水) 通院、医者からビジネスクラスで足を伸ばして帰れと指示をされ、診断書と共に証明書を書いてくれる。小西や塩崎がエコノミーからのチェンジに奔走してくれ、お陰で初めてビジネスクラスに乗り、足を伸ばして帰ることが出来た。

10月26日(木) 関空5時30分着 解散。

以上がランタンの紀行です。最後に小生の足の凍傷の顛末について報告しておきます。帰国した日に近大病院皮膚科にかかりました。高岡市で凍傷の治療の経験がある副部長から、整形外科の処置は治りが早いですが足の甲から切断する。少しでも多く指の部分を残したいのなら、時間は掛かるが温存療法があるとの説明を受ける。凍傷の患部が壊死するまで待つて壊死の部分を取り除き、新しい肉が盛り上がるのを待つ温存療法で対処して貰う事にしました。

1ヶ月間、毎日通院して毛細血管拡張剤の点滴を受け、その後は軟膏と錠剤で対応。右足の五本の指先は真っ黒となり、これが写真で見える凍傷だなと実感しました。1月中旬に入院し、

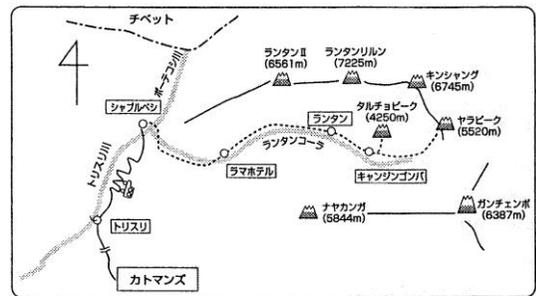
親指は第2関節から、その他の指は第1関節から骨と壊死した部分を切り離す手術を受けました。切り取った後は肉と骨がむき出しになっており、そこに肉の盛り上がりを促進する軟膏を毎日塗る気の長い治療が始まりました。凍傷になって6ヶ月余り、手術を受けて約4ヶ月余りが経ち、今は週一回の通院と、二日に一回、家の風呂場で患部に軟膏を塗り包帯を替えています。人差し指と小指の骨はほとんど肉がかぶり、中指と薬指も後少しで骨に肉が被さる状態です。問題は親指でまだ暫くかかりそうです。歩くのは踵歩きです。簡単に考えていた凍傷が思いの外、大事になってしまいました。只、時期がきたら山に行けるし、スキーも出来ると医者が云ってくれているので、1日も早く指に肉や皮が被るのを楽しみにしています。

凍傷の原因は色々と考えられますが、先日集まった時の反省会では油断と不注意だったとなりました。山靴はビブラムを新しく貼り替えたものの、革そのものが厳冬期用でなかった事。日頃一枚の靴下だったのを、さらに5本指のインナーを履き圧迫させてしまった事。しかも、ほんの少し湿り気を感じていたのにそのまま履いてしまった事。アタックの朝、足に冷たさを感じたのに対処せずにそのまま出発してしまった事。シェルパのパサンはアイゼンバンドの閉めすぎと云っていたが、小生のアイゼンは鶴木さんにお借りした比較的新しい物で、バンドの閉めすぎは出来ないスタイルでしたので、これは原因でないと思います。様々な要因が重なって今回の凍傷に至ったと思われそうですが、要は小生の凍傷に対する知識がもっとあり、慎重に対応しておれば防げた凍傷だったと反省する次第です。ご迷惑をおかけし、色々とお助け頂いた

同行の皆様、ご心配をおかけし、励ましを戴いた会員の皆様にお詫びと感謝を申し上げます。山岳保険には絶対入って出かけるべきと思います。治療費、入院費は勿論、治療用品代や通院のタクシー代、ビジネスクラスの差額。凍傷の治療に拘わる全てを半年間に渡り保証をしてくれたのは本当に助かりました。

足の指を5本失いましたが、何の気兼ねもなく好きな事を言いながら、このような山行をさせて貰い、人とのつながりの楽しさを味あわせていただいた事に感謝いたします。皆様方有難うございました。

2008年6月14日 記



# チベットトレッキング行動記録

浪川 純吉 (昭42 営)

9月25日 (火)

関西空港 AM1:20 発。—BANGKOK4 時間待ち—カトマンズ 12:45 着。コスモトレック訪問、スマレツアー (チベットツアー \$1,305) 夜西濱君と食事。フジホテル泊。

9月26日 (水)

フジホテル迎えのランクルで6:10 発。喧騒のカトマンズから北東に国道をひたすら走る。国境のコダリの手前で道路が土砂崩れをランクルで強行突破、バス等は通過できず。

国境の町コダリ 10:20 着ネパール側イミグレ税関を済まして、国境の橋の上でスマレのガイドが中国側のガイドを探すのに2時間待たされる。中国側のガイド GALEK、運転手 PUBE と顔合わせする。二人ともチベット人。

国境の橋から中国に入る。九十九折を登ると中国側イミグレ・税関の町ダムここからニヤラムまで断崖絶壁を縫うように付けられた道を行く。流石に中国、ネパールと違い落石が有れば直ぐにブルドーザーで谷底に落としていた。ニヤラム (3,750m) PM5:00 着。NGA-DHON HOTEL。高山病の兆候が出始める。ガイドに水を大量に飲むのが一番の高山病対策だと言われる。宿は西洋人が多い。此処から北京時間 (2時間15分進める) に戸惑う。本日走行距離 130 km。

9月27日 (木)

ニヤラム AM6:00 発。荒涼とした高原をひたすら高度を上げていく、ヤクがチベットに入ったことを感じさせてくれる。やがてタルチョがはためくタン・ラ (5,050m) 峠に着く、高山病

の症状が出てくる。峠から下りに、左後方雲間からシシャパンマ (8,012m) が見える。遙か遠方でそれ程迫力は感じなかった。ラルン・ラ峠 (4,910m) を越すと途中でカイラスへ向かう道と別れ、やがてオールドティンリ (4,340m) 着 PM1:30。スノーランドホテル泊。走行距離 212 km。

高山病の頭痛で生まれて初めて睡眠導入剤を飲む。

9月28日 (金)

オールドティンリ AM9:15 発。今回のコースで一番の見所のエベレスト B.C. 5,200m からラツェまでの行程。オールドティンリから南に荒地を行くとやがて、チョーオユー B.C. へ行く道と分かれる。入り口の村でゲートが有り入山許可書のチェックをされ、川沿いの荒地を進むと今度は道無き荒地の峠越えになる。このあたりで結構 B.C. から戻ってくる車に出会う。エベレストは人気のスポットだと感じる。やがてニューティンリから来る道と合流。やっと道路らしくなりロンブク・ゴンパ (5,000m) に着く。此処からガイドと別れ馬車で B.C. を目指す。欧米人は殆ど徒歩で馬車に乗るのは、中国人と我々だけ。エベレスト B.C. (5,200m) PM2:00 着。いざエベレストと張り切って展望用の小山に息が切れ切れに登るが肝心のエベレストは雲の中。30~40分待って断念、折角この為にチベットに来たのに残念無念。帰りのコースでパン・ラ (5,150m) 峠から振り返って見るが相変わらず、雲の中。中尼公路に戻りニューティンリからラツェへ、道路は舗装されているが、中国名物手

抜き工事で、穴ぼこだらけで時間の掛かること。途中で中尼公路の最高地点ラクパ・ラ (5,220 m) 峠を越す。

ティンリの宿で一人のスイス人に会う。ビザが切れて公安の目を避けて旅をしていると言う。我々には出来ない。ラツェ (4,050m) PM7:30 着。ラツェホテル泊。走行距離 230 km。

9月29日 (土)

ラツェ AM9:40 発。今日はシガツェまでの半日行程。1時間程行くとユロン・ラ (4,520m) 峠にタルチョがはためきテントで土産物売っている。しばらく行くと、上海から 5,000 km の記念碑がある。



12:40 シガツェ (3,860m) 着、チベット第2の都市、シガツェホテル泊。走行距離 157 km。

ホテル到着後ガイドと別れ町を散策。タシルンポ寺の門前町の様。久しぶりに水洗トイレ・テレビ付きの宿。

9月30日 (日)

シガツェ滞在 AM10:00。ガイドに案内されタシルンポ寺へ。チベット動乱ではダライ・ラマ14世がインドに亡命、同寺の座主パンチェン・ラマ10世は中国の幹部となり無事に寺は残った。ガイドは色々説明してくれるが私は全然判

らずじまい、もっと英語を勉強しとけば！後悔先に立たず。しかしガイドはドライ・ラマ最真。お寺より自由市場の方が生のヤクを売っていたりして、活気が有り面白かった。シガツェホテル泊。

10月1日 (月)

シガツェ 8:20 発。ヤルン・ツアンポ (プラマプトラ川) の支流ニャンチュ沿いにギャンツェへと向かう。次第に荒地から耕作地が増え、穀物の刈り取りが盛んに行われ、時々ヤクや羊の大群に道路を占領され車は度々待たされる。路の両側には多数のゴンパ有り。やがて目の前の巨大な岩山にギャンツェ・ゾンが見えてくる。ニャンチュを渡ると間もなくギャンツェに到着。早速パンコル・チューデ白居寺を見学、ギャンツェ・クンブム右回りにらせん描いて階を上がり最上階までいくと解脱するらしい。外から見るとスケールの大きい大仏塔。ギャンツェ (4,040m) 10:00 着。ジャンゼンホテル泊。走行距離 91 km。

10月2日 (火)

ギャンツェ 8:20 発。本日はラサまで向かうコースであったが、我々が行きたかったヤムドク湖経由は道路工事の為、通行止。止む無く一旦シガツェ方面に戻り、途中から砂漠越えの道でヤルン・ツアンポ川に出る。川沿いの道をラサに向かう道路で、チベットのスピード取締りに出くわした。検問所で通過時間を印したチケットを貰い、次の検問所(場所は秘密みたい)で時間をチェックして取り締まるという方法。但し運転手は皆場所を知っており手前で車がズラッと並び時間待ちをしていた。ラサに近づくと近代的な建物がそこかしこに現れだす。ラサ市内は、中国西部開発の拠点だけにビルが建ち

並ぶ驚きの近代都市。ラサ (3,680m) 14:00 着。賽康賓館泊。走行距離 280 km。

10月3日 (水)

ホテル9:50 発。ポタラ宮を見学。ラサ一番の観光名所だけのことは有り、大勢の観光客(外人・日本・中国・チベット) で一杯、入口で随分待たされ、入場料 100 元 (1,500 円) とはちと高すぎる。場内には監視カメラまで有る。この後聖地ジョカン大昭寺に、バターの匂いと香が混ざった濃厚なチベット臭が匂い五体投地する信者に混じり時計廻りに参拝する。寺の周りのバルコルバザールは活気が有り人で溢れかえっている。

やけに中国人が多いと思ったら、国慶節の休で観光に来ているらしい。ラサ (3,680m) 泊。

10月4日 (木)

ホテル10:00 発。午前デブン寺ラサの北西にあるチベット最大規模の僧院、岩山の麓の広大な敷地に学堂が点在していた。午後はラサの北に有るセラ寺。此れも岩山に有る広大な寺院、河口慧海の記念碑があった。最後にはお寺廻りにくたびれてしまった。市内のツーリストを回って見ると、我々がネパールの業者に支払った金額の 10 分の一ぐらいでラサからカトマンズに行けた。

10月5日 (金)

ホテル8:00 発。ゴンカル空港へ予約を入れていたのに航空会社の係りが通って無いと言う。塩崎さんが一喝すると一発で通ってしまった。海外でも通用する国際人。カトマンズまでの空路はヒマラヤを眼下に見ながらの飛行。この日は特にエベレストがくっきりと見え大興奮する。カトマンズ着フジホテル泊。



エベレスト 8,850m (左) とローツェ 8,516m

10月6日 (土)

カトマンズ市内観光。夜、西濱君・谷君と食事。

10月7日 (日)

パシュパティナート寺院 (ヒンドゥー教) ・ボダナート (チベット仏教) 見学。

10月8日 (月)

パクタブル。情緒の有る落ち着いた古都を見学。

10月9日 (火)

フジホテルからチベットホテルに替わる。14:45 後発隊、小西・青木・森本・柏さんと合流。夜タメル・ハウスのダルバートを食べに行く。

10月10日 (水)

コスモトレックで打ち合わせ、ガイドと初顔合わせをする。タメルで関学の南井さんガイドと昼食。

今回の山行は平均年齢 64 歳とおまけに心臓疾患持ち 3 名と非常にデンジャラスな隊でした。但し 4 名(森本、小西、青木、塩崎)はトレッキング経験者で構成されていたために、毎日朝・晩にパルス・オキシメータで各自の酸素飽和度を測りました。チベット(塩崎、浪川)旅行中とヤラ・ピーク登頂(森本、柏、塩崎、浪川)キャンジン・ゴンパ(小西、青木)のオキシメータグラフを作成しました。

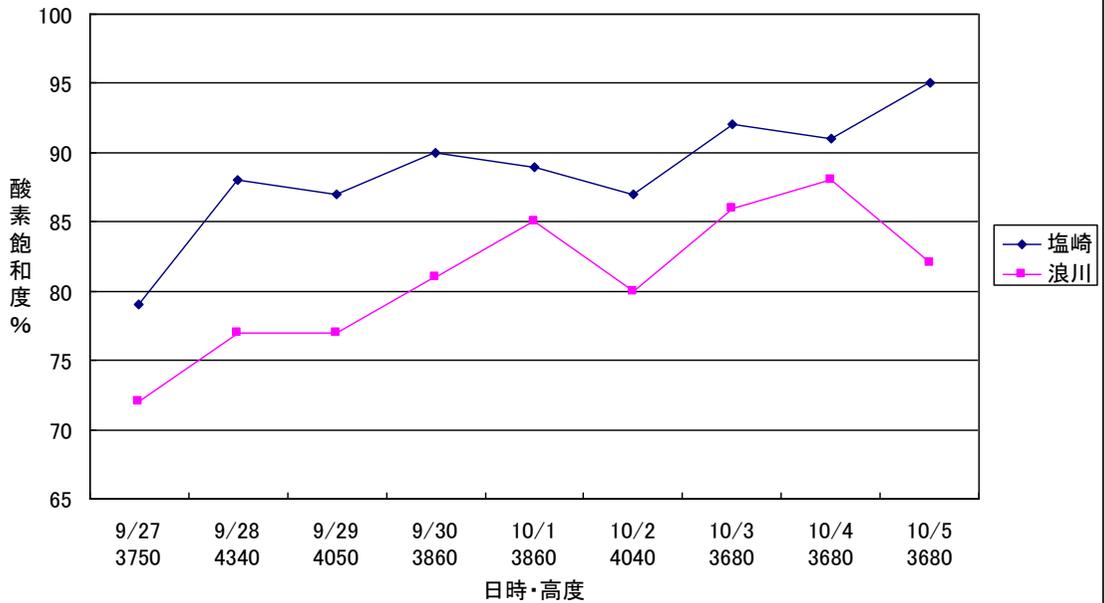
グラフを見ると、10/18A.C(4,800)の数値が森本さん以外 3 人とも 60%台になっており、専門家のデータによると、ぎりぎりの状態だったみたいでした。

個人別パルス・オキシメータ数値表

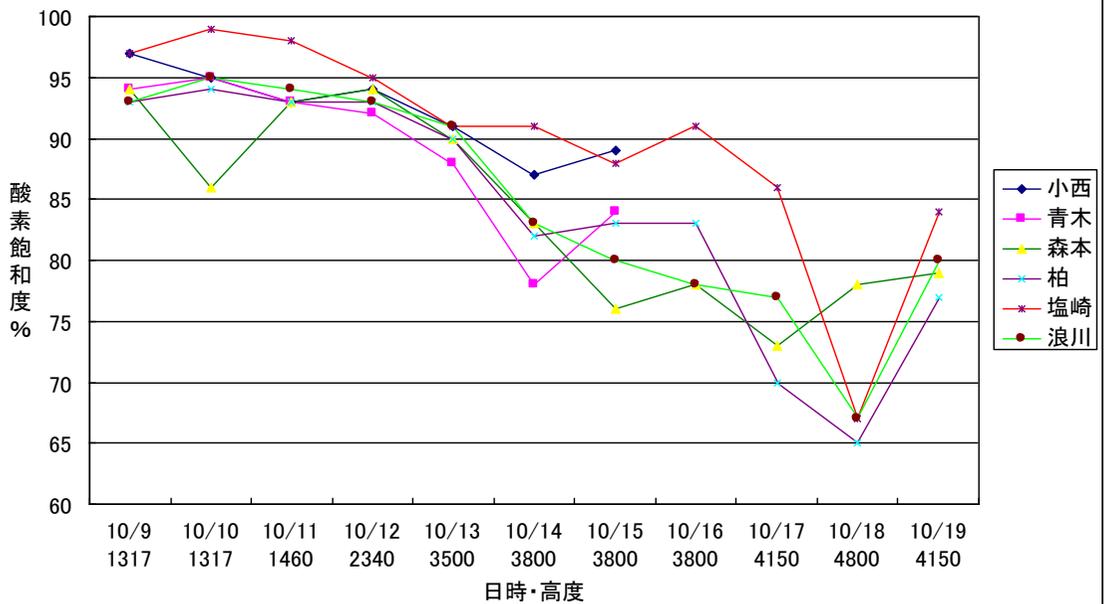
日時	場所/高度(m)		塩崎		浪川		森本		柏		小西		青木	
			酸素飽和度	脈拍	酸素飽和度	脈拍	酸素飽和度	脈拍	酸素飽和度	脈拍	酸素飽和度	脈拍	酸素飽和度	脈拍
9月27日	ニヤラム 3,750	朝	79	74	72	78								
9月28日	オールドティンリ 4,340	朝	88	76	77	74								
9月29日	ラツェ 4,050	朝	87	76	77	78								
9月30日	シガツェ 3,860	朝	90	88	81	68								
10月1日		朝	89	83	85	67								
10月2日	ギヤンツェ 4,040	朝	87	65	80	70								
10月3日	ラサ 3,680	朝	92	85	86	70								
10月4日		朝	91	85	88	71								
10月5日		朝	95	75	82	68								
10月9日	カトマンズ 1,317	夜	97	94	93	82	94	82	93	115	97	95	94	74
10月10日		朝	99	74	95	71	86	96	94	68	95	72	95	62
10月11日	シャブルベンシ 1,460	朝	98	98	94	74	93	78	93	88	93	63	93	83
		夜	99	73	93	75	95	65	97	56	97	65	95	70
10月12日	ラマホテル 2,340	朝	95	78	93	82	94	83	93	102	94	66	92	74
		夜	96	92	93	82	88	98	90	85	88	100	91	83
10月13日	ランタン 3,500	朝	91	92	91	67	90	75	90	92	91	94	88	83
		夜	92	80	83	92	76	113	78	96	91	102	76	95
10月14日	キャンジン・ゴンパ 3,800	朝	91	73	83	65	83	85	82	96	87	95	78	88
10月15日		夜	82	94	80	78	73	110	82	107	87	100	84	75
		朝	88	83	80	75	76	96	83	90	89	71	84	78
10月16日		夜	89	82	78	70	83	67	70	113	85	89	84	87
10月17日	B.C 4,150	朝	91	63	78	71	78	68	83	90				
		夜	83	82	77	123	66	123	67	129				
10月18日	A.C 4,800	朝	86	78	77	92	73	100	70	118				
		夜	78	92	69	113	80	87	68	97				
10月19日	B.C 4,150	朝	67	90	67	107	78	66	65	122				
		夜	82	96	77	108	68	59	69	110				
10月19日		朝	84	82	80	80	79	82	77	107				

酸素飽和度 単位%

オキシメータグラフ (チベット)



オキシメータグラフ (ヤラピーク)



## 一 論 考 一

### プロ登山家の誕生

雨宮宏光（昭33経）

#### はじめに

いま、五体満足で高峰に登ったなどは話題にもならず、100歳10ヶ月での富士山登頂（福島県・五十嵐貞一）。最年少、15歳・女性のチョモランマ登頂。最高齢・76歳のエベレスト登頂。他、義足・盲目・最短時間・パラグライダー滑空下降のエベレストが、やっと新聞の片隅に[注]。

“そんなとき“ 冒険登山で経済基盤を築き、生計を立てた幸運な（プロ登山家）が誕生していたのをご存知でしょうか・・・・・・・・

#### 職業登山家について書く

世には多くの職業があり、たとえば、<sup>だいく</sup>大工・運転手・プロのスポーツ選手・・・・・・・・他、書けばきりがありませんが—ここで、仮に大工と聞いたら何を連想されるでしょうか。大工は建築にかかわる仕事を職業として、それで生計を立てる人。つまり、大工という言葉に直結する職業イメージから、その答えは簡単です。

では、職業登山家と聞いたなら、どんな連想をされるでしょうか・・・・・・・・

ここに書くのは、『主体性』ある冒険登山で経済基盤を築き、生計をたてた職業登山家（以下、プロ登山家と呼称）についてであります。

#### 商業公募・登山業界の活況を見て、プロ登山家について書く

（山）がマスコミの関心外となって遠征に資金援助など望めず、実績ある登山家の中には、商業公募隊を経営する。または、公募隊のガイドとなり（**職業としての登山者**）の道を選ぶ人が現れています。

一方で単純に稼ぎのためだけに登る、ヒマラヤ地元のガイド・シェルパ達が現れたからか。

1990年頃から商業公募隊に顧客として参加し登頂する。登山客が自らガイド・シェルパと契約して登頂する—など（**登山客**）の高峰登頂が多数となっていくとき、これは商業公募・登山業界の出来事で登山界の出来事ではない。

第一に、そんな時だから、他人に登らせた山の出来事より、自分で登った山の出来事を語る（**プロ登山家**）について書きたい。

第二、残照のアルピニズムの生き証人だったプロ登山家たちも、いまや登山史で“語られる人”。そのうち必ずやってくる宇宙探検の成果が、メディアのトップニュースとなったとき、かつて実在したプロ登山家達が、登山愛好者にも忘れられる—というより知らない—近い未来。今書いておかねば登山史ですら、“**語られぬ人**”になる愛惜が、プロ登山家について書く理由でもあります。

## 登山者とは 登山家とは

書きだし早々から、話をややこしくしますが、プロ登山家について書く前に、登山家という言葉の意味に疑問が起きました。自明の理「あたりまえ」として使用されている言葉に疑義を持つことを思考基準とする時、山に登る人—登山者と登山家とはどこが、どう、違うのか。それとも同じなのか。まずこの曖昧をはっきりさせます。

早速ですが、日本語のもつ登山者と登山家のイメージは、かなりの程度で「意味」が違うと思うので、次章（山に登る人の分類）で、その違いを書きます。

注。2003年・ミンキパ・シェルパ [ネパール] チベット側から、チョモランマ登頂。

2008年・ミン・バハドゥール・シェルチャン [ネパール] 登頂。

2006年・両足義足のマーク・イングリシ [N・Z] 登頂。2001年・盲目のエリック・ヴィマイヤー [米] 登頂。

2003年・ベンパ・ドルジュ・シェルパ [ネパール] 5,400mのベースから最短・8時間10分で頂上。

2001年・ベルトラン・ロシエ [佛] 他2人、山頂からパラグライダー滑空成功。

### 1. 山に登る人の分類——私の持つ以下の言葉に対するイメージと定義

山に登る人を、登山客 登山者 登山家 職業としての登山者 プロ登山家の五つに分類し、次の前提条件で定義します。

#### その一。登山客

自ら行動計画をつくらず、公募業者の登山案から選択して登山する人。百名山の観光ガイドつき登山、夏の富士登山等がその例で、複数行動が原則です。

ヒマラヤ、七大陸の公募営業登山に参加する人も含みます。公募営業登山は、登山に関する雑事（登山許可・シェルパ選定）他は、一切を業者がやり、従来の組織登山にある登頂者の支援だけの下働きの不満なく、業者と客の間には一契約しかありません。顧客全員登頂が原則です。

#### その二。登山者

公募登山案によらず（山岳部・山岳会・同好会・単独行者）が登山計画をつくり、その計画にしたがって山に登る人。登山で経済基盤を立て、生計を立てることなど一切考えず、趣味の領域で山に登る人。つまり山に登る人・登山愛好者のほとんどは、登山客と登山者です。

#### その三。登山家

登山で経済基盤を立て、生計を立てることなど一切考えず、趣味の領域で山に登る人。ここまでは登山者と同じですが、従来呼称されてきた登山家に抱くイメージは、山に関する知識・知恵・経験・実績があり、その登山について何らかの報告・著作などがあった人。

くどい説明を簡単にいうと、山の世界で名を知られている人へのある種の敬称です。

本人が登山家と称したのではなく、世間が登山実績・その他に優れた登山者を—あの「登山家」と呼称したので、山に関するライターの造語でしょう。

この言語はいつ頃から日本語に現れたのか。くわしい検討はどなたかをお願いします。

本論から脱線しますが、世界最初の山岳会、AC（英国山岳会）は、選良主義で、出自・学識・人格・登山実績を審査し、選ばれた人だけが会員となる事から、会員と会が持った、ある種のエリート意識・雰囲気が一“者”より“家”のほうが〔高級〕とする日本的イメージが一〔mountaineer〕という英語を、日本語で登山家と、置き換えたのかもしれませんが〔注〕。

広辞苑・大辞林に、登山家という言葉が見当たらず長い説明となりました。

注。どこの言語であっても、シンタックス〔統語法。統辞世界〕の相違ということ考虑すれば、日本語はあまりにも意味が多すぎて、ひとつの言語をそのままピッタリの言語「日本語」に翻訳などできない。

次に例外中の例外である、プロ登山家誕生の事実を例として、プロ、アマの分類を行うのは一般論でなく、例外論であるのを承知で独断を書きます。

• • ————— • •

## 登山家の分類 プロ登山家と登山家

画家という言葉を広辞苑で調べたところ、絵を描くことを職業とする人——と、あります。これを転用し、独断で一登山家とは、山に登ることを職業とする人（正確には職業となってしまった人）——とし、それで経済基盤を築き、生計をたてた登山家は、慣用されている登山家という言葉との混同をさけるため、プロ登山家と呼称します。

プロ登山家に対し、山に登ることを職業とせず趣味の領域で登山し、山の世界で名を知られた人を登山家と呼称します。この分類には今ごろ何を言いたすのかと、お叱りうけそうです。すみません、本当に。

しかし後で書く20世紀に誕生したプロ登山家。メスナーやボニントンを登山家とする報道があれば、かつて予測すらしなかった（できなかった）プロ登山家不在の時の言語（登山家）が慣用でそのままに使われているのです。「勿論これに対して異議を唱える気は毛頭ありません」。

• • ————— • •

## その四。職業としての登山者

100名山の登山ガイド。アルプスの国家資格を持ったガイド。金持ちに随行する登山者。ヒマラヤでのガイド・シェルパ等がこれに該当します。

先の広辞苑の画家から転用した、登山家の分類——プロ登山家とは、山に登ることを職業とする人、なら。更にその職業で経済基盤を築き、生計を立てた人——と、するなら。商業公募隊のオーナー兼登山家、ガイド・シェルパは、プロ登山家といえるのか。答えは否で、その理由はタダひとつ。顧客の要望、雇用からの登山には、本人の主体性がないからです。彼等は自らの意志で山に登るのではない。つまり顧客の要望がなければ登山などしない。よってこれらの人を（職業としての登山者）とした。

## その五。プロ登山家

『主体性』ある冒険登山で経済基盤を築き、生計をたてた人に限定します。

主体性とは、その冒険登山の立案、推進、実行が本人にあるということです。さらに原則として主体性を貫くため、その冒険登山の費用は原則自前で捻出し、仮にスポンサーがついたときでも、本人が望まぬ行動を強制しないという主張ができ、それが可能な人。

観衆アリ、勝ち負けアリの興行競技のプロは、賞金・年俸で生活可能ですが、冒険と登山にはそれがありません。不可能に近いこの条件を満たし“山登りすなわち生活”をやりぬいた登山者、登山家をプロ登山家と呼称します。

## II. プロ登山家 ～談～

プロ登山家ーといいました。断っておきますが、登山家が自らプロと公言した事実はない。登山は食うためのものでない。カネのために登るにあらず。まさにそうです。だが結果として、冒険登山専業で食うことになった。この事実（結果）は、すなわちプロであったとしか表現しようがないのです。単に（登山家）であったなら、“山登りすなわち生活”という夢みたいな話の前に生活のため、まず仕事です。

プロの定義に書いた『主体性』について繰り返し言うなら、プロ登山家ほどに主体性を貫いた例は他の職業にありません。

ヒトという相手がいる職業では、主体性をどこかで犠牲にしないと世渡り出来ない。かたや、プロ登山家が犠牲にしたのは、せいぜい家庭の事情くらいで、だれのためでもない。自己実現の極限の山。死ぬも生きるも自分の勝手。ここに絶対の主体性をみるのです。かかる生き方に徹し、冒険登山で生計をたてたまれな存在。これに匹敵するのは、ヨットの堀江謙一でしょう [注1]。

マスコミ（大衆）が登山を冒険の対象としない時、一あえて冒険の対象と捉え、死の危険のある、別ルート、無酸素、ソロ、壁と、登山愛好者の喝采を生んだ冒険登山をしたプロ登山家たち。そんな冒険行為へと、ヒトを動かしたモノは何か。ソレを表現しようと、思いつく言葉を、かたっぱしから書きましたが、彼等の行為・思考を形容する適切な用語が見当たらず、つまるところ、よく分からないのです。

よく分からないままにプロ登山家について書くのは、大袈裟には正体不明の人物像を語るに等しく、独断、理屈っぽいプロ登山家談となり、過ぎ去ったアルピニズムへの懐古が、

プロ登山家について書かせているのなら、こんなことにかほどの意味があるのか。さらに、生命を賭して闘いを挑むプロ登山家達の心理を、彼等についての著作から、つかみ取る事は難しく、書き手の想像（主観）を交えて書く文章など、カカナイほうがマシな机上談に過ぎないのではないか。

そもそも現代に冒険登山などという言葉が通用するのか、と [注2]。  
それでもプロ登山家について書くのは、極限の山で彼等が感じたものは何か。極限での孤独がもたらす悪夢をどう生き抜いたのか。ここのところが知りたいからです。

素人の考えですが、ふだん生きていることが当たり前で、命について考えることなどない人でも、山で危険な状況に遭遇したとき、死にたくない!! つまり命の保持について考える。そして生き延びたとき、生きている実感『生命』を深く味わうことになる。

極限の山では、こんな状況が多いのではないかと。危険の程度が大きいのには比例して『生』の実感も大きいのではないかと。これ以上はうまく書けませんので、あとは心理学者、哲学者に専門的分析をお願いすることにします。

さらに例外的存在とはいえ“山登りすなわち生活”というプロ登山家の誕生を可能にした、時代背景について考えましたが、平和と、経済の余剰、冒険に価値ありとする大衆の存在を要因とするにとどめます。

次からは、プロ登山家が誕生した登山史の流れと、登山経歴から感じたことを、そのままに書いたプロ登山家談です。当然ですが、他人が書いたその登山家の人間像には、書き手の遠慮があって、事実に触れられない事が多く「紙背」や「行間」から、その登山家像を想像するしかありません。プロ登山家本人の著作についても同じです。想像に間違いがあっては失礼ですので、登山経歴に重きをおいた・・・「談」としたことをご了承ください〔注3〕。

注1. 1962年小型ヨットで単独太平洋横断に成功。2008年・ハワイ～紀伊水道間・7,000キロ航海に成功。

注2. 文化人類学者・レヴィ・ストロース・(仏)は『悲しき熱帯』の冒頭で、「私は旅と探検が嫌いだ」と始め、

地球上で冒険なんてことは終わっている。ありもしないのに、まだ冒険があると作りあげて、自分のヒロイズムを満足させるために、そういう行為を捏造しているに過ぎない。人が月に行っても何も変わらない。それより、私達は人間の内面を探検せねばと主張している。

注3. 冒険的登山記は多くあるが、登山者の心理と哲学について、専門的分析で書かれた本はなく、「論」とする

には、登山者の心理と哲学への(探検的考察)となり、そんな大論文は手に負えず「談」としました。

### Ⅲ. 大衆と文化が生んだプロ登山家

かつて桑原武夫(1904～1988)は、「登山とは文化的行為であり、近代西欧型の発想を身につけた文明人のみが行う作業である」と述べている『登山の文化史・1950』。

ここで素朴な疑問がおきます。桑原のいう「文化的行為と登山」は、どこで、どう繋がっているのか。桑原の至言を理解するため、人はなぜ山に登るようになったか、との歴史的推移と事実について書かれた(『登山の誕生・2001』小泉武栄)の好著にあった次の説明—「近代登山、探検と、自然科学の間には、旺盛な好奇心の探求という共通の基盤があり、未知領域を求めて進む態度は、登山者も自然科学者も同じである」を補足します。

桑原は、登山にはじめて自然科学の視点を感じるのは、1511年ごろ、イタリアのダ・ヴィンチが登ったモンテ・ローザの前山(モン・ボー)の登高覚え書きで「そこには、雪、雪崩等の自然科学的記載が多く、宗教的雰囲気がなく、その精神においてまさに近代登山的であるといえる」とも述べている。

だが実際に登山が文化的行為となったのは19世紀後半からで、この時代から近代登山への道が開かれた。

さらに、19世紀後半に開発された登山器具、技術指導体制、山の案内地図等の整備が、登山の大衆スポーツ化を促進して多くの登山愛好者を生み、大衆が求めた山のスター、そのエネルギーがプロ登山家を生んだのでしょ

う。文化的行為である登山が広く大衆に支持され、文化的現象となった登山史の流れの中で、冒険的登山が文化への寄与ゼロ。世の中に何の役にも立たず、体力・時間・費用の無駄遣いと、世間（体制）が思っていたら一世界の国のほとんどは今もそうです—登山など無駄。

まずは、食べることであり、プロ登山家は誕生しなかった。

～プロ登山家は、まさに自然科学から発した、文化的現象の産物だったか～

#### IV. プロ登山家は、登山史の遺産

19世紀～20世紀にかけ、初登山、初登攀をした登山家は多くいましたが、それで生活できた人は、ダレと誰かと聞かれると、1970年ごろまでは（アノ人）と答えるのは難しい。これで明らかなように、かつて登山家は職業として成りたためと考えられていたのです。1970年頃までに書かれた、山に関する著書にある登山家という言葉は、プロ登山家の出現など、まったく念頭になく使われていた。しかし20世紀に誕生したプロ登山家は、初登山が不可能となった現在、能力の問題でなく（アルピニズムの時代に遅れた）登山者からは、もう現れぬ稀有な存在であり、その冒険精神の偉業を称え、プロ登山家という呼称を登山史の遺産として書き遺したい。

#### V. プロ登山家は、生き延びた登山者から

プロの生まれる要素のなかった登山が、紀行、講演、写真、テレビ放映等、マスメディアの発達で大衆の身近な話題となり、成人の遊び心を満たす冒険登山への大衆の期待エネルギーが花形登山者を生み、競争を煽るマスメディア。初登山を巡る先陣争い。先鋭登山者のバリエーション・ルートでの、難易度を争う競争と激突。その奔流に身を流されることなく、冷静に自らの登山哲学で心を武装し、死ぬことなく生き延びた何人かの登山者。

ここからプロ登山家が誕生した。それは、ポニントンであり、メスナーであり・・・

～前置きが長くなりました。ここからプロ登山家を紹介します～

当然ですが、始めからプロを目指した人はなく、冒険登山をしている結果のうちに、それが世間に認められ、以後本人の死闘と努力（冒険登山・著作・展示・講演・マスコミへの広報活動）によって経済的基盤を確立し、冒険登山で生計を立てることが可能となったのです。

#### VI. プロ冒険・登山家の紹介

三浦 雄一郎（1932～）

## 冒険スキー・高齢・8,000m登頂と、大衆を意識した冒険演技の第一人者

青森市生れ。北海道大学卒。〔株〕ミウラ・ドルフィンズ。〔株〕三浦雄一郎事務所。

1961年、アメリカ世界プロスキー選手権8位の結果にプロでは、たいしたことない。これから別の世界（冒険スキー）に取り組もうと、基礎体力強化のため立山で強力になり 最大120キロ担いだという。常にメディアを意識し、“世界へ飛び出そう”と、世界各地で冒険スキーを展開。

1964年 イタリアで時速172.084キロを記録。

1966年 富士山直滑降。

1968年 メキシコ最高峰 ポポカテペトル初滑降。

1970年 エベレスト。8,000m地点から滑降・転倒・九死に一生。

1978年 北極圏最高峰パーポ・ピーク（北緯82度・標高2,604m）滑降。

1983年 南極最高峰ヴィンソン・マッシューフ。途中から初滑降。同行のボニントンは登頂。

1985年 アコンカグア・スキー滑降 七大陸スキー滑降達成。

2002年 チョー・オユー登頂。

2003年 エベレスト登頂。

2008年 75歳 エベレスト登頂。

2003年2月 モンブラン山系氷河を滑降。親子三代で話題になる。

三浦敬三（99歳）雄一郎（70歳）長男・雄大（37歳）

スキー滑降の場所にヨーロッパを選んだのは、まさにプロの発想です。（世界に情報を発信したからです）北極圏、南極の最高峰を選んで滑降と話題づくりの巧みさ。エベレスト滑降では3億円集めたとか。75歳でのエベレスト登頂を果たし、いまだその存在を示すプロ精神。自分で脚本を組み立て、限界を知り、企業と相互利用できるところは利用し、見せ場のみ登場し、その冒険演技ショーによって生計を立てる。“冒険スキー”という分野へのパイオニア・ワークをビジネスに転じた発想と商才と行動。まさにプロフェッショナルです。

著作 高く遠い夢・70歳のエベレスト。三浦雄一郎の元気力。他多数

## ラインホルト・メスナー（イタリア・1944～）

個人としての冒険限界の14座は、登山史の偉大な遺産

その14座は1回の生起に意義ありで、彼以後の14座は、同じであって、同じでない

～あとの追っかけ14座は、数は同じだが、その発想の根幹に決定的差異あり～

メスナーは、8,000mの14峰に、もう末踏峰がないなら、まだ誰もやったことのない、14峰を（ひとくくり・一括）として、捉える事に話題性ありとして「その発想・考案がまさにプロ」17年かけてこれを完結した。彼以後何人かが14座を達成していますが、ヒットした映画のリメイクで、メスナーが登ったからオレも登る。その模倣14座は、メスナーの発想コピーで（8,000m・一括登頂＝14座）という発想登録？—「こんな登録はないが」—がもし登山界にあったなら、彼以後は数あわせに命をか

けた、死闘の登録違反です。

ふざけたことを書きましたが、“14 座完結”とは、まさに、異能、異才がなした極限の冒険行為だったといえる。

彼とて始めからプロ登山家を目指したのではない。1969 年アンデス遠征隊に参加の招待状を受けたとき、「当時の僕は、人は誰でもまっとうな仕事を持たねばならず、山登りの自由を手にするためにも、パン代を稼ぐだけの職業を身につけたいと思っていた」と自伝に書いています。彼に 5 歳のときから山の楽しさを教えた、メスナーの父親も、冒険家などという職業は存在しないと息子に教えている。

23 歳ごろまでのアルプスでの登攀実績をかわれ、1970 年のナンガ・パルバット遠征に参加。その登攀で愛弟ギンターを失い（6 月 27 日・2 人で登頂）登攀中と帰国後のメスナーの行動を非難した、遠征隊長ヘルリヒコフファーとの裁判沙汰で敗訴。5 万マルクの罰金を受け、1971 年 1 月、中学教師の職を辞し、フリー契約のアルピニストになり、職業としての登山者への道を選ぶ（27 歳）。

このガイド業は主体性ある冒険や登山の費用捻出のためであり、そのため講演や著述の仕事を引き受け、1 年の半分は仕事をこなし、半分は旅に。彼の真価はその冒険と登山に、自ら脚本を書き、予告して演技し、世間をアッとさせる実績をあげたことにある。

ひとつの冒険が、次ぎの冒険の費用を生んだのです。

登山で一流なら、著作（35 歳で 20 冊に及ぶ著作）・講演・展示・マスコミへの顕示と広報でも、メスナーはプロです。ヘルリヒコフファーとの裁判沙汰敗訴で、人間への信頼不信、組織登山、他人の金でいく山にほとんど嫌気がさしたのでしょうか。以後組織登山より、

少人数アルパインスタイルを標榜し、彼の謂う自由な山・地上の楽園を追い続ける。

1983 年、居城として購入した中世の城を 84 年改装し、その総費用当時で 4 億円だとか・・・ヨーロッパにそれだけ彼の冒険を支持し評価する人が多い・・・そんなメスナーも 1985 年（41 歳）あと 1 座となったローツエ遠征の前に、「世間に知れわたれば、それだけ自由が奪われていく、そうはいってもさらに費用のかさむ遠征を可能にするには、自分の冒険をマスコミに売り、自分の経験を登山用具メーカーに、売らねばならぬことは、十分承知している。

14 座を完結すれば、一般大衆の注目を集めるため、必要以上の危険を冒す気になれない。

本来冒険家とは職業でなく、ひとつの生き方なのだ」と、生き延びたメスナーは述懐している。

だがこの言葉は形容矛盾です—ひとつの生き方—その生き方で、生計を立てた。これ、すなわち職業（プロ）であり「本来冒険家とは職業でなく・・・」の意味は、世間を気にせず金の心配もない。そんな冒険をしたかった、メスナーの夢を語っているのです。

86 年 14 座を完結させた年、メスナーはその言のとおり、彼が運営していた南チロルの登山スクールを山岳ガイドに譲り渡し、フィルネスのスポーツショップも売却

新たにユーヴァルの高山農場を手に入れ、その冒険の座標軸を垂直から水平に。

「僕は一介の徒歩旅行者として、これから長く生きていく（42歳）」88年～89年にかけて、チベット東部の徒歩縦断。ブータンへの旅。南イスラエルのエデア砂漠。パタゴニア、ニューギニアのジャングル徒歩旅行と、世界各地に旅を続ける。まさに鮮やかな引きざまでした。

50歳のメスナーは、激しかった30年間を回顧して、佐瀬 稔との対談で次のように語っています。

「死に関して、私は三つの事を言いたい。第一に死の危険のない所には行きません。第二に生が偶然であるようなところにも行かない。第三、いかに死の危険があろうと、生き残れる可能性のある場所だけに行く。私の冒険を貫いているのは、ありうるかもしれない死に直面し、対抗して生きていくという考えです」。

さらに、「アルピニズムはスポーツの埒外にあります。特に私の登山はそうです。まったく別物だと思う。スポーツより芸術に近い。自分を表現する、自分の意識下をより深くみつめるという意味において、画家がある意志を画布に描くのと同じだ」。

メスナーの言葉を言い換えれば、あるレベル以上の登山行為では、死は必然でないにしろ、死を意識する事は必然といえる。人間が生命体として、自らの身体、生命を維持、保全するための行為など、普段の生活では意識することがない。だが高峰登攀で強烈に意識するのは生命の維持で、非日常的行為の連続。ここに生きている自分を感じるのです。

「アルピニズムはスポーツの埒外にある」と言い切った、メスナーの登山哲学を説明した、『永遠の未踏峰』渡部由輝の文章を引用します。「人間に関する行為のうち、遊び系と、非あそび系の二つがあるとして（J・ホイジンガー「注」）スポーツは遊び系（代理可能、行為者が自分の意志で行為を中止、放棄できる）であるが、登山は代理ができず、スポーツ的でない要素が多い」—その極めつけが【危険】の問題である。

サッカーや野球で試合中（登攀中）に死んだ人など聞いたことがない。メスナーの2人の弟、ギンターはナンガ・パレバットで、ジークリフトは、ドロミテで死亡。これほどの限界的行為をスポーツなどという ～甘っちょろい遊びと～ 一緒にしないでくれ。

1988年第15回冬季オリンピックで、サマランチ会長がメスナーに、スポーツ功労賞として、メダルを授与しようとしたが、メスナーは断っています。「私は登山をスポーツと考えていない」がその理由でした。

冒険登山で稼ぎ、いま、自らの登攀の歴史をアルピニズムの遺産と名付け、次代のアルピニズム継承者へのメッセージとする、MMM [メスナー・マウンテン・ミュージアム] を2006年に開館。

プロ登山家<sup>\*</sup>として、メスナーの<sup>はな</sup>華やかな実績を超える登山家はもう現れぬでしょう。

彼の、登山史の遺産となったアルピニズムを超える（記録）は、超・脱アルピニズム宣言をして、近代科学のすべてを結集した実験を、社会が容認したときにしか期待できません。

素手で攀じる、AC（英国山岳会）のアルピニズムが、鉄で攀じる（アイゼン、ハーケン等）DA

V (ドイツ山岳会) のアルピニズムに変わったときのACの非難が、自然消滅した19世紀のヨーロッパ。21世紀となって、メスナーが唱えたフェアな登攀の呪縛を捨て近代科学発達立証の、8,000mソロ縦走を実行する一異端実験登山人の出現。

～もはや登山とは言えず実験ですが、これは、妄想でしょうか～

注。オランダの歴史学者。人間に関する行為を遊戯と非遊戯に分類

著作。冒険への出発。死の世界。エベレスト。ナンガ・パルバット単独行。K2。他多数。

次に紹介するボニントンは、その著書『現代の冒険』で月面着陸を冒険のジャンルに入れています [注]。

注。2007年9月7日。日本の月探査機(かぐや)が宇宙に。2008年3月・日本初の有人宇宙施設[きぼう]に土井さん他入室。アメリカは、2018年・有人月面活動を開始。2030年・月に拠点の建設開始。

### クリス・ボニントン (英・1934～)

#### 正統派アルピニズムの継承者・アドベンチャー・ジャーナリストという新分野を開拓

英国。ロンドン生まれ。カレッジ在学中、徴兵で軍隊に、陸軍士官学校に移り、軍人となる。

少年時代からの岩登り経験を買われて、陸軍山岳部隊の教官に。幸運にも陸軍ヒマラヤ遠征に参加し、アンナプルナII峰初登頂者(1960年・7,937m)の1人となる。帰国後、軍人を辞し民間会社に勤務のさなか、ヒマラヤの高峰・ヌプツエ(1961年登頂・7,879m)遠征のリポーター兼写真家として招かれたが、会社が休暇を認めず、山か、会社かの岐路に立ったが、結局山を選び(27歳)以来世界各地で激しい冒険人生を送ってきた。『現代の冒険』田口 二郎のあとがき引用

当初志向した、ビジネスマンを断念して、職業登山家として生きる決意をした時、その後の展開を予想したわけではなく、ルポライター兼写真家を職として、合間に登山するくらいの漠然とした自由業のイメージだったボニントン。

彼がプロ登山家として生計を立て得たのは、その優れた冒険と登攀、英語圏内の能力ある登山家の起用と操縦。遠征資金調達方式の開発。

かつ自らも極力最前線に立っての指揮に加えて、ライターとしての優れた力であり、彼を支えた有能なスタッフ(遠征代理人、出版代理人、地図作成者、各種文献収集者、タイプ筆記者)を活用した経営者的能力である。

正統派アルピニズムの帰結として、1970年のアンナプルナ南壁を成功に導いた、オルガナイザーとしての手腕[注1]。さらに1975年エベレスト南西壁遠征とヒマラヤの壁に挑戦[注2]。以後(40歳)冒険対象を、未知なる僻地・極地・河・海に。冒険と登山を企画し、実践し表現する達人であり、生涯を通して息長く活躍した正統派として屈指の存在。

16歳、北ウエールズの山に始まった登山活動は、64歳にして、なお、未知なる場所を求めてチベットのセブ・カンリに[注3]。

ここに、正統派アルピニズムの精神を見る。60代になって、つぎつぎと遠征を続けた、ボニントン。その資金は、かつての大観衆を集めた山の講演でなく、1975年のエベレスト遠征方式をモデルとした、人間管理を題材とした経営セミナー講師の報酬から、と。登山家にして“経営”を語る多才ぶり。まさにプロ登山家・冒険家の経歴です。

注1. ヒマラヤ初の壁登攀。ドン・ウイラース、ドゥガル・ハストンの2名登頂。

注2. ハストン、ダグ・スコット他2名登頂。

注3. ニエンチェン・タンラ山群の未踏峰・敗退。

著作。わが青春の登攀。地の果ての山々。アンナプルナ南壁。エベレスト南西壁・英国隊初登頂の記録。現代の冒険〔上・下〕。

mountaineer・1989。チベット未踏峰（セブ・カンリ）に入った記録・写真の編集著作・1999。他多数。

### 山野井 泰史（1965～）

東京出身。13歳で日本登攀クラブに。高卒後、バイトで資金を貯め、ヨセミテからヨーロッパでクライミング三昧。1991年小西浩文に誘われ始めてヒマラヤに（ブロード・ピーク登頂）各地のビッグ・ウォール単独登攀で、世界に名を知られたクライマーとして今日に至る。2002年、ギャチュンカンからの奇跡の生還。今日までも生き延びた命と引き換えの凄まじい登攀について、多くのライターが書いていますが、実際の現場体験をした彼が感じたモノなど、他人が書くのは不可能でしょう。

ただひとつ言えるのは「自分は世界一幸福な男である」という山野井の言葉は事実ということです。

その経歴は、彼がどう思っているか知りませんが、プロ登山家の定義にぴったりです。

しかし、マスコミへの露出、自己顕示に関心なく、世渡り下手の彼をプロ登山家の項に入れるべきか、否か、迷いました。

富士山での強力以外、定職につかず、その遠征歴を見ると、どのようにして資金を調達したのか不思議です。（ギャチュンカンの遠征総費用2人で¥150万）軽量化のため連絡用の無線機もなし、という超貧乏遠征で“山登りすなわち生活”を実践。もし彼がプロと言われることに、ためらいがあるとすれば、冒険登山への評価が欧米に比べて低い日本の社会への遠慮と、カネのために登るのでなく、登るために登る、という彼の美学に反する、ひっかかりでしょう。

山野井の山への姿勢を見ると、アルピニズムのある種のバリエーション。それが限界的行為となったので、自ら選んだのであり、あえて限界的行為と大声は出しません。

山を自然との闘争スポーツの相手〔獲物〕と単純に考え、攀じるだけ・・・（極地で飢えて、白熊を獲る行為は闘争であり、これを比喻すれば、生きぬくため、岸壁と闘争する行為と同じ）・・・昔の人が、生きていくため、山・森・海・川で、石槍や斧で獲物を追ったときの、岩登りまがいの行為、全力疾走、泳ぐ、獲物との格闘、捕殺に知恵を凝らすなどのすべての行為。

ここにはスポーツの要素、走る・泳ぐ・跳ぶ・投げる・闘う・考える、があり原始的狩猟がスポーツの起源なら、石槍と斧が一アイスバイルやハンマーとなり、それに近代人としての思考を加えた。これが闘争スポーツです。

相手は人でなく、自然と自分自身です。自殺と冒険は人間にしかできないとしても、死を賭して限界

に挑む山野井の深層心理は、結論でいえば、「分からない」であり・・・

1996年、TBS・放映・マカルー西壁登攀のドキュメント、(ヒマラヤ未踏の巨壁に挑む)の番組撮影で、一切の資金援助を断り自らの美学を貫いた山野井も、手足の指欠損と年齢からでしょうか・・・  
2007年、NHK・放映・オルカ登攀のドキュメント、(白夜の大岩壁)を見たとき、プロ的<sup>\*</sup>山野井から、プロの山野井となった姿を見て、ほっとしました。

メスナーの引退後の優雅な生活。著作と冒険ルポライターで、しっかりと財を成したボニントンに比べて山野井はあまりにも質素で、手足の指を失って今後の生計をどう立てていくのか心配ですが、凡人の心配に、彼は、笑ってこう答えるでしょう。

「何の心配もない。アドバイザー契約、たまの講演、登山技術指導、海外トレッキングに同行などから得る収入で十分です。勿論、身の丈にあった登山は続けます。いままでの登山を通じて得た、金銭に換えがたい体験、それは僕の財産です」。

偉大な探検登山家シプトンがその晩年に語った言葉、「人生の絶頂期に、自分が一番願っていた領域で活躍できた人は、幸せである。どんな運命になろうと、奪えない宝があるとすれば、それは自分の生き方に満足したという経験だけだ。一瞬でも永遠に記憶される、貴重な体験をしたという、事実はなにものにも変えることができないのだ」。

～まさに山野井の言う財産、それはシプトンの言葉そのものです～

## 登攀クロニクル

1984年～87年

ヨセミテ。ヨーロッパアルプスでクライミング。

1987年 ドリユー西壁 ソロ登頂。

1988年 バフィン島 トール西壁初登(北極圏)。

1989年 パタゴニア フィッツロイ 冬季敗退。

1990年 パタゴニア フィッツロイ 冬季ソロ登頂。

1991年 ブロード・ピーク 登頂(小西 浩文の隊に参加)。

1992年 アマダブラム西壁 冬季ソロ登頂。

1993年 ガッシャブルムⅡ峰 登頂。

1994年 チョー・オユー南西壁 ソロ登頂。

1995年 レディスフィンガー(パキスタン) 登頂。

1996年 マカルー西壁 敗退。

1997年 ガッシャブルム東壁 敗退。

1998年 ネパール・クスム・カングル東壁 登頂。

1999年 マナスル北西壁 敗退(ネパールの無名峰の壁 敗退。クルティカと2人)。

2000年 K2南南東稜 ソロ登頂(K2南東稜 敗退。クルティカと2人)。

2001年 ラトック1峰北壁 敗退 クルティカと2人。

2002年 ギャチュンカン 妙子と2人。途中からソロ登頂。下降中雪崩遭遇、生還。

2003年 朝日新聞スポーツ大賞受賞 植村直己冒険大賞受賞。

2004年 中国 四川省 ポタラ峰 試登。

2005年 中国 四川省 ポタラ峰北壁 初登攀 (5,350m)。

2006年 以後世界各地にビッグ・ウォールを求める旅。

2007年 グリーンランド・オルカ登攀 (山野井夫妻 木本 哲)。

著作。垂直の記憶

## 小西 浩文 (1962～)

石川県出身。北陽高校山岳部から、推薦入学の山梨学院大学は除籍（登山歴を見ると大学に行く時間などない）彼のHPの職業欄には、登山家とあります。小西浩文登山学校主宰。

15歳から登山を始め20歳のとき、高山研究所（原 真 所長）のパミール高原遠征の、コルジェネフスカヤ（7,105m）コミニユズム（7,495m）に参加し連続登頂。同年シジャパンマ（8,027m）無酸素登頂。

以後定職に付かず、体力絶頂期の、ヒマ有り、カネ無しの状態でも、半年は自分で隊を組織して海外遠征。半年は個人的登山ガイド（海外含む）で稼ぎ、山登りすなわち生活を続け、知らず、知らずの内にプロ登山家となっていた幸運な男です。〔8,000m無酸素登頂6座〕。

日本にかつてプロを公称する登山家は存在せず、登山は趣味の領域で、休暇と資金に四苦八苦の社会人ヒマラヤ登山者達に、遅れて生まれてきた運のよさ。高度成長期とマスメディアの落とし子、小西浩文は、1986年映画〔植村直己物語〕にかかわり、植村役の西田敏行と親交を得る。99年登山靴のG T ホーキンスと広告出演契約ほか、数社のスポーツメーカーと、アドバイザー契約を結ぶ。

2000年、テレビ朝日の番組、南米の最高峰アコンカグア（6,959m）には、西田敏行の推薦から登山コーディネータ兼、彼のガイドとして同行。

以後、ヒマラヤトレッキングと6,000m峰の登山を企画して登山活動を行う。青少年の野外スクール講師等も行い、以上経歴では、まさにプロ登山家といえます。

しかし、メスナー、ボニントンとの決定的な差は、彼本人の著作がないことである。登る、書く、話す、が、優れたプロ登山家の条件とするとき（『無酸素登頂・8,000m・14座への挑戦』・長尾三郎著・講談社）が小西浩文を紹介するただひとつの本です。

しかし彼のHPへのアクセス数は、メスナー、ボニントンの著作を読んだ山好きより多いかもしれませんが、著作より電子媒体での情報伝達の巧拙が、IT時代のプロ登山家の条件かもしれません。いかなる記録でも（文書で発表されなかったモノは存在しない）のが通説であったのに。ITの出現でこの通説が覆ったか。

以上挙げたプロ登山家は、いずれも肉体の晩年には勝てず40歳前後で、第一線登山からは引退して

います。これが生き延びた智恵でした。プロ活動でしっかりと財を成した、メスナー、ボニントン、三浦雄一郎。世俗な心配ですが山の世界しか知らず、蓄財の意識などあったとは思えぬあとの2人。すでに体力ピークは過ぎており、今後はプロ登山家から転じ（職業としての登山者）として、生きていくでしょう。

それでも、なお、果てしなく山をおって……

## 余談I。プロ登山家の2大スター ボニントン、メスナーについて

この両者の登山哲学の差は、AC（英国山岳会）の「自然をあるがままに受容して、それを克服する」に対し、DAV（ドイツ山岳会）の「登山の究極を死との闘いとする」歴史的遺伝子の流れか。

登山にチームワークを優先する（53年エベレスト）英国の伝統に育った知的、常識人ボニントン。その組織づくり、資金集めの巧みさに対し、ドイツの伝統は、チームプレイより個人プレイの発揮される、ソロを最高とする登山哲学であり（53年ナンガ・パルバット）人間不信のメスナーは、頭を下げての資金集め、組織づくりなどは、彼の自由な登山に反する行為でやる気なく、自らが登頂する“**自営業者のメスナー**”。

自らは登頂せぬ“**会社経営者のボニントン**”。その違いが登山と冒険に現れている。

具体的には、メスナーの14座に対し、ボニントンは8,000mの登頂歴1座〔注1〕。アンナプルナⅡ峰（7,937m）、ヌプツエ（7,879m）の登頂以外、高峰の頂上を踏むことなく、遠征のオルガナイザーの立場に専念しています。

又、アドベンチャー・ジャーナリストという新分野を開拓した以後の活動のほうが多く、山のぼりすなわち生活であったメスナーと違う。ボニントンはメスナーの登山を『考案された登山』とし、冒険的探検と登山スポーツの伝統的発展からは、やはり一種の逸脱であったと、評している。

かたやメスナーは登山はスポーツの域外にあって、ある種の芸術に近いと語っている。

モンブランに発した、正統派アルピニズムの伝統を重んじたボニントン。アルピニズムを超えた、ある種の芸術に近い登攀に陶醉したメスナー。

アンナプルナ南壁、エベレスト南西壁遠征で、100名近い人数を要したボニントンに対し、アルパインスタイルで高峰に挑んだメスナー〔注2〕。

これらは資金調達力の差もあったが、人数が多い遠征での人間関係の軋轢を嫌い、8,000mを最小人数の速攻で落とせると判断した、メスナーの才能です。

ヒマラヤ最初の壁、アンナプルナ南壁で、登頂の報に接したボニントンは、その翌日第4キャンプからBCに。詳細をメディアに伝えるため、タイプに向かっている。

登頂に全力を尽くしていたら、疲れてタイプなど打てるわけがない。マスコミへの配慮と雑事に追われた、ボニントンの不自由な山。

自前のカネのメスナーの自由な山。プロ登山家なら主体性ある登山をする、登るで、自ら登った自

営業者的メスナーはプロ登山家。他人に登らせた**会社経営者的**ボニントンは、プロ冒険業と言うべきか。

2人の著作を読み比べると、その登山哲学と自己主張の多いメスナーの著作。自己主張が少なく、他の冒険者への遠慮深い批判と、読む人を意識したルート・スケッチ図の添付、豊富な登山資料引用と、有能スタッフとの共同作品的ボニントンの著作。著作でも自営業者的メスナー。会社経営者的ボニントンといえます。

注1. 1985年。南東稜・エベレスト登頂「50歳」。これまでのボニントンの遠征は、新ルート、初登であったが、この遠征の時だけ、もっとも簡単なルートを選び、ボニントンは墮落したと・・・ジム・カランは評している。

注2. 1975年。P・ハーベラーと2人で、ヒマラヤ初のアルパインスタイルによる、ガッシャブルムI峰(8,063m)・北西壁初登頂。

## 余談Ⅱ。プロ的・山野井とステート・アマ的・クルティカ

98年来日して(自由への挑戦)という対談で知り合った、ポーランドのクルティカと山野井のコンビは、99年から3年間登攀を共にしたが全て敗退した。そのとき、登山界の超人に、自分の登山哲学との違和感を感じたという山野井。

その背景にあったのは、ピークより壁に傾倒し、クライミングでソロを標榜する山野井と、ピークを登山の中心にすえ、ソロを標榜せぬクルティカとの登山観の違いでしょう。

K2 東壁・敗退、ラトックII峰・敗退に、山野井はソロだったら、もっとやれたかもしれぬと、彼のクライミングスタイルに違和感を覚えています。クルティカの順化と安全のため、登高、下降、再登高と、山野井の純粋なアルパインスタイルとの微妙な差異。

決して無理して突っ込まぬ、クルティカが生き延びたのはわかるが、「もう少し無理してもいいのではないかと思う時があった」と言っています(『凍』 沢木耕太郎)

この2人の決定的差異は、クルティカの登攀戦略と、山野井の登攀戦略にある。まず登攀に際して、山野井は最小の荷物(K2・アタックで5キロ)ギャチュンカン(5泊6日で2人分の装備・食料他一切・10キロと登攀スピード重視の超軽量)一方クルティカは、用心深くいろいろ持ちすぎて動きが鈍く、デポして下降、再登高と基本的安全戦略をとるのに対し、ソロの山野井は、原則登りっぱなし。

この差は登山資金に心配ない、クルティカは逆に支援者へのプレッシャー(登頂していくらの成果主義)と安全から、周到な準備の結果の速攻。

山野井は、山に登る、登るためだけに登る一タダソレダケ(マスコミやスポンサーの拘束無し)の差にあります。

1987年、ブロード・ピーク登頂後、K2・東壁に敗退したクルティカは、支援者「国・企業」から、K2に要した費用返還を請求され、その返還に苦労したといわれています。

さらに、2人の差は、妻子と4人家族で普通に暮らすクルティカ。結婚はしているが、クライマーのときは独身となれる山野井、という、家族持ちと独身との常識的な差か。

山野井妙子（旧姓・長尾 妙子）は世界有数のクライマーで、その代償として、凍傷で手足の指 18 本が欠損。2 人で山に行っても、お互いが別行動。チョー・オユーで夫はソロ。夫人・妙子は遠藤由香「注」と 2 人、三日のビバークで別の壁を登頂と、常に死と隣り合わせの 2 人。男より強い女、「僕の妻みたいな長尾 妙子」という理解度と環境に恵まれた山野井。お互がクライマーと。こんなペアーは世界でただ一組。

注。1966 年生。8,000m 無酸素登頂 4 座・現在プロのクライミング・インストラクター。

### 余談Ⅲ。メスナーのソロ。エベレスト ナンガ・パルバットに ～なぜ～ ～17 年かかった 14 座完結に、途中寄り道してまでの 2 座～

さらに、独断、妄想で、メスナーのソロ登頂の 2 座を見ると、その 1 座・エベレストは、1978 年無酸素登頂にもかかわらず、80 年、再度登頂は、世界一高い山ゆえの無酸素・ソロ以上の偉業なしとしての考案登攀か。敗戦国・南チロル人と称するメスナーが、戦勝国〔英・米・ソ連〕に発したメッセージか。そうでなく、最高の自己実現の究極は、ソロとする、メスナーの哲学実践をエベレストに求めただけか。

### 次の 1 座・1978 年ナンガ・パルバット・ディアミール壁ソロは、怨念の再登頂か？ 傷心と悔悟のナンガ・パルバット遍歴への訣別か

メスナー初の 8,000m・1970 年のナンガ・パルバット（愛弟ギンターと 2 人で登頂後、弟は遭難死亡）は、帰国後、隊長ヘルリヒコフファーと裁判沙汰となり、その提訴の理由は、事前の遠征隊との契約違反にありました。

遠征前の契約書で、個人的報告を書くことは禁じられていたのです。（ヘルリヒコフファーは、1953 年ナンガ・パルバット登頂者のヘルマン・ブールとも、ブールの著書『ナンガ・パルバット巡礼』に激しい論争を起こし、ブールを告訴しています）。

ナンガ・パルバットでの行動に関して、メスナーは不当に中傷、非難されて反論しようにも、口封じされている思いを『ナンガ・パルバットの赤いのろし』という著作で、事実を伝えようとしたのです。

この本は発刊禁止となったが、2 人の争いの原因は、8,000m ではクライマーの自由な行動を主張するメスナー。それを認めぬ隊長との考えの相違です。攻撃前日にナンガ・パルバットの空を見たとき、かつてヘルマン・ブールが持った感覚と同じように、メスナーは視覚と経験から、頂上往復して帰還するのに間に合うと判断した。

### ～ルパール壁を攀じ一頂上一ディアミール壁下降一ビバーク 6 日の果ての生還～

ナンガ・パルバット・ルパール壁の最終キャンプ（7,350m）にいた、メスナー、ギンター、パウ

ワーの3人の行動は、ベースにいる、隊長からの天気予報によって以下のように決められていた。天気よし〔青い発炎筒〕のとき、メスナー、ギンターと下のキャンプから登るキューエン、ショルツの4人で攻撃。

天気悪し〔赤い発炎筒・赤いのろし〕のとき、メスナー単独でいけるところまで。

攻撃の前日、赤いのろしが、ナンガ・パルバットの空に打ち上がる。・・・なんと実際の天気予報は晴れて、青いのろしはずが間違っ、**“赤いのろし”**を発射したのです。

隊長は次のように弁解している。ミスに気がついたが改めて青いのろしを発射すると、上で混乱すると思い、発射をやめた。この発端は**“赤いのろし”**にあった。

赤いのろしを見たメスナーは午前3時、単独で攻撃に。途中追って来たギンターと登頂。頂上で弟の疲労度を見て、登ったルート、ルパール壁からの下降は無理と判断し、なんとザイルもビバーク用具も食料もなしで、未知のディアミール壁を下降ルートに。7,900m、6,200mと二夜のビバークの果て、3日目、ギンターは氷雪雪崩で遭難死亡する。

ボニントンはメスナーほどの登山家が未知の壁下降という賭けに及んだ心理を、ギンターの予想外の出現から、メスナーの判断が正常ではなくなったからとしている。

～メスナーも単独だったら「当然登った、ルパール壁を下降した」と言っている～

帰国後の遠征報告でギンターの未熟と、メスナーの判断ミスを徹底的に非難したヘルリヒコフアア。ギンターの追悼ミサに、ヘルリヒコフアア、キューエンも顔見せず、ベースで隊長から登頂祝いの花冠を贈られ賞賛された2人（キューエン、ショルツ）

と、非難されているメスナー。

ベースに下山せず山で死んだとして捨ておかれ、(赤いのろし)を見てから、壮絶な生還への道7日間。ギルギット手前30キロ、土砂崩れで足止めされていた遠征隊と、凍傷、裸足の乞食姿で、偶然に惨めな再会を果たしたメスナー。

～ボニントンは、おそらくメスナーだから、生きて還ったと書いている～

帰国して、凍傷治療と精神ショックでボロボロのメスナー。それに追い討ちかけた告訴。さらに裁判敗訴で罰金5万マルクと、彼が受けた衝撃は大きかった。この怨念が再登頂、ナンガ・パルバット・ディアミール壁のソロとなったのか(?)。執念のメスナーはナンガ・パルバットのこの壁に、70年以後3回いっており、4回目の78年・ソロ登頂。

(ディアミール壁を前に、3回も撤退したメスナーの心の葛藤と心理。それは愛妻ウシーへの思いと、冒険者から普通の人間に回帰して感じた孤独への怖れからと、メスナーは述懐している)

オルガナイザーとして優れたヘルリヒコフアア博士が、ナンガ・パルバット攻撃に際し、ハイキャ

ンプでの登攀者の、頂上への抑えがたい衝動に、理解があれば醜い裁判沙汰などなかったか。出自の権威と隊長の命令遵守に頑迷なクライマーでない、ヘルリヒコッファー（ヘルリヒコッファーは、全ての遠征でベースから、上には登ってない）。

彼は、すでに流れとしてあった、高峰のアルパインスタイルによる登頂に考え及ばず、一定規模以上の隊での指揮に、自己の存在理由と顕示を感じていたのか。

遠征隊長が隊員に訓示（命令ではない）した、クライマー小西政継の極限の登攀での、峻烈な自己責任の徹底。ココでは命令無視の告訴、裁判沙汰などはおきません。

• • ————— • •

1982年、K2遠征で頂上攻撃の際、登攀隊長・小西政継が登頂隊員に与えた次の訓示を紹介します。「ぼくが仮に8,500m付近で倒れた場合、助ける必要はまったくありません。なぜなら、これは僕の力と山の力を読みこむ計算を間違えたぼくの失敗だからです。逆にぼくは誰かが頂上付近で倒れていても、絶対に手をだしません。

無酸素で8,611mの頂上を目指すことは、1人1人が必死で自分のことで精一杯で、他の隊員の世話どころではないはずですが。したがって、無酸素で全員が頂上を目指すからには自分のことは自分で処理する、危ないと判断すれば下山する。登れると判断すれば登る。この辺は実に微妙なところですが、このところの判断が、生きるか死ぬかの別れ路であることは確かです。」『果てしなき山行』尾崎隆・中公文庫

• • ————— • •

メスナーの、ディアミール壁ソロは、怨念からか。傷心と悔悟のナンガ・パルバット<sup>オデッセー</sup>遍歴への訣別か。または、ソロで自分の身体能力の極限を出し尽くすことに悦びを感じる、苦しみの芸術からか……

～メスナーの答えは～

エベレスト、ナンガ・パルバットに何故2回も行ったのかとの、ジャーナリストのインタビューに、こう答えています。

（前の時は全部力をだしたのじゃなかったから）

## あとがき

登山史を見ると、初登山、バリエーション登攀も限界となって、メスナーに代表される個人としての限界への挑戦が、登山界を成り立たせた一とするなら。彼らにはプロ冒険家の呼称が適していたが、本稿ではプロ登山家<sup>\*</sup>と呼称しました。

なんだか山ばかり行っているのに、生活費や遠征費用など、どうやって工面したのかという興味と疑問は、登山歴を見れば一目瞭然で、大衆に支持されたた冒険登山が、その費用を生み出したのです。

さきに挙げた5人の経歴を見ると、普通の社会常識からは外れています。逆にいうなら、外れていたから、プロ登山家となりえたのです。スゴイ冒険や登攀をしたからといって、別に世の中が変わるわけ

でもないのに、そんなことにお構いなく、山にどっぷり浸かって、それで生計が立てられた。あ、なんと贅沢な生き方でしょう。

まさに冒険に価値ありと社会が容認した時代と、そんな国に生まれた運のよさ。これがプロ登山家を生んだ“最大の土壌”だったか。

最後にプロとアマの決定的な差は、気象・地形・地理に対する独特の読み。山が発する危険信号を察知する動物的本能といえる勘。危険回避の技芸。運の良さを備えた登山家がプロで、プロは死なず、アマは死ぬ、が多くの登攀史を読んだ実感です。8,000m無酸素登頂は、大自然と人間との極限の格闘です。

厳冬期のエベレスト登頂から、生きて還れなかった、加藤保男と同じ時期、チョー・オユーに挑戦していたメスナーは、登頂にあと一步と迫りながら、これ以上は無理と判断して断念、登頂を諦めて撤退しています。

～メスナーは自分の生還と比べながら、加藤保男の、死をこう評した～

私は危険を承知している。カトーもそうだったはずだ。だが私は断念し、カトーは危険を全面的に受け入れた。彼は死んだ。私はまだ生きている。

#### 引用・参考文献

本文中に挙げたものは除く

- 九里徳泰の冒険人類学。 九里徳泰・同朋舎
- 植村直己の冒険。 本多勝一 武田文男編・朝日文庫
- 冒険と日本人。 本多勝一・朝日文庫
- 冒険の達人 — クリス・ボニントンの登山と人生。 ジム・カラン・茗溪堂
- 生きぬくことは冒険だよ。 長谷川恒男・集英社文庫
- ヒマラヤ冒険物語。 クリス・ボニントン・岩波書店
- 冒険への出発。 R・メスナー・山と溪谷社
- 未知なる山・未知なる極地。 西堀榮三郎選集2巻・悠々社
- 残された山靴。 佐瀬稔遺稿集・山と溪谷社
- 東西登山思考。 田口二郎・岩波新書
- なぜ山に登るのか。 鷲 晴夫・文芸社
- 高みをめざして R・メスナーの素顔。 R・フォックス・白水社
- ラインホルト・メスナー自伝。 松浦雅之訳・TBSブリタニカ
- 山は晴天。 小西政継・中公文庫
- 垂直に挑む。 吉尾 弘・中公文庫
- 登山史の森へ。 遠藤甲太・平凡社
- 柳田国男全集。 筑摩書房
- 孤独な群衆。 D・リースマン・みすず書房
- 身体現象学。 市川 浩・河出書房出版社
- 現象学の視線。 鷲田清一・講談社学術文庫

## — 追 悼 —

### ニッコリ・ニンマリ・ニヤリ・ニタリ

平井幹男（昭50文）

2007年のクリスマスイヴ、朝倉君の突然の訃報に、『何で僕より若い後輩が!』と、愕然となりました。夜、一人になりウイスキーの水割りを飲んでいると、若き日の彼との思い出が次々と甦ってきました。

彼との出会いは、もう40年以上も前の春のことでした。当時、箕面高校山岳部の主将をしていた僕の教室に、一学年上の朝倉君のお姉さんが訪ねて来られたのが始まりです。お姉さんは「箕面高校に入学した弟が山に興味があるような感じなんだけど…、体力のない子でも山岳部に入部できるかな?」と心配しておられました。こちらとしては大歓迎のお話で、早速次の日の昼休みに、お姉さんに連れられた朝倉君と対面しました。真新しい学制服を着た朝倉君が、ニッコリと笑って「よろしくお願いします」と頭を下げたのを覚えています。当時の箕面高校山岳部の活動は、結構活発なものでした。夏山は勿論のこと、週末の岩登り・夏から秋の沢登り・冬は雪洞とツェルト使用のロングラン山行。また、理解ある体育教諭のお陰で、校舎屋上からのアプザイレンや校舎間にザイルを張ってのチロリアンブリッジ、沢登りの一貫と称してザックにレンガを詰め、溜め池での水泳訓練まで。今、思うと、教育委員会や高体連真っ青の活動に、朝倉君共々、青春を謳歌していたものです。

高校卒業後に朝倉君と再会したのは、僕が大学2年・彼が大学1年の春になります。新人勧誘の机の横を足早に通っていく朝倉君と僕の目が

合った時。その時が、彼の甲南山岳部への運命の入部となったのです。純粹に嬉しさを感じている僕とは違い、彼は悪戯を見咎められたかのように、はたまた屠殺場に連れてこられた牛のように怯えた目をして、「あ〜!見つかってしまった!」と、叫んでいました。

この年は新入部員が多く、女子部・マネージャーを含め10数名であったと記憶しています。しかし、その中で山岳部経験者は、朝倉君唯一人でしたので、彼には随分助けられました。真面目で、そつなく山行をこなす一方で、新人時代より少しばかり（数々!?)の失敗の逸話にも事欠かない彼でした。

朝倉君が1年生の時、仁川で岩登りのトレーニング休憩中に、彼の投げた石が川の中の魚に当たり、魚が浮き上がってくるというハプニングがありました。私には世界一不幸な魚が、たまたま石の下にいただけとしか思えませんでした。朝倉君は「何というコントロール!天才だ!」と、ご満悦でした。

しかし、この仁川の魚の怨霊に祟られたかのような出来事が起こりました。彼が2年生の5月、不帰東面入山の日、南股出合いの雪溪からダイビング水泳してしまったのです。それは、当時クラブで皆に歌われたほどでした。

そして7月まだまだ祟り(?)は続きます。北海道日高の偵察山行では、彼と村田君と僕の3人で春山に向けてルート確認をしました。日高は登山道がなく、沢を詰めて稜線に出るルートで、地下足袋・草鞋の足ぞろえで帯広より入

山しました。熊の恐怖に脅えながらも公平を期して1ピッチごとにジャンケンでトップを交代。3人共が『どうか自分がトップの時だけは、森の熊さんに出会いませんように』と、祈りつつの遡行でした。何とか偵察山行を無事に終え、下山。しかしバス停に到着した途端朝倉君の悲鳴が…！「あっ！バスが出てしまっている！」確か時間の確認は、彼の担当でした…。ジャガイモ畑の中を帯広方面に長く長く続く小石だらけの1本道。地下足袋の底に伝わる痛さに耐えながら『今度は仁川の魚の気持ちを味わえ！』とばかりに石を拾っては朝倉君に投げつけていた僕ら2名。夕日に暮れなずむ道をひたすら歩いたことを覚えています。

僕たちのリーダー会も秋・冬・春と過ぎ行き、どうにか彼らに引継ぎをする段になりました。僕たちは人望のある朝倉君を迷わず主将に指名しました。

彼らのリーダー会の最初の山行は5月の北岳バットレスでした。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ尾根と各アタックパーティーを発表する朝倉君。彼曰く「平井さんには私と渋谷君と3人で、特別にV尾根のフランケを用意してあります。」嫌な予感をひしひしと感じながらルートに取り付きました。ボロボロの岩と這松の連続「オーイ朝倉、いつになったら核心部のスッキリとした岩が出てくるんや」「まだ上部なんか？」と不安が募る中、這松の連続登攀は長々と続いてゆき、「朝倉、なんぼ箕面高校繋がりとはいえ、俺らは箕面の猿か！」と、ぼやく僕に「もう少し我慢して下さい」と宥める朝倉君。しかし、ついに頂上まで核心部の岩は現れなかった…。仁川の魚の怨霊の威力(?)や恐るべし！

そんな彼の本領発揮となったのは、夏のこと。カナダでの上級生合宿にリーダー会から村田

君・早川君、4年生からマンタと私、OB1年目の井上さんの5名を取られるという状況の中での合宿でした。主将として、残った上級生部員と1・2年生を纏め上げ、合宿を成功させたのは、彼の力量に他ならないと思っています。

秋から冬の彼らのリーダー会は、合宿も無事成功させ、彼は残りのクラブ活動と学生生活をエンジョイしていたように思います。互いに4年生5年生となり、どういう訳か卒業を迎えたのは同時だったのも、彼との縁の深さでしょうか。朝倉君は「これで同級生ですね」とニンマリと笑っていました。

その後は、あまり会う機会がなく年月を重ねていきましたが、7~8年前に箕面高校の合同同窓会が高校学生食堂で催された時のことです。『高校の食堂で1杯もいいだろう』と参加していた僕が、飲み干したグラスを置き談笑していた時、朝倉君がビールを片手に向こうから近づいてきました。「何で、君が？」と、問いかける僕に、朝倉君は「僕もこの年になって、ビールを注ぎに来なければならぬなんて…。まあ、一生直らない習性ですかね！」と言いつつ、ニヤリと笑っていました。

訃報がこんなにも早く届くとは…。

何杯目かの水割りと共に、思い出が走馬灯のように浮かんでは消えていきます。水割りが、だんだん塩っぽくなってきました。何年かして僕がそっちへ行った時、空のグラスを持ちながら「平井さん、今度は僕が先輩になりましたよ！」と言って、ビールを催促しながらニヤリと笑うのでしょうか？まあ、その時は喜んでビールを注がしてもらって、ゆっくりと飲みつつ、思い出話に花を咲かせるだけでもしまししょうか。

## ホームページに寄せられたメッセージ

よう頑張ったね、朝倉君！

高橋けい子 12月24日

皆の話をよく聞いてくれる、優しい同期でした。最後に会ったのは、4月の中澤君のお父様のお通夜の時でした。車で送ってくれましたが、暗かったので、なかなか自宅への道案内ができず、「ゴンチャン、それでよう運転してるなあ！」と呆れられました。次の日病院だとかいってたけど、元気そうで、このまま治ってくれると信じてたのに。

後輩達が書き込みをしてくれたので、私も思わずしてしまいました。初めての書き込みで、ドキドキです。村田君がどんな気持ちで写真を編集したか、と思うと胸が熱くなります。いっぱい編集ありがとうね！

早すぎる！！

げて 12月25日

家内（イモ…懐かしい響きですな）からの電話で、山本先輩から電話があり朝倉先輩の訃報を知りました。年末スキーのお誘いかと思えば……朝倉さん。

秋に、G先輩に誘われH先輩の墓参りに行ったときの話しからえば早すぎる！

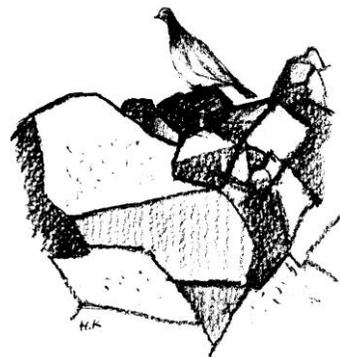
高校時代からの先輩で、さらにその先輩の縁故で芋づる式に山岳部に在籍するはめになって、自分が一番、旬の時代に関わった人なので……残念です。思えばヒナコさん、横山さん……いろいろお世話になった人たちがどんどん先に逝ってしまわれる。最近時々感じるのですが、自分はあと何回正月を迎えることができるのかなあ、と思うんですよ。めったに投稿しないのにスイマセン。

冬の雷鳥

マンタ 12月26日

雷鳥へ。よくペアを組んで俺の変な計画につきあってくれて有難う。

よくルートファインディングにミスったパーティーでした。どちらかがルートミスに気がつきなげかうまく山行を終えていた。日高でガスられた時の話を又君としよう（奇跡的な軌跡を）思っていた。ひょうたん池でのおもろい話も。助けられたり、助けたり。攻撃的な俺に反し、いつも控えて仲間をそれとなくひき立てる、君の笑顔に助けてもらった事の方が多い。今日斎場へ向かうバスから、よく晴れわたった空に白い雲が。アッ白い雷鳥や！皆がルートファインディング間違えんように、優しく微笑みながら飛んでいた。



## 一 図書紹介 一

### 「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」

越田和男 (昭36理)

編集：松方恭子

書名：「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」

発行：清水弘文堂書房 2008年7月

定価：2,100円(税込み) 21.5×15cm 335頁

伊藤愿(1908～1956、昭和4年旧制甲南高校卒、同7年京都大学卒)の遺稿集である。我々の愛唱する「甲南山岳部・山の歌」の作詞者としても知られる伊藤愿さん(以下愿さん)は昭和初期の甲南高校山岳部の創成期に、北穂滝谷の単独遡行、小槍の単独登攀、5月の槍、薬師、立山縦走など数々の山行記録を樹立して、当時の山岳界に甲南高校山岳部の名を広めた。京都大学へ進学後もジャンダルム飛騨尾根、鹿島槍北壁の初登攀などの記録がある。そのころ既にヒマラヤに目を向け、パウエル・パウアーの「ヒマラヤに挑戦して」を訳出出版。更に、当時ヒマラヤ登山には不可欠とされていた極地法登山を、我が国で初めて冬の富士山で実践し世に紹介。昭和11年には、京大のK2遠征計画の準備のために単独で渡印するなどの活躍があった。

愿さんは、終戦後間もない昭和26年には、6ヶ月にもおよぶ欧州への官費出張の機会を得て、アルプスへも足を延ばし、マッターホルンの単独登攀などを楽しんだ。この出張中に房子夫人に本書書名の所以となった“九十九枚の絵葉書”を送ったことを、後に甲南の後輩の田口二郎さんが追悼文(日本山岳会「山岳」所載)で暴露して、山仲間間で愿さんの愛妻家ぶりが一躍有名になったという経緯がある。

本書は、「九十九枚の絵葉書」を冒頭に、同じ旅からの報告として「マッターホーン単独行」(日本山岳会会報)、「アルプス1951年」(雑誌・岳人)、「パウアーとの会見記」(同)と続き、若き日の足跡として「山旅(単独行)」「瀧澤谷潤澤岳登攀」(甲南高校山岳部・報告)があり、更に単独渡印の折の貴重な記録「滞印日記抄」(甲南高校山岳部・部内雑誌)なども転載されている。追憶として再録されている平井一正氏の「AACK人物抄・伊藤愿さん」や田口二郎氏の「伊藤愿さんの思い出」(日本山岳会・山岳)なども読み応えがある。以前「山嶽寮」に掲載された小生の「伊藤愿・山の履歴」の加筆訂正版も巻末の「拾遺」に採用してもらっている。

さて、愿さん没後既に50余年の今、何故このような本が出版されたのか。ちょうど愿さんの生誕100周年、房子夫人の卒寿祝いという節目ではあったが、愿さんの次女松方恭子さんが、本書の編集を思い立つまでには、いくつもの偶然ともいえる人と人との出会いがあった。ちょっと長くなるが、甲南がらみのところをご紹介しておきたい。

何年前か前、山岳部の先輩山岡静三郎さん(昭和11年旧制卒)が青梅の慶友病院に入院され、同じ病院に入院しておられた房子夫人とバッタリ出会われた。お元気で面会可能とのことで、

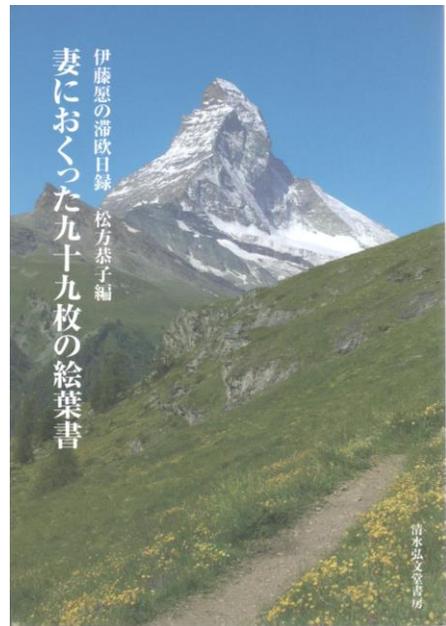
何年か前の暮に伊藤文三さん、平井一正先生、平井吉夫と小生で、お見舞い旁々愿さんのことなどお聞きしようと伺った。平井先生はちょうど京大学士山岳会の機関誌 AACK Newsletter の連載記事にむけて愿さんに関する資料を集めにかかっておられたので、いいタイミングだった。

この日、「九十九枚の絵葉書」にも話が及び房子さんがおっしゃるには、愿さんが亡くなる前の入院闘病中、これを原稿用紙に丹念に書き写された。後の活字化の意図があったのかも知れない。オリジナルはこともあろうに看護婦が知人に見せるといって持ち出し、タクシーに置き忘れてしまった。新聞広告まで出して探したが見つからずじまいで、労作の手書きの写しもその後だれかに貸したが行方不明のままだという。ところが、これが平井吉夫の手許にあった。由来を辿れば、持ち出したのは田口二郎さん。愿さんの追悼文の執筆の参考にされたのかも知れない。それを岡澤祐吉さん（「スイスの山案内人手帖」の著者）が借り出している間に田口さんが亡くなられ、岡澤さんはこれを甲南のOBで旧知だった飯田進（昭和38年卒）に届けた。飯田は自分が持っているよりもと思い平井に託したというのが経緯。写しの書簡集は無事何十年ぶりかで平井から房子夫人の手に戻って一件落着し、平井先生のお書きになった「人物抄・伊藤愿さん」は AACK Newsletter（2005年3月号）に掲載され、それは甲南山岳会のホームページにも転載された。ここまでは伊藤家としては房子夫人どまりで、お子様方はどなたもご存知なかったらしい。

次女松方恭子さんが親戚の方から、お父さんのことが甲南山岳会のHPに載っている、と知らされたのはHP掲載後一年以上経ってからだった。早速難色を示す甲南大学の事務局から平

井先生の連絡先を聞き出して連絡をとられ、あとは芋づる式に平井吉夫と小生もお会いするに及んだ。古い甲南高校山岳部の部報や部内雑誌に掲載された多くの遺稿に初めて接した恭子さんは痛く感動された様子で、絵葉書の書簡集とこれらを併せての出版を決心された。その間、友人のご主人で出版社社長の故磯貝浩氏（作家・写真家）や、スイス人を通じて知り合った元中央公論の編集者の花岡浩氏からの出版協力の申し出を受けられたことなどは、本書の「あとがき」に述べられている。

2008. 8. 7.



## — 会員短信 —

### 名誉会員・顧問・特別会員

山本 三郎 (名誉会員)

残暑お見舞い舞い申し上げます。物忘れが多くなり知力・体力ともに自信をなくしています。老いるのは仕方ないのですが周囲の人に迷惑をかけないように心掛けています。

総会・慰霊祭のご案内ありがとうございます。剣道部の合宿で武蔵の里で孫と同じ年の学生を相手に4泊して午前・午後稽古して来ました。“余り頭を叩かせたら年寄りには良くないから程々にしなさいと云われ乍ら趣味の剣道を。今年は山岳部の活動が甲南スポーツ新聞に大きく頁を埋めているのを見て、来春は甲南高校からそして新入部員も多勢入部して、往年の山岳部に復帰することを信じています。皆様のご活躍とご多幸をお祈りします。

平井 一正 (名誉会員)

そのころ海外に行く予定がありますので欠席させていただきます。山岳会の発展をお祈り申し上げます。

出席するつもりでおりましたが、急に用事ができて出席できませんお許し下さい。チベット問題でまだどうなるか不明ですが、神戸大隊のカンリガルボ登山隊(08年秋)に山本さんが参加していただければこんなうれしいことはありません。

神戸 謙司 (中高山岳部顧問)

ご無沙汰して申し訳ありません。4月5・6日で北八ヶ岳北横岳周辺へ山スキー合宿に行ってきました。

鈴木 敬吾 (特別会員)

いつも参加できずすみません。

19日は所用があり欠席します。

### 旧制高校

故 井上 正憲 (旧8) ご遺族様

前略、山岳会の担当者の皆様大変ご苦勞様です。何時もご案内いただきながら大変失礼しておりました。昨年11月2日死亡しました。長い間本当に色々と有難うございました。

関 集三 (旧10理)

今春、満92歳を過ぎ、毎月前日上京の日本学士院例会出席も21年目の一昨年春から欠席しております。山田科学振興財団の顧問は続けております。昨秋、大阪大学博物館入りを果たしました。同級生は皆様他界され淋しい限りです。月1回の通院、週一回のリハビリで体調維持につとめています。

老生 体調不足のためここ10年数年欠席つづきです。日本学士院会員として21年出席しましたが、一昨年から上京中止、欠席しています。弟の暢四は物故会員です。老生おそらく最年長ですが、お会い出来ないのは残念です。皆々様によろしく。

佐野 源一 (旧10)

6月に92才になりました。2000年発病した膀胱ガンは毎年のように再発、05年1月に5回目の手術を受けて以来現在迄無事に過ごしていますが、油断は出来ずDrからは無理をしないよう云われていて、腰痛でリハビリに通う以外1kmに足りない距離の散歩をする程度ですので、残念ながら欠席します。ご出席の皆様によろしく。

残念ながら欠席いたします。腰痛で余り長くは歩けず又膀胱ガン再発を考えて、病院にいく以外甲東園を出た事はありません。情けなく悔しいです。

**山岡 静三郎 (旧 11 理)**

近況：1916年7月27日生まれ91歳。昨年と変わりませんが、脳と循環器に異常なく左胸部変形性脊髄症が異常に悪化していて医師から転倒防止の為に車椅子の使用を指示されていて会合は辞退しています。この秋の集会のご盛況をお祈りいたします。

**奥山 正雄 (旧 12 文)**

元気です。皆様にお会いしたいのですが残念です。

残念ながら当日所用あり欠席させていただきます。ご盛況を祈ります。先日、茨木C.CでGolfをしたら、甲南大学2回生がアルバイトでキャディとしてついてくれ大変親切にしてくれ、しかも山岳部員という事でなつかしく思いました。

**赤松 二郎 (旧 14 理)**

私も88才になる。すっかり「じじい」となり世の中を引退して引きこもっています。

08年3月 先日カンボジアに行ってきた。琵琶湖の10倍の湖あり水上生活者5,000。小中学校に体育館。この国の若者は国の発展のためいくらかでも働ける道が展げる将来があるものと見て来た。この国の人は雪を知らないのだ。

**鷺尾 顕 (旧 15 文)**

参加できないのが残念の極みです。

ご案内有難うございます。体調不良につき残念ながら欠席いたします。諸兄によるしくお伝え下さい。

**伊藤 文三 (旧 15 文)**

日常生活には、さしつかえない程度で生きていますが、遠出の元気ありません。昨日・今日

の事は忘れるのに、昔の甲南現役時代のあの山、あの岩壁のことははっきりおぼえている始末。

なんとか生きてるといふかんじ。海老名の大関邸の花見会(4/6)には、なんとか顔出ししようかと思っておりますが、山岳会総会・慰霊祭、関西まで出むく元気ありません。

**小川 守正 (旧 17 理)**

高齢多病のため秋の集会には参加できませんが心は出席させて戴きます。香月さんをTopに結んだザイルがさらに高くヒマラヤの峰々にまで延びていること心から喜んでおります。若い人々にさらなる幸あらんことを祈ります。

86歳になって山岳会・山岳部の若い人に会い話を聞くこと本当に幸、感謝しております。願わくは、その若い人がもっともっと多くなることです。山岳部の健闘とさらなる拡大発展を心から祈ります。

**故 茂木 光隆 (旧 18 理) ご遺族 茂木佐緒子 様**

主人が他界いたしまして早や半年が経ちますが、こうしたお報せを見ますと主人が愛した甲南高校が私まで懐かしく思われます。五月の芦屋ロックガーデンの慰霊祭には何えず残念でしたが主人も安らかにこの地に眠っていると思います。長い間お世話になり有難うございました。芦屋のロックガーデンには機会があれば息子も行きたいと申しております。

**故 茂木 光隆 (旧 18 理) ご遺族 茂木源人 様**

連絡が遅くなり恐縮です。昨年、父 光隆が亡くなり慰霊祭の連絡をいただいておりましたが、日程が合わず又母 佐緒子も高齢のため代わって私が参加させていただきたいと思っております。宜しくお願い申し上げます。

熊谷 治 (旧 19 文)

入院中のため出席できません。申し訳ありません。皆様によりしくお伝え下さい。

徳末 省三 (旧 21 理)

ご通知頂き有難う存じます。お返事延引で申し訳ございません。主人は8年以上の入院生活で、甚だ勝手ながら今度は何卒ご放念下さいませ。徳末 悦子 妻

丸山 照夫 (旧 25 文)

しずかに老いを養っております。いつもいつも欠席で申し訳ありません。

伊藤 五介 (旧 25 文)

元気です。

年並みに元気です。

## 新 制 高 校

中井 久夫 (新高 27)

一応、五体満足で過ごしておりますが、ごく小さな脳幹部の梗塞があつてこの間はちょっと危ないところでした。静養を主としています。皆様のご健康を祈ります。

北方 龍一 (新高 30)

多少時間が取れる様になりましたので、種々なボランティアに参加しています。

平井 吉夫 (新高 S32)

バブさんの世話でモンゴルで遊びました。7月の初めから2週間、大草原を走りまくり、子供時代の夢を実現しました。これも甲南生だったからこそその至福です。

JACの図書委員会を越田・国学院OB大橋氏・大阪外大OB田村氏と長年にわたり運営してきました。今般、このJAC唯一の山岳文化の研究、継承を担う委員会の委員長を後進に譲り、かなり身軽になりました。6月末から越田たちとスイスにのんびり旅行をします。

竹原 祐爾 (新高 S33)

いつもご案内ありがとうございます。月に一度位、近くの山を歩いています。7月末に乗鞍岳に登って来ました。頂上の気温は13℃、下界の暑さをしばし忘れました。会員の皆様に宜しくお伝え下さい。

元気で日々忙しくして居ます。皆様によりしくお伝え下さい。

永島 孝男 (新高 S37)

昨年、41年間勤めた会社を退任、元気に第

2007(平成19)年秋「木曾福島集會出欠」と2008(平成20)年春「総會出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

二の人生を送っております。甲南山岳会の益々の飛躍を祈念申し上げます。

商用出張のため欠席致します。65才を向かえ最後のサラリーマン人生をおくっています。御盛会を祈念。

川村 静治 (新高 S37)

8月に木曾駒の宝剣山荘までと乗鞍にロープウェーとバスで行って来ました。夏の位ヶ原からは一体どこをスキーで滑ったのだらうと春山の姿が浮かんできませんでした。鈴蘭小屋が一見ヨーロッパ風になっているのも時代を感じさせます。

山城 國暉 (新高 40)

当日は所用のため欠席させていただきます。

白川 浩平 (新高 H2)

土佐清水に引越し、約半年が過ぎました。毎日、海へ川へとくりだしております。中古小型ボートも購入しましたが、手つかずのシークリフがいたるところに見うけられます。どなたか、開拓される方はいませんか？？ちなみにクライミングシーズンは冬です。

春から、海のすぐそばの家に引越しします。家から少し林の中を歩き、沢沿いに小さな浜に出ることができます。林の中が少し急な坂になっているので、自力で山道を作ろうかと考えています。磯では、黒アワビが採れるそうなので、今から楽しみにしております。

2007(平成19)年秋「木曾福島集会出欠」と2008(平成20)年春「総会出欠」に併せてお知らせいただいた近況です。文字のスタイル、秋は明朝、春はゴシックで区別しています。

大 学

小原 耕治 (大31 経)

相変わらず元気ですが、この8月24日 長男が死亡しました。当日は四十九日の法要が予定されており、残念乍ら参加できません。参加の皆さんの顔を見られないのは残念です。盛会を祈ります。

元気に暮して居ります。幹事役御苦労様です。会員諸兄に逢えるのを楽しみにしております。

阿部 純一 (大31 経)

体調はかなり回復してきましたが、残念ながら本年も欠席します。皆様によろしく。

(阿部純一会員は7月28日夕刻、帰天されました。御冥福をお祈りいたします)

砂川 彰雄 (大32 経)

ご案内有難うございます。一年ぶりに楽しい一夜を過ごせることを感謝しております。

総会のご案内有難うございます。誠に申し訳ない次第ですが今回も欠席させていただきます。盛会をお祈り申し上げます。

柳澤 正 (大32 経)

幹事役ご苦労様です。深謝して居ります。出席いたしますので、よろしくお願い致します。

永年に亘り、幹事役お勤め戴き有難うございます。小生、日々は元気に過して居ります。今回は、残念乍ら所用あり両日とも欠席いたします。悪しからず。

宮本 侑 (大32 経)

女房の体のぐあいが良くないので、欠席いたします。

行友 利安 (大 32 経)

体調悪く欠席させていただきます。

鈴木 頼正 (大 33 経)

今年は10月6日に福井県大野勝原の荒島岳に登り午後3時下山予定5時少し過ぎますが行きます。シニアばかりです待って下さい。7月に落下し右肩を打撲右手が上がりませんが、ボチボチゴルフを練習してリハビリに勤めています。秋の集会を楽しみにしています。

昨年、福井県の荒島岳(1,523m)に4人(柳澤・麻島・廣瀬)と登りました。今年は白山(2,702m)を目指しています。最近是人混みを避けて山里を散策しています。ゴルフは月に二回グロス100を切る様に頑張っています。事務担当:井上 知三さん・ホームページ担当:塩崎 将美さん・編集担当:山本 真博さん、大森 雅宏さん御世話かけます。

田辺 潤 (大 34 経)

幹事様、いつものことながらご苦労様です。小生 8/31 腓尾部腫瘍にて手術を受けることになりました。ガンかどうかは術後の病理検査でないと判らないそうです。4週間の入院が必要とのことですが、一応出席と致しました。駄目の場合は、ドタキャンとなりますがお許し下さい。いつもの沢登りは従って欠席です。ガチャ

幹事の皆さんご苦労様です。毎度のこととはいえ感謝しております。4月19日は会社行事あり、残念ながら欠席です。昨年来モーレツに社長業が忙しくなり、本年は例年の半分以下、実質4日間しかスキーを楽しむことが出来ませんでした。今春より息子への引継ぎを始めましたので来年に期待しております。皆様よろしく。

美田 靖夫 (大 35 経)

平成19年7月27日～29日まで生物班のOB会を7人で三島で行い富士山の湧き水をしこたま飲んできました。いつもお世話して戴き感謝しています。

昨年夏、須磨で泳ぎました。結構泳げるものですね。前月より無理のない程度に須磨寺の奥の院を散歩しています。

芦田 匡平 (大 35 理)

皆様に宜しく。また、6月にお会いします。

昨年暮れより出掛ける時は襟巻きをして、寒さを感じず来ましたが、3月半ばになってもう良からうと外したところ、風邪を引いたもよう。どないなっとなね!

鳥居 威男 (大 35 経)

内臓的には元気ですが左膝の痛みが完治せず、1時間以上歩くと痛みを感じ、長距離の車の運転も無理な状態です。来年からは参加できると存じます。その節はよろしく願います。皆様よろしくお伝え下さい。盛会をお祈り致します。

毎日元気に過ごしております。孫も上は小3年になり憎まれ口を、膝がいま一つ順調でないので散歩で体調を整えております。

伊丹 弘忠 (大 35 年経)

幹事さんお世話になります。元気にしておりますが、腰の調子が悪く、長時間の乗車はこたえますので今回も欠席します。皆様よろしく。

元気にしておりますが、相変わらず腰と膝の調子が悪く苦労しておりプールで歩行訓練をして早く里山くらいは歩ける様になりたいと思っています。

牧野 宏 (大 36 経)

盛会をお祈りいたしております。

越田 和男 (大 36 理)

もっぱら低山徘徊と山麓の小旅行を楽しんでおります。この7月には話題の青蔵鉄道に乗ってラサ詣でしました。

2月～3月にニュージーランドを再訪。5年前の今回は甲南の仲間とのトレッキングが主。今回はなまけて鉄道・バス・レンタカー・船などであちこち旅をした。山良し、水良し、ワイン良し、蛇居らずの良さは再確認できたが、NZドルが前回66円が90円近くになり閉口した。

田中 孜 (大 36 経)

まだ現役で働いています。東北の秋田で単身赴任で頑張っています。そろそろ神戸へ帰ることを考えています。

廣瀬 健三 (大 36 経)

久しぶりの参加です。9月の末にカンロク「森本兄」と日本山岳会の四国山行に参加のあと御遍路廻りを楽しみにしていましたが、申込のタイミング等で残念乍ら実行できませんでした。

山登りが遠ざかっていますが、今夏はカムチャッカの山へ行く予定です。御陰様で元気で、ホボ毎日テニスコート上を走ってます。

藤安 賢一 (大 36 経)

2006年1月に胃ガンの手術をし胃の3分の1を切り取りましたが、その後は順調に回復し、無理喰いは出来ないものの今では普通に食べる事が出来るようになりました。しかし10kg減少した体重はそのままでなかなか元に戻りません。仏舎利塔への散歩は継続しています。

大関 和夫 (大 37 経)

山歩きとスキーを楽しんでいます。四季それぞれの楽しみがあります。信州の山々も年々さびしくなっています。別荘族も年寄りばかりです。山歩きも単独行か多人数のパーティが目立ちます。

スキーは続けています。70才を過ぎた甲南のスキー愛好者は、ますます修練をかさねて、上手になっています。80才までは滑れそうです。それにしても、みな元気でびっくりします。昔のままで冬の山々を楽しんでいます。

柏木 宏文 (大 37 経)

介護4級の現在、週に3日デイサービスでお世話に成り、4日は自宅介護の状態です。盛会であります様に。 柏木 宏文 内

二谷 和成 (大 38 経)

今夏の猛暑には参りました。8月末福井の日野山(越前富士)へ登りましたが、足のケイレン(熱中症?)でやっとの思いで下山。秋の笠岳を計画していましたがあきらめました。もっぱら近郊へのハイキングです。

月に2～3日近くの低山をあちこちのグループと歩いています。昨年夏は乗鞍に行きましたが、今年もどうか3,000mの山へ登れればと思っています。

岡田 英暉 (大 38 営)

前略、ご案内をいただき厚く御礼申し上げます。今月は地元熱海での催しや、寄合いと大阪出張が重なり出席できません。日程的に出張とタイミングが合わないのです。是非皆様に宜しくお伝え下さるようお願い申し上げます。

森本 全彦 (大 39 法)

事務局の方、いろいろお世話願ひありがとうございます。今年早々仕事上で足の指先を損傷し、スキー・山へと行けずやっと治ったところ。10/8~10/26 迄関学 小西・青木、甲南 柏・塩崎・浪川とでランタンにトレッキングです。

年には勝てず、めっきり山に行く回数もへり体力の限界近づいて来たようで寂しく感じます。今のうちにと、この5月の連休に香川が最後の遍路旅となりそうです。是非 結願を達成したく思っています。

武田 雄三 (大 39 経)

幹事サン、毎度の事乍らご苦労様です。楽しみにしています。

会員諸兄姉とお会い出来る事を楽しみにしております。

福田 信三 (大 39 理)

ベトナム旅行中につき欠席いたします。皆様のご活躍を Net で見せていただくのが楽しみです。皆様によろしく御伝え下さい。

鵜木 洋 (大 40 文)

父は体調が良くなって、5月より入院、9月より岡山市の施設に入所しています。本人は登山への情熱は失っておらず、落ち着けば近くの低い山くらいは行きたいものです。どうぞ皆様によろしくお伝え下さい。(次女 聖子)

次女です。本人、昨年より認知症の症状が出て、一人暮らしをやめて、岡山市西大寺の老人ホームに入所しました。まだまだ元気ですが必ず付き添いが必要なのと、よくつまづいたりもするので心配で、今回は欠席します。良くなっていく病気ではないですが、落ち着いているのでまずは近場の山でリハビリをしてか

らと思っています。

水渡 清夫 (大 40 営)

今夏、雨宮・米山・平井の先輩方とモンゴルへ出かけ、ランドクルーザー2台で3,000km、大平原・半砂漠を走ってきました。なかなか面白い旅行でした。

こちら(東京方面)では、まもなく恒例の大関さんのお宅で開かれる「花見の会」があります。楽しみにしています。高遠スキー会ではガチャさん始め諸先輩と楽しくやらせていただきました。感謝しています。

奥山 正紀 (大 40 法)

昨年手術した左眼の具合が悪い為、迷惑をかけるといけませんので欠席します。皆様方によろしくお伝え下さい。

伊丹 徳行 (大 40 法)

幹事さんご苦労さまです。今年は色々あり欠席させて下さい。来年は是非参加します。下記条件の宿泊場所を探しています。①温泉地②雪が多い事③スキー客が少ない事④1時間ぐらいの所に都会がある事⑤料金は年金生活者なので⑥日数は5~7日ぐらい 以上

今年は波瀾万丈の一年になりそうです。1月に前立腺ガンの手術・肺血栓の治療、2月沖縄旅行、3月長崎旅行・舌ガン手術後のPETCT検査、4月東北旅行予定、5月北海道旅行予定、その他4月にインプラントの治療完了があり、予定表の手帳はほとんど埋まった前半です。

竹中 統一 (大 40 経)

本年もスキーシーズンの期間中安比に4・5回、奥志賀に1回と楽しみました。週末の天候が荒れたり雪解けも例年より早く、もう一つ満足感が得られない年

でした。

**井上 徹 (大41 営)**

伊豆温泉旅館の女将の茶飲み相手として毎日ユカイ(湯快)な時を過ごしております。温泉・ゴルフ・釣りの三味です。

細々と時に猛々しく(?)伊豆山中で仙人生活を楽しんでおります。関西方面に身内の者がいなくなり神戸・大阪が遠くなりました。三宮の立花のタコ焼きを恋しく思っています。

**柏 敏明 (大41 経)**

9日から、森本さん・塩崎君・浪川君・それに関学の青木氏・小西氏の6名でランタン・ヒマールにトレッキングに行ってきます。出来たら、ヤラピーク(5,520m)に登れたらと思っています。昨年は心臓の手術で諦めたヒマラヤ、楽しんできます。末筆ながら秋の集会のご盛会をお祈りします。

小生の油断と不注意による凍傷で皆様にご心配をお掛けしました。右足の指を温存療法で処理して、2ヶ月半余り経ち週2回の通院をしながら、毎日風呂場でシャワーを浴びせ乍ら切取った指先に肉の増殖を促す軟膏を塗っています。お蔭様で、中指・人差し指などは骨に肉が被さりつつありますが、全快までにはまだ時間が掛かりそうです。思いの外大層な事になってしまいました。踵歩きの為、長距離は疲れますので今回は欠席いたします。末筆ながらご盛会を祈ります。

**森岡 宏光 (大43 理)**

幹事様いつもご苦労様です。先月8月24日妻と二人で日帰りコース瑞牆山(みずかきやま)(2,230m)に登ってきました。奥秩父の山々の中で珍しく岩峰を連ねた山です。ガイドでは5時間の所7時間もかかり、最後バスに乗り途中

増富の湯も入れず体力の衰えを考えさせられた山行でした。

**國分 廣昭 (大43 経)**

参加したかったのですが、都合で行けません。また、来年参加したいと思います。

**頼富 信輔 (大43 法)**

定年後の第二の職場で転勤しました。毎日高松から徳島へ特急電車で通勤しています。四国の山を毎月一度は登っています。皆様に宜しくお伝え下さい。

毎回ご案内ありがとうございます。今年も残念乍ら欠席させていただきます。定年(65才)まであと3年となりサラリーマン生活最終コーナーを走っています

**佐崎 栄二 (大43 文)**

コツコツ元気にがんばっています。みなさまのご健勝をお祈りしています。

**石原 浩二 (大44 理)**

関係者の方々に感謝しております。

年数回山に登っております。役員の方々にいつも感謝あいております。

**赤田 友則 (大44 理)**

いつも欠席で申し訳ありません。7月末鹿児島高千穂峰に登りました。日の丸がひるがえり感激しました。山容もすばらしいですが歩きづらい山です。10月韓国岳(カラク)を予定しています。仕事で今熊野に來ています。社有林を担当して、最近兵庫県丹波市の山を購入しました。体力「イジ」が課題です。皆様によろしく。

ご無沙汰しています。当日まで新入社員の研修で熊野の社有林等行っています。4/13~16 は中国南京林業大学に採用の件で行く予定もあります。すいません。皆様によろしくお伝えください。

岸田 昌雄 (大 44 文)

だんじり祭りの為忙しい日々を送っています。皆様によろしく！

矢吹 操 (大 45 理)

ジョギングで健康維持しているつもりです。還暦を迎えましたがまだまだ元気。給料は超安いですが、働けるだけ有りがたいと思っています。

元気です。

南里 章二 (大 45 理)

毎年の御世話、本当に御苦労様です。残念ながら学校行事と重なるため参加できません。今年の夏は久しぶりにタンザニアとケニア・マレーシアを旅してきました。

お役目、御苦労様です。山にも出掛けたいのですが、週末は、三つのカルチャーセンターでの講義で身動き出来ません。現在継続中のテーマは以下の通りです。「世界史とアフリカ」【毎日新聞】・「海のシルクロード」【神戸新聞】・「城と教会と騎士の物語」【読売新聞】興味がおありの方がお近くにおられたら、御宣伝下さい。

平井 幹男 (大 50 文)

御無沙汰しています。山岳会の掲示板の山行報告うらやましくもあり、中高年のパワーに感心させられたり！メタポの風を止めるべしのトレーニングジムも生きるために食べるより、食べるため飲むために生きる人生を送ってきた小生には適度の運動が、かえって

食欲増進の毎日です。

故 朝倉 満 (大 50 法) ご遺族 朝倉 まち子 様

皆様には葬儀・偲ぶ会にお集まり頂き、本当にありがとうございました。主人はいい仲間に恵まれ幸せです。そう思うと救われます。このところ体調悪く、息子も都合つきませんので 20 日は欠席させていただきます。このたびもお世話になります。ありがとうございます。

村田 信一 (大 50 経)

ご盛況お祈りします。最近野鳥観察をしながら山を歩いています。突然現れるので道程が進みませんが撮影に忙しい山歩きです。

4月6日「あさくらの会」を行いました。同期が減った分結果が強くなりました。記録を配信し、保存して宝物にしたいと思っています。秋の八甲田山計画しています。

高橋 けい子 (大 50 文)

いつもありがとうございます。ちっちゃな町工場をただひたすらきりもりしております。

いつもお世話になります。昨年末同期である朝倉君が癌に勝てず天国に召されました・・・武田会長始め、たくさんの山仲間に見送られ、まち子夫人は大変感謝しておられました。紙面をお借りしてご報告させていただきます。 合掌

大柳 香代子 (大 51 法)

30年のブランクに頭もカラダもヨロヨロですが、山歩きを再開。中高年者ばかりの山小屋に目をシロクロさせながら楽しんでます。

ぼちぼちと再開の登山。初めての山に感動したり、30年振りの剣岳カニになって、ヨコやらタテやらフ

一つ一言いながら中高年登山の仲間入り。やっぱりいいなあ。

西村 清 (大 51 経)

昨年、身近な先輩の訃報に接して「もう若くない」と実感しました。現役 10 年として、いかばかりの事を成しえるか新たな悩みの種です。

大森 雅宏 (大 53 文)

ご案内いただきましたが今年は都合で欠席します。次の機会には参加したいと思います。転居しました。

654-0143 神戸市須磨区菅の台 7-5-3

前の住まいから 500mほど垂水よりに移動しました。海と淡路島は見えなくなりましたが、オリックス球場の花火はよく見えます。

電話/ファクシミリは前のまま 078-791-9600

鳥井 陽子 (大 54 文)

いつもご案内をいただきありがとうございます。

いつもご連絡いただき、ありがとうございます。

住友 健時 (大 55 法)

仕事上週末は休めず、山岳会行事に参加出来ず申し訳ございません。今年 1 月に手首を骨折して只今リハビリ中です。なかなか思うように回復せず困っています。

川野 幸彦 (大 56 理)

元気にやっています。今年 4 月でついに 50 才となります。この 5 月の連休は、剣岳に上る予定です。総会には仕事で出席できません。皆様によりしくお伝え下さい。また、いつも連絡いただきありがとうございます。

山本 恵昭 (大 56 理)

連絡が遅くなりました。しばらく迷っていたのですが、やはり今回は欠席させていただきます。先日、手首のギプスは取れたものの、関節が固まっっていて、しばらくはリハビリ専念予定です。もし、あと一週間で順調に回復すれば、3 連休はどこかの自然の中へどっぷり入りたいと思っています。申し訳ありませんが、よろしくお願いたします。

4 月より鈴蘭台にある兵庫商業高校へ転勤しました。周辺の自然が豊かで気に入っています。今までの夜型生活から昼型生活へなかなか体がなれていきません。

八木 健 (大 58 経)

毎年欠席で申し訳ありません。6 月頃よりヘルニアと診断され、現在も治療中です。皆様によりしくお伝え下さい。

毎回ご案内ありがとうございます。土日、都合つかず欠席させて戴きます。

松成 健 (大 H8 文)

最近山には行っていません。夏に近郊の山 福智山に沢登に行って以来ご無沙汰です。メタボのため高脂血症薬を服用し、交通事故に遭い鎮痛薬と筋弛緩剤を飲み、腰痛のため毎週カイロプラクティックに通う日々を送っています。糖尿病と痛風の可能性もあると言われ、主治医から煩雑に生活指導を受けています。まだ 34 才なんですけどネ……

橋田 豊彦 (大 H12 経)

指圧・整体の治療所を開院致しました。京都の山の散策後には是非お立ち寄り下さい。

# 一 報 告 一

## 秋 の 集 会

7日(日)は、午後からからりと晴れ渡り、例のごとく酒を飲み、ウツラウツラ、日向ぼっこをしながら受付を始める。與利さんと石原さんは、一ノ越から黒四経由で前泊。荒島岳登山中の柳さん、おトミさん、ポンさんから四時頃「今越前大野、先に懇親会を始めてくれ。」との連絡あり。

六時から懇親会を始める。今まで最小の参加人数だが例年通り盛り上がる。七時半頃、荒島登山の三人が加わり、登山談義で更に盛り上がる。

明るく日は生憎の雨で、食堂で記念撮影をし、解散前に「山の歌」を歌い、来年の再会を約し散会。

(山本 記)

日 時 平成19年(2007年) 10月7日～8日

場 所 木曾駒文化公園内宿泊施設 「駒 王」 長野県木曾郡日義村

参加者

砂川 彰雄 (昭32 経)	柳澤 正 (昭32 経)	雨宮 宏光 (昭33 経)
鈴木 頼正 (昭33 経)	田辺 潤 (昭34 経)	越田 和男 (昭36 理)
廣瀬 健三 (昭36 経)	大関 和夫 (昭37 経)	二谷 和成 (昭38 経)
村上 與利一 (昭39 営)	武田 雄三 (昭39 経)	安井 正 (昭40 経)
石原 浩二 (昭44 理)	井上 知三 (昭48 文)	山本 眞博 (昭48 理)



## 定 時 総 会

日 時 平成20年(2008年)4月21日(土)

場 所 平生記念セミナーハウス

出席者 西川耕平 神戸謙司 (顧問)

國府雄次郎 (旧制高校)

北方龍一 (新制高校)

小原耕治 雨宮宏光 鈴木頼正 芦田匡平 鳥居威男 美田靖夫

越田和男 廣瀬健三 藤安賢一 二谷和成 福田信三 武田雄三

村上与利一 安井 正 柏 敏明 浪川純吉 石原浩二 南里章二

井上知三 平井幹男 高橋けい子 大森雅宏 要 裕晶 山本恵昭

(大学)

谷 勇輝 (学生)

### 議 事

司会 福田信三

1 会長挨拶 武田雄三

2 平成19年度事業報告

1. 慰霊祭 村上与利一

3. 木曾福島集会 井上知三

5. 大学活動報告 谷 勇輝

2. 山嶽寮 大森雅宏

4. 中高活動報告 神戸謙司

3 平成19年度会計報告(別記) 山本恵昭

4 平成20年度事業計画

1. 慰霊祭 村上与利一

3. 木曾福島集会 井上知三

2. 山嶽寮 大森雅宏

議事に続いて懇親会

司会 安井 正

1. 乾杯 國府雄次郎

2. 海外遠征報告 谷 勇輝

3. 部歌斉唱



大学顧問 西川耕平先生のスピーチ

# 平成19年度会計報告

平成20年3月31日

会計担当 山本恵昭

## 慰 霊 祭

日 時 平成20年(2008年)4月22日(日)

参 加 神戸謙司 (中高顧問) 北方龍一 (新制高校)  
雨宮宏光 鈴木頼正 越田和男 廣瀬健三 二谷和成  
村上与利一 井本 洋 塩崎将美 浪川純吉 石原浩二  
南里章二 井上知三 平井幹男 西川けい子 西村 清  
大森雅宏 (大学)  
谷 勇輝 (大学現役)  
猪坂 貞太 中瀬 翔太 若宮 康祐 (中高現役)

お 客 様 茂木源人様 中澤章浩様  
銘板取付 故 朝倉 満 会員



故 茂木光隆さん(旧制18理)のお話を、ご子息 茂木源人様と越田さんから、  
故 朝倉 満さん(昭和50年法)の思い出を、同期入部の中澤章浩様、高校時代からのお付き合い  
の平井さんからご披露いただきました。

## わたしの夏休み

56年ぶりの慰霊アルプス行

松方 恭子 (故伊藤愿氏次女)

この夏休みは、私にとって生涯わすれられないものとなりました。

今年の私の夏休みは、1年半前からベルギーのルーベンというヨーロッパで一番古いカトリックの大学町に滞在中の娘一家が、主人と私の結婚40周年祝いに、「スイスにトレッキングに行かないか」と招待してくれました。日頃、ゴルフ、ジョギング、私たちが住むマンションや、マンションに隣接する駒沢公園、妹たちの家の庭などの園芸ボランティアをして、毎日身体を動かしている75歳の主人は、毎年、富士登山、東京シティマラソン(10km)も走ったりで足には自信があり、大喜び。娘一家も、親子でスポーツとアウトドアが大好き、次女も東京シティマラソンを3時間台で走る。では私は・・・という、大学時代はワンダーフォーゲルにしばらく在籍、歩くことが大好きです。子供たちが成長した後には50歳から始めたゴルフは、いつも乗用カートには乗らずに歩いて周り、買い物も30分ぐらい離れた自由が丘、都立大学まで、天気の時には駒沢公園、ゴルフ練習の帰りには、主人にクラブを預け、砧公園から歩いて帰るなどで、健康を保っています。私のトレッキング用の山靴も15年ぐらい前にオーダーメイドしたものが古くなり、新しいのを購入、登山用ステッキも、現地で娘婿に使いやすく良いのを選んでもらい、いざ、ツェルマットへ。

ベルギーから車で先に着いていた娘一家が、ツェルマット駅で迎えてくれ、彼らがネットで探したというアパートメントホテルに宿泊。そこからは、ツェルマットの街や、ドム、タ

ーシュホルンなど、ミシャベル山群が窓から見え、私がスイスに来たのは8回目でしたが、その素晴らしい景色は、いつ見ても感動でした。

若くして亡くなった父の葬式のときの写真は、スイスの美しいmatterホルンを背に、山の中腹の花畑の中に座った、嬉しそうな父の遺影でした。山登りで日焼けした顔は、昔の映画俳優の佐田啓二にちょっと似ていて、その若々しいままの姿は、母はもちろん私達の大事な写真です。

今回のトレッキングでは、その父が撮った同じ場所を探しに行きました。連日好天に恵まれ、カレンダーに写っているようなスイスの山々の抜けるような青い空、美しい牧草地、3,000m～4,000m級の素晴らしい山のパノラマを眺望しながら、父が56年前に登って撮った背後に写っている方向のmatterホルンの岩肌の形の写真を手にしながら登っていくと、標高約2,000mのところ、その場所ピタリのところを、家族を見つけました。お花畑の中の岩に腰掛け、父の背後のmatterホルンの岩場と同じ形の方向に、焦点を定め、パチッ。

父は役人でしたが、高校(旧制甲南高校)、大学(京都大学)では山岳部の山行の費用に、親から毎月送られてくる下宿代を使ってしまうほどの山好き。運のよいことに、世界第2の高峰 K2 (当時未踏) を目標としたカラコルム遠征計画で、今西錦司さんの要請を受け登山許可の申請や調査のために単身渡印したこともありました。昭和11年のことです。インド側から見たヒマラヤの遠望は、本人に

とっては無上の喜びだったに違いないと確信します。残念なことにこの計画は、その後の戦争のため実現しませんでした。有名な今西錦司氏、西堀栄三郎氏は、父の大学の先輩で、昔、我が家にみえたことも、私の小さい頃の記憶にあります。

加藤泰安さんは、私たちの新大久保の家の近くにお住まいで、きれいで背の高いおば様は、私たち姉弟妹をととても可愛がってくださいました。泰安おじ様は、私が笑うと「君は愿そっくりだから、笑わないで！」と言われました。私が父によく似ていたので、父が居なくなったことを思い出されるのがいやだったのでしょう。



伊藤愿氏 1951年

若き父を魅了したスイスの山々が、昔も今も変わらぬ美しい姿で私達を迎えてくれたことに、感謝。生涯心に残る、最高の夏休みでした。

孫と大好きな「Sound of Music」を唄いながら、家族で楽しく登ったスイスの山々。大学時代からしばらく遠ざかっていた「登山」に回帰した私の夏休み。きっと父は、私が登って来るのをずっと待っていたに違いない、と確信した、56年後の慰霊登山でした。

(2007年9月)



松方恭子さん 2007年

## ー 掲示板書き込みダイジェスト ー

### 山行とつどい 2007.6~2008.3

ホームページ掲示板の書き込みから。一部「山行」「つどい」以外のものも含みます。

#### 雲南省旅行

福田信三

6月9日

雲南省西北、チベットに近い辺りから戻りました。今回の目的は梅里雪山、玉龍雪山等の6000m級の山を見る事、少数民族を知ること。幸い、雨知らずで両方共に達成出来ました。

今まで、スケールに関してはやはりヒマラヤ(ネパール)と思っていましたが、その底辺から見ると、中国側には全く及ばないことを知りました。梅里雪山へはチベット街道を、昆明(2,400m)、麗江(3,600m)、徳欽(4,000m)の部落を経由。部落間はまともに下を見ること出来ない、超危険道。落石に遭わない方が不思議かも知れません。

各部落は数千人以上の人口で、何故人はこんなにまで奥深い地に住むのか？徳欽に着いた夕方は雲に隠れた梅里雪山、翌朝には満月に照らせて現れました。

1991年に17名の命を奪った明永氷河もはっきりと見え、冥福を祈りました。この山は13のピークを持った、チベット人の心の山ということです。やはり、登るべきではなかったのか？現在は登山禁止中です。

越田和男

俺も行きたや雲南へ。何時ぞやの反日騒動以来中国に嫌気がさして行く気にならなかったけど、雲南やチベットは別と割り切って行くべきかも。福田君に先を越されたけれど。

「梅里雪山・十七人の友を探して」(小林尚礼著・山と溪谷社)という本の紹介記事を日本山岳会の「山」と「山岳」に書いたことあり。麓の村はすっかり観光地化したらしいけど、やっぱ

り一度は訪ねてみたいです。

#### クビ・ツァンポ登山隊

越田和男

6月14日

日本山岳会関西支部と同志社大学山岳会の共催になる計画がJAC関西支部HPに掲載されていましたー中略(編集)ー。甲南の谷君もメンバーに出ています。実現するといいですね。

#### 白山に行ってきました

kannroku

7月18日

慣例となっている竹中・井本・山本チームにDonnkichi・Kannrokuが柏・水渡さん等に代わって参加。どういう経過でこの夏の山行が始まったのかは知らないが、竹中・廣瀬(ポンさんではありません)・山本さん等が始めて20年程とのこと。廣瀬さんはすでに100名山達成とか。竹中さんで50を超えたとか。20年として40歳過ぎから毎年この時期に登っている事に、一番忙しい年齢の時期に登り始め良く続いたものだと。4年前だったか雨の槍の肩で竹中・井本・柏・水渡の甲南チームと廣瀬・森女史・山本さん等とDonnkichi・Kannrokuが槍沢をふうふうバタバタながら登り会ったのが懐かしく思われる。

今回白山行きに誘われ、今まで怪我の連続でスキー・山登りを諦めていたが、そろそろ大丈夫かと参加させてもらいました。

7/6 16時大津IC出発、山本・Donnkichi・Kannroku 20時小松空港にて竹中さんと合流。

一路市ノ瀬へ。市ノ瀬にて井本さんの出迎え合流。

7/7 白山御前峰に。6:30 別山出会～11:30 室堂小屋～白山頂上(御前峰)～御池巡り～室堂 14:00。泊。

7/8 竹中・Donnkiti・山本の3名御来光目指し頂上へ。井本・Kannroku は小屋にて居眠り。抜群の御来光だったらしい。行くべきであったか？

8:30 下山 別当出会い 11:30、市ノ瀬永井旅館にて岩魚・山菜・白峰アゲ・堅豆腐のおいしい昼食。14時白峰にて解散。

山本さま、色々とお世話になりました。来年2月荒島岳か白山のスキー楽しみにしております。竹中さんも是非の参加を。井本さんもスキーの練習を。

(文中の「山本様」は大阪ぼっほ会山本氏です 編集)

#### 東京同窓会館お隣同士

南井英弘(関学) 7月19日

昨日、この度移転した関学同窓会館を訪ねました。ビル10階のエレベータを降りると右は甲南大学、左は関学でした。関学山岳部同級生でアンデス遠征にも一緒した長井弘光君の娘さん(甲南大学卒)が甲南の事務所に居られるので挨拶に出向きました。

居合わせた甲南事務所の神田一三さまにも「昨夜は日本山岳会会合で甲南の方と一緒にだったと」ご挨拶いたしました。直ちに「平井吉夫さんをご存知ですか？」と反応有り。次いで越田さんは？飯田さん、大関さん、グリーンさん(新事務所のパソコン教室で奮闘中とのこと)と小生が存じ上げている方々の名が出てきたのには驚きました。

阪神間に在住の方も東京甲南事務所を訪問の際には隣組の関学も是非覗いてください。素晴らしい情報やハプニングが待っているかもしれませんので。

福井グリーン

隔日には「掲示板」で皆様のご活躍の様子を嬉しく拝見しています。

本日の「南井さんの書き込み」で「年寄りの冷や水」がばれてしまいました。先ずは元気に過ごしております。

先月下旬の「米山さんの個展」はご案内状も頂き、ちゃんと手帳にも書き、6月の24日には帰京していたのに、拝見できずに残念に思っています。すっかりボケてしまって失礼致しました。

現役の「谷くん」の挑戦には多大の敬意を表します、慎重にご活躍を！ グリーン

#### モンゴルへ行ってきました

水渡 清夫 7月20日

モンゴル旅行から戻ってきました。

今年4月、恒例となっている大関邸(亭?)での「花見の会」で米山さんから「7月にモンゴルへ行くけど、君どうや？」と声を掛けられ、即その計画に飛び乗り、このほど戻ってきました。

概要を報告いたします。

メンバー : 雨宮宏光、米山悦朗、平井吉夫、水渡清夫(他に現地ガイド2名、ドライバー2名)

期間 : 7月2日～14日

行程 :

・7月3日に到着の雨宮さんとウランバートルで合流。

・翌4日ウランバートルを発って、12日ウランバートルに戻るまで9日間をランドクルーザー2台で連日大平原の悪路(約2,000km超)を走りに走って全員無事、戻ってきました。

(雨の降らないモンゴルでは、雨→沈殿、の恵みの休養日も無く後半かなり疲れしました)

・4日、ムルンまで航空機。ムルンでランドクル

ーザー2台に分乗。

世界遺産登録のフスグル湖を經由し、後はモンゴルのロシア国境に近い北辺の大平原と砂漠地帯を西へ西へと移動。

- ・7日、モンゴル北西端に有るフス湖、町オランゴムを経て南東方面に進路を取り、砂漠地帯に点在する湖や山岳地帯を、悪路に故障しがちなランクルを毎日修理し走行。

(乾燥の国モンゴルですが巨大な湖が結構あります)

走行中、地平線に連なる山の切れ目の遙かあなたに、四千メートル峰を擁する雪をまとったアルタイ山脈が遠望。この頃より、朝夕は涼しいが、日中は何処にも木陰の無い酷暑に悩まされはじめる。激しい上下動、猛烈な砂埃、窓開けも儘ならず、クーラーの効かない車内で、耐久レースのようになってきた。

- ・途中、ナーダム(モンゴルのお祭り)に幾度か出会う。観光化していない地方のナーダムは素朴で、馬で草原を疾走する少年達の誇りに満ちた姿は素晴らしい。
- ・9日、11日にはガイドとガイドの奥さん、それぞれの実家(草原の中のゲル)を訪問。

馬乳酒、アルヒ(馬乳酒の蒸留酒 結構キツイ)などで歓待を受け、ゲルに泊めて頂いたりの親切を受けた。

優しい笑顔のそれぞれの母親や兄弟姉妹、昔の自分を見ているような日焼けした、垢まみれ、裸ん坊の子供たちと交流出来たのは良かった。

(今でも彼らの親しみを持って接してくれた姿が思い出されます。)

このあたりまでは行き交う車は少なく、1日に5~6台と言った感じ。(カウントしていた訳ではないが)

- ・12日、首都ウランバートルに近づくにつれ車の量が増えてくる。

夕方ウランバートルに到着。

- ・13日、雨宮さんは早朝、帰国の途に。1日余裕のある他3名は大ナーダムのモンゴル相撲などをノンビリ見学。翌早朝帰国の途についた。

その他

- ・米山さんの写真家魂

出発直前に東京新宿で開かれた米山さんの写真個展を見せて頂きその素晴らしさに感動いたしました。今回、米山さんの撮影の現場を見るが出来、さらにビックリしました。

我々の寝ている早朝はもとより、悪路、酷暑のなかを走行中の車を何度も飛び出し、重いカメラを持って遠くまで被写体に駆け寄ってゆく姿は凄いいものでした。

納得いく写真を撮る為に危ない所まで接近する根性と言うかなんと言うか・・・素晴らしいあの作品にはこんな下地があったのかと感心しました。

- ・宿泊地について。

大まかな日程は組まれていましたが、車の調子を見ながら適宜宿泊地を決めていきました。

(例えば、フスブル湖の素晴らしい景色に感動した雨宮さん・・・「今日はここで泊まりや!」で気分良く宿泊。と言う具合)

車の調子やメンバーの疲れ具合を見ながらの雨宮さんの自在な判断で、安全で、リラックスした楽しい旅になったと思います。

- ・若手組

このメンバーでは平井さんも私と一緒に若手組でした。平井さんからは旧制大先輩との交流の話やエピソードを沢山聞かせてもらいました。諸先輩のあだ名の由来なども・・・これは傑作で、一層親しみが増し、甲南山岳会がさらに好きになりました。良かったです。

短いチベット旅行から

越田和男

7月28日

去年7月開通した青蔵鉄道にはどうしても乗りたいくて、今月になって悪化する腰痛に悩まされながらも西寧からラサへの26時間の車窓を楽しんで来ました。ラサはすっかり変わってしまったと、昔を知る人は嘆きますが、昔を知らない小生らは、それなりに楽しめました。旅で得たいい話とこわい話をひとつずつ報告します。

いい話：列車で海拔5,000mを越えるこのハードな旅に89歳の男性の一人参加あり。小生より20歳年上。俺もあと20年は旅を楽しめるかも、と思いきや、聞けばなんと旧陸軍中野学校出身者。身も心も鍛え方の違う方でした。まねは出来ません。でも勇気づけられますね。

怖い話：去年開通以来一年間で、この列車で高山病となり亡くなられた日本人既に5名！！旅行社はこの話をしたがらないらしい。車中ではなかったが、今回北京までのフライトで偶々顔を会わせた知り合いの近藤寿行氏がラサ郊外で「高山病の疑いによる心肺停止」で急逝された。(近藤氏は72歳、元N響ファゴット奏者、JAC会員、パミール中央アジア研究会会員など)

福田信三

青蔵鉄道、是非載りたいと思っていました。最高点ではその感覚がありましたか？車内に酸素ボンベ常備とは言え、たくさんの死亡者。それこそ命がけの列車ですね。愛称「帰天号」になりそう。それでも一度は乗ってみたいです。

横山ケルン

塩崎将美

8月9日

同期横山の為に積んだケルンを訪ねてきました。高校時代の友人が大日へ行くと言うので同行、立山から奥大日岳、大日岳、称名滝のコースを歩いてきました。

早朝神戸を車で出発、ケーブルとバスを乗り継ぎ室堂へ、小雨の中雷鳥沢ヒュッテへ。24時間入れる温泉に浸かりました。石鹸が置いてあるのにはびっくり。排水はどう処理しているのでしょうか。

翌朝は快晴、室堂乗越へ。少し崩れてましたがケルンは健在。横山が好きだったタバコを供え剣を眺め亡き友を偲びました。

花の百名山と言われている奥大日から大日へ。

奥大日からは展望良く目の前に勿論剣西面、薬師、遠く槍から穂高、笠、剣の後ろには白馬まで眺める事が出来ました。

大日小屋はランプの宿を売り物にしているとか。此処からの剣はなかなか素晴らしいものでした。

翌朝は大日平から称名へひたすら下り。登り少なく下りの多い中高年にお勧めのコースと書いていましたが下りは結構きつかったです。楽に行くなら立山で2泊温泉に入り奥大日往復がお奨め。ケルンを訪ねてみてください。

槍ヶ岳北鎌尾根

川野幸彦

8月12日

皆さん！お元気ですか？夏休みはいかがお過ごしですか？先程、ひとり槍ヶ岳北鎌尾根から戻りました。以下報告です。

・8/10(金) 晴れ 中房温泉6:05⇒大天井ヒュッテ14:10

真っ暗な4:00。松本の自宅を出発。嫁ハンに文句を言われながら松本駅まで送ってもらった。4:32発の“ムーンライト信州”に乗り込む。穂高で下車。ここから中房温泉までは乗り合いバス。所要1時間1,610円。中房からは燕山荘までは急登。それにしても物凄い人だ。久しぶりの“コンニチハ地獄”。燕山荘からは急に静かになりのだかな山歩き。天気も良く快適。大天井ヒュッテ泊。明日、北鎌へは4~5パーティ向かうようだ。夕食のトンカツは美味しかった

た。

8/11 (土) 晴れ→ガス 大天井ヒュッテ 3:40⇒  
北鎌沢出合 7:00⇒槍ヶ岳 19:05⇒槍ヶ岳山荘  
19:30

真っ暗な中、ヘッドランを点け出発。20分程で貧乏沢の下降点。ここからひたすら下降。上部はガラ場で下部はゴーロ。結構急な下りで何度かころんだ。暗い中での下降は辛いが踏み跡はしっかりしていた。途中で夜明け。ルートは谷芯を忠実に辿るが、途中幾つか出てくる小滝は左から巻いた。天上沢からはゴーロを20分程で北鎌沢出合。北鎌沢を15分位で二俣。右俣に入る。事前の記録によると「右俣には水が流れていない。」との事だったが、この日はコルの直下まで湧き水が流れていた。この北鎌沢が曲者で蒸し暑さとルートファインディングに悩まされた。

8/12 (日) 快晴 槍ヶ岳山荘 5:40⇒上高地 13:30

しんどい！でも歩かないと着かない。フラフラで上高地。足は棒。参った。多分2日ほど寝込むであろう。もう二度と北鎌へは行かない！疲れた！

#### 飯田 進

川野君、お元気ですね。小生今から多分17,8年前槍ヶ岳へ登りました。中房温泉から憧れの表銀座コースを。真夏のことで、あの登りのきつかったこと。やっと稜線に出たら、のぼりが立っていました。生ビール、と書かれていました。ドクドクと出た汗で、喉はからから、三日ほど餌をやらなくておいた釣り堀のマスが、餌をほうりこまれたようなものです。

小さな紙コップ(そう見えた)一杯1,000円でした。3,000円ほどつぎ込んで満足。

結果、燕岳はカット。西岳小屋へやっとなりつきました。次の日、槍ヶ岳に登った後、槍

沢の途中で、ウイスキーの雪渓割りをきこめました。本当はもっと下の、一股あたりでやろうと思っていたのですが、同行の酒好きが、我慢ができません、それにここから下には雪がない、と言い張るので、つい誘惑に負け、同調した次第。おかげで上高地までしんどかったこと。あんたは真面目、偉い。

#### 追加 : 川野幸彦 8月13日

お早うございます。ひどい全身の筋肉痛です。北鎌を甘くみていました。とにかく長い！ルートもただの踏み跡を辿るのではなく、しがみ付いたりズルズル滑ったりと無駄な力を使います。これによってペースが乱れ疲労が増します。特に腕力の消耗が激しかったです。最後の槍の登りでは両腕共につけてしまいました。今回、トレーニングは土日のランニング(10km程度)だけでしたが腕も鍛えておくべきでした。ビリーズブートキャンプ！が有効でしょう。また岩の表面が粗く指先も傷めました。岩を登っている時は夢中なので気づきませんが。

今回ザイルは持参しなかったのですが、ルートさえ読めれば要らないと思います。ただ精神衛生上良くないです。まあ重さを考えるとカットすべきでしょう。水は稜線直下まで補給し続け3L持ちました。このうち1Lはスポーツドリンク。これは正解でした。足が引きつらなかつたのはこのせいかも知れません(電解質補給の結果?)。

この北鎌は大学3年の冬に今井・山本少年達が登っています。要さん達も6月。松下さんは単独で5月。彼らが通ったルートを辿るのは何とも言えない気分でした。皆さんが使ったのと同じ岩やブッシュに触れたのかも知れませんね。

#### 青森山旅

山本恵昭

8月17日

今日、青森から帰って来ました。7日に娘二人と神戸を出てから、なかなか充実の10日間でした。

8日フェリーで秋田に着くと雨。白神山地は注意報が出る大雨、林道を車で走って傘をさして遊歩道を散策する程度。

後半やっと天気が回復し、11日下北半島の縫道石山626m、登山口から1時間半の急登で森の中の特異な岩峰の山頂へ。曇り空だが遠く津軽海峡の向こうに北海道が見える。岩場から吹き上げる風いろんな蝶が集まっている。山頂の岩にはオオウラヒダイワタケという天然記念物の地衣類が付いている。国内の他の場所にはおらず、近い種類は北アメリカにいる不思議な生き物。誰もいない山頂で担ぎ上げたトランペットを娘が演奏。時間を忘れてのんびりくつろぎました。下りは1時間ほど。

12日酸ヶ湯温泉から仙人岱経由、八甲田大岳山頂1,584mへ2時間半ほど。仙人岱は湿原にコンコンと湧き水が出ていて絶好の休憩ポイント。快晴の山頂は絶景。西に岩木山、白神山地。特に南の南八甲田のたおやかな緑の峰々が美しい。井戸岳を越えて毛無岱の湿原の木道を歩いて、泥だらけになりながら4時間ほどかけてやっと酸ヶ湯温泉着。緑豊かな良い山でした。

その後3日間、ホテルに泊まって、地球温暖化についての学習会、六ヶ所村石油備蓄基地と核燃料サイクル施設の見学とエネルギー教育についてのディスカッションをこなし、帰路に。

天気と移動の合間には、五所川原ねぶた祭り、三内丸山遺跡、棟方志功記念館、仏が浦、大間崎、恐山、奥入瀬溪谷、十和田湖、各地の温泉など、観光も楽しんできました。

大学生と高校生の娘二人とスーパー惣菜・道の駅車中泊の旅、どうなることかと思いつつもなかなか賑やかで楽しかったです。娘たちもすっかり東北が気に入ってまた行きたいと・・・。いつま

で一緒に山に行けることやら。

## 青森温泉

山本恵昭

8月18日

青森は、道を走れば、そこらじゅうに温泉の看板。温泉天国でした

黄金崎不老不死温泉。白神だけに登って夕方に行く予定が、雨で登山中止にしたため、朝から入浴。日本海に面した男女別露天風呂、鉄を含む茶色のお湯で塩辛い。タオルが染まってしまいました。

鶴の名湯温湯温泉。弘前から八甲田へ行く途中、夜11時までやっているのを発見。銭湯風温泉で安い。¥200。

酸ヶ湯温泉。福田さんにお勧めいただいた湯に入ってきました。千人風呂というヒバ造りの大浴場はなかなか趣がありました。混浴でしたが、娘の都合もあり女性専用時間のすぐ後に入ったので、男ばかりで残念。硫黄の湯でタオルもシャツも硫黄臭くなりました。売店でうろうろしていると、東京から毎年2ヶ月ほど来ている常連のお婆さんと仲良くなり、お茶を入れていただき、お勧めのなんばん味噌をきゅうりとおにぎりにつけて賞味。なかなか美味しかったです。沢山の方が長期の湯治に来られているそうです。

恐山の温泉。恐山の境内に3つの温泉。日替わりで男湯と女湯が変わるそう。私は冷抜の湯へ、娘たちは古滝の湯へ。木造の小屋の中に熱い硫黄の湯と冷たい水。素朴な雰囲気、霊験あらたかな気持ちに。パンフレットより「ひとを想うひとの心、霊場恐山。」

八甲田温泉、ラムネの湯とよばれ炭酸の泡がつくはずだったのですが、ただ思っていたほど泡も無くちょっと期待はずれ。別料金のいる家族風呂と女湯には泡が良く出る湯船が用意されているそうです。

八甲田周辺には、他にも良い温泉がいっぱいあるのですが、今回は入れず。また、今度。

## 留守にします

塩崎将美 9月23日

明日、N君と(彼は名前を書いてくれるなどの事)関空から出発します。

26日、カトマンズーラサの飛行機が取れなかった為陸路7日かけて中尼道路をラサへ走ります。途中チョモルンマBCへ寄る予定です。トレッキングと違いジープで急激に高度を上げますから高山病が心配です。

10月5日に飛行機でカトマンズに戻り谷君と祝杯をあげる予定です。

彼の初登頂の話聞くのが楽しみです。

9日にはカンさん柏さんと合流しランタン谷へトレッキングに行きます。

帰国は10月26日の予定。 塩崎

## カトマンドゥより

谷 勇輝 10月6日

ナマステ、山岳会の皆さん。お久しぶりです。

10月1日無事にカトマンドゥに戻り、その後隊荷の整理等々がありご挨拶遅くなりました。

まず第一にクビ・カンリに登頂することができてとても嬉しいです!!

これもひとえに山岳会の皆様方の温かいご支援があったからこそ成し得た賜物と思います。

「本当に有難うございました。」

また、ベースキャンプで活動報告(ブログ)を見ていましたら、沢山コメントを書き込んでいただいたのでとても励まされました。

ベースを離れた後、カイラスへコルラしに行きました。しかし生憎の天気以北面を望むことはできませんでした。

今後の予定ですが、他のメンバーは予定通り10

日帰国しますが、私は明日7日から19日までエベレスト街道にトレッキングに行こうと思います。

今、こちらではトレッキングに最適なシーズンですし、せっかくカトマンドゥまで来たので大きなヒマラヤを一目見たいと思ったからです。

## 期間と行程概要

10月7日～19日(13日間)

カトマンドゥールクラーナムチェータンポチェーディンボチェ⇄チュクン→カラ・パターナル/エベレストBC→チョラ・ラ→ゴーキョ→ゴーキョ・ピーク→ドーレ→ナムチェ→ルクラ→カトマンドゥ

帰国について、21日からTGのキャンセル待ちをしているのですが、この時期大混雑。いつ席が空くのかわかりません。遅くとも1週間程と思いますが・・・

では行ってきます。

## リハビリ登山

山本恵昭 10月8日

私もカトマンズに飛んで行きたい所ですが、そういうわけにもいかない。申し訳ありませんが秋の集会を失礼して、三の峰・別山へ骨折後初めてのリハビリ登山に行ってきました。

5日、職場から帰宅してとりあえず荷物を車に詰込み12時過ぎに出発、仮眠しながら上小池駐車場へ。

6日7:00発、ブナ林を登って六本檜へ1時間、急な稜線を2時間で10:00三の峰避難小屋へ。泊まり荷物を置いて、別山山頂12:00。山頂付近の草原はそろそろ紅葉の始まり。天気も良く1時間ほどのんびり。御岳から乗鞍、穂高、薬師、剣まで見渡せる。そういえば信州のいろんな山頂からも白山が見えたような。14:00三の峰避難小屋へ戻って、またまたのんびり。貸切かと思ったら、次々と登ってきて、結局8人。

それにしても山深いところである。経ヶ岳・赤兎から続く尾根と、野伏岳から続く尾根が合わさり、この三の峰を経て白山へ続いていく。どこを見ても山の連なり。稜線にある小屋からの夕日が美しかった。

7日、期待していた朝日はガスで残念。同宿の方々は早朝より別山方面へ、私はのんびり7:00から下山。すっと下れば2時間ほどで車まで降りれそうだが、せっかくなので、道から外れてブナ林徘徊。惚れ惚れするような森である。刈込池散策もして12:00上小池駐車場へ。鳩ヶ湯¥500で汗を流し、おろしそば大盛¥750。大野市のいつものスーパーで焼き鯖すしを買おうと思ったら、売り切れていてショック。通勤割引、湖西道路、早朝夜間割引で帰って来ました。

手首はだいたい良いのですが、運動不足で全身筋肉痛です。

#### 飯田 進

山本君 もう骨のほうは完治ですか。

貴兄の投稿に、鳩ヶ湯 500円と書いてますが。写真あったら掲載してもらえませんか。というのは、現役のころ、11月末に、一の瀬から白山めざしたのですが、前夜から雨。それが雪に変わり、雪崩の恐れがでてきたので、方針変更。杉峠（先年関学のワンゲルが難渋したすぐそば）をこえて鳩ヶ湯目指しました。着いたら湯はすでに涸れていて、山小屋のような宿で、一晩ノミに悩まされた記憶があります。その湯が復活したのかしら。写真あれば見たいものです。

鳩ヶ湯 山本恵昭

飯田様

有難うございます。骨はもうつながりました。ただ手首と指の関節がまだ変な感じで、角度によって痛みが走ります。ザイルを使うようなところはまだ行けそうに有りません。

鳩ヶ湯の写真ですが、残念ながら撮っていません。確かに山小屋のような趣のある古い宿でした。

避難小屋で一緒だった福井のおばちゃんたちの話では、先代のおじいさんはかなり偏屈な人だったそうですが、今は息子さんが中心になってやっておられて、感じの良い宿になったそうです。温泉（鉱泉）は実際には温度が低いので加熱しているそうです。

4~5人でいっぱいになる感じの小さなお風呂でしたが、私が入ったときは貸切でした。

最近、市ノ瀬から杉峠への道が整備されたそうですが、このコース経由で結構遅くに避難小屋にたどりついたおじいさんの話しでは、笹藪も多く思いのほか時間がかかったそうです。六本檜からの道はよく整備されていました。

紅葉の時期には、刈込池周辺はとても美しいそうです。再訪されてはいかがでしょう。

#### 懐かしの杉峠と鳩ヶ湯 越田和男

この話題偶然にも先日雨さん達との談笑中話題にしたところです。結構深いラッセルだったのと、ノミの痒さが思い出されます。昭和35年11月、藤安、飯田、長谷川の諸兄が一緒の愉快的な山行でした。

あの時、温泉が枯れていたのではなく、夏だけだといわれてがっかりしたという記憶があります。Yahooで検索したら出てきました。写真もあってどうやら当時のままのようです。ご覧あれ。

杉峠 (h・1,350m)

雨宮宏光

10月10日

越田、飯田たちが、懐かしむ、杉峠は、石川県の市ノ瀬から福井県の鳩ヶ湯に至る“モノズキ”しかいかぬ峠であります。

2001年6月、雨宮、鳥居、武田、二谷の4人で、

三の峰に登ったとき、かねて聞いていた30年以上も前に越田、飯田たちが、越えた峠に興味わき、三の峰から下山中、避難小屋〔立派です〕から、西に、西に、鳩が湯新道をたどれば、杉峠に達すると一瞬考えましたが、新道とは、名ばかりの踏み跡不明瞭な、ウツシイ道で、同行の3人に話しする気うせ素直に小六池に下りました。

時はアルピニズムとやらが、まっさかり、若い越田、飯田くん達の、ロマンを感じず、杉峠！！

その名前はちょうど2日前、小生山荘で話題となったばかりです。最後に蚤のおまけつきと、ご苦労さまでした。

国土5万分の1(越前勝山) 杉峠～鳩が湯は道なしになってますが、あります。

### トレッキング無事終了

谷 勇輝 10月19日

谷です。ナムチェでのトレッキングを無事終え、本日早朝カトマンズに戻ってきました。案の定、キャンセル待ちのチケットは取れておらず、1週間？程カトマンズに滞在することになりそうです。

トレッキングでは、名だたる高峰に迎え入れられ、毎日が充実した日々でした。けれど、上部にあがるほど水・食べ物物の値段が上がり、粗食な日々でしたが・・・。

今まさにネパールではダサイン(ネパール最大のお祭り)の真っ盛り。ネパールライフを満喫してきます。

### KACの先輩

廣瀬健三 10月22日

先だつての木曾駒集いの帰り、柳沢さんに、中井久夫先生の事を訊きました。リュウさん、答えて曰く「頭の良さは、ずば抜けとった。ナンセ理解出来ないとか、覚えられないと言う事じたい、理解出来ないのやから。」

わが国の整形外科分野の泰斗であった津山直一先輩も凄い方です。確か一時期KAC名簿にお名前が載ってたはず。(越シン、ちゃいますか、茂木光隆さんと同期)津山先生は昨年、惜しまれて他界されました。小平の長男が文化大革命の際、屋上から突き落とされ、大怪我を負った。此の時、この息子の整形手術とリハビリに腕を振るわれた。

小川アヒル先輩に依ると、結構アルプスの合宿に参加されてたらしいです。

又の機会に先生の著書他を書きたいと思います。

### ノーチラス号の冒険・7

越田和男 10月24日

岳友平井の訳業順調に発行されてます。前号からちょっと間が空きましたが、このたび下記発行されました。お楽しみ下さい。

ヴォルフガング・ホーバイン著 平井吉夫訳  
ノーチラス号の冒険・7 「石と化す疫病」  
創元社 定価 952円

### 本日・無事帰国致しました

現役 谷 勇輝 10月31日

本日、早朝無事に、バンコクを経由しカトマンドゥより帰国いたしましたことをご報告いたします。

この時期のキャンセル待ちのチケットは思いのほか入手困難でした。結局、空港関係者へ\$150一支払い何とかチケットを入手。手痛い出費でしたが・・・

カトマンドゥでは塩崎さんをはじめ、森本さん、柏さん、浪川さん関学OBの方々には大変ご馳走になりました。

またこの度は、「甲南大山岳部」の名前が前面に出るような登山隊ではなかったものの、旧制、新制、新高の諸先輩から、たくさんのご寄付をさせていただいた事、感謝の気持ちでいっぱいです。

重ね重ねお礼申し上げます。

追記

カトマンドゥ滞在中に西濱さんにも色々とお世話していただきました。仕事、その他多忙の中、有難う御座いました。来月？から半年間、日本へ一時帰国されるという事で、どこか一緒に山に行けたらと思っております。 谷 勇輝

## クビ・カンリ報告会

大森雅宏

11月6日

日曜日、同志社・日本山岳会関西支部のクビ・カンリ報告会に行ってきました。

初ヒマラヤの学生たちを全員登頂させた、隊長・登攀隊長のベクトルを纏める技量に感じ入りました。学生諸君はヒマラヤの頂だけではなく人と人の繋がり、いい仲間を得たものと思います。ところで、パーティの同じテーブルの方のお話。

昭和26年6月、鹿島の大冷沢で同志社の山岳部が遭難されたとのこと、その時中村さんというメンバーのご遺族に甲南の方が居られたような記憶がある、とのこと。旧制23回に同姓の方がおいでですが、詳しいことをご存知の方、いらっしゃいますか。

中村忠雄先輩のこと

越田和男

小生の記憶では中村チュウさんの弟さんが鹿島で亡くなられたとのことでした。中村さんは最近殆ど甲南の会に出てこられませんが、甲南の昭和32年の剣での遭難事故の直後には山岳会の集会に度々顔を出されており、捜索活動での二重遭難の可能性につき強く発言されていたとのこと。弟さんの遭難に関連してのことだと思います。

その辺のことは小生よりはガチャさん、或いはもう少し上の方ゴスケさんあたりの方が正確にご存知かと思いますが、大冷沢の遭難慰霊碑の前で涙を流されていたという話も、どなたか

からお聞きした覚えがあります。同志社と甲南を結びつける歴史のひとつまでもあり、是非どなたか補足をお願いします。

チュウさんの弟さん

伊藤五介

越田君ご指名により書き込みします。

遭難されたのは昭和26年ですか。小生在学中のような気がしてましたが記憶はあてになりませんね。(我々は学制改革で昭和24年旧制一年で放り出されました)

我が家にあった兄新一のピッケルをチュウさんにお貸ししていました。小生は大学受験もありピッケル使うような山へ行かれないので、と言った事だったと思います。そのピッケルを弟さんが持って行かれて遭難されたと聞いております。

中村さん

大森

パーティで同席の同志社OB氏は 乾 好氏。

事故のことは同志社のホームページに記述がありました。「昭和26年6月、大冷沢の「トメ岩」(雪崩は、この岩でトメるという意味)の常識を超えた雪崩の、ものすごい「デブリ」から・・・」とあります。

伊藤さん・越田さん情報をありがとうございます。

## チベット・ヤラピーク

N川

11月6日

仙人さまご無沙汰しております。私最近チベットからネパールのランタン谷方面に旅をしてまいりました。ただ最近記憶力が衰えまして、横文字の地名や写真がなかなか結びにくくおまけに写真を撮り過ぎ整理に苦労しております。但しご一緒した方々がまもなく、詳しく報告をされると思います。それまで暫くお待ちください。

## 楽しかったランタン

kannroku

11月9日

楽しかったランタントレック。

緑豊かなランタン谷は確かにすばらしかった。最終ロッジ地キャンジンゴンパのベッドから見たランタン・リルンに圧倒される。雪煙をあげての雪崩の音、近づきがたい。

2日のテント生活で5,520mのヤラピークに。高山病を乗り切ったと思ったら思いもよらぬ落とし穴に。下山後足の凍傷に気づく。柏・森本の両人が。

柏君のヤラピークに登った嬉しい顔を見ているとホットした。現役の夢がかなった本当に嬉しい顔だった。

気心のわかった友の心あたたまるつながりを、垣間見たトレッキングでした。小西リーダーと共にした青木さん・柏君の面倒を最後まで見た塩・Donnkichi 両君、皆様に感謝。

## カニキノコ

山本恵昭

11月13日

今日は冬型、天気は2日ずれていたら、昨年のように大変でした。

土曜早朝、2:30に畑が平に到着すると、すでに武田さんのお車と現役のテントが。テントには明かりが着いており、その後も現役は徹夜でなにやら語り合っていた様子、怪しい話？若いわいいですね。外は、昨年とうって変わって、満点に星空。オリオン座の四角の中にあんなに沢山の星があったっけ？

7時頃から現役3人と森の中に入り、ナメコ、ブナシメジをそこそこ確保。現役とは森の奥で分かれ、森を徘徊して自力で駐車場へ戻るように指示し、OBさんのお迎えに。

10時到着の塩崎さん、安井さん、森本さん、浪川さんと合流、森の藪こぎキノコ探し経路、山頂をへて、駐車場へ13:00。快晴のもと、絶好の登

山日和でしたが、キノコはあまり採れませんでした。例年だとムキタケが沢山あるのですが、今年はほんの少しだけ。先々週に続き、キノコ前線に異常が有るようです。ともあれ、ネパール帰国チームはさすがに高所トレーニングが効いているせいか、皆さんお元気でパワー全開した。

七釜温泉で汗を流し、買出しをしてカニキノコモードに。キノコ洗いは現役、コンロ準備は武田さん、焼きカニは浪川さん、今年の嵐と違ってすべて順調快適に。

スーパーで衝動買いをした香住鶴原酒「ひやおろし」が最高、カニもキノコもいつも通り美味しい。ネパール、チベットの話に花が咲く頃、大森さん到着。再度焼きカニとお酒で再スタート。三々五々眠りに・・・。

日曜日、朝から雨でしたが、競市へ。買付けの塩崎さん、割振りの大森さんと、またまた各人の個性を発揮して、ご活躍。各自に分配をして解散。楽しかったです。

私はたまたま通りかかった神鍋で但馬祭り？をやっていて、但馬牛焼肉やトチ餅などをいただき、帰路へ。

## 森本 寛之

10日、11日のカニキノコ会に参加させてもらいました。(中略—編集)

今年で現役最後ですが、来年以降も出来る限り参加したいな、と思っております。運転してください武田会長、キノコ取りを指南してください山本先生その他お世話になったみなさん、どうもありがとうございました。

## 現役 谷 勇輝

先週末のかに・キノコ鍋に参加させていただきました。今年は一昨年、昨年と打って違って、天気にも恵まれ、晴れ空の下、キノコ狩り、その後雨具ナシでかに・キノコ鍋を食す事ができました。(中略—編集)

どうも有難う御座いました。

## 八ヶ岳硫黄岳

川野幸彦 11月23日

快晴の下、八ヶ岳硫黄岳に登ってきました。以下、報告です。

・11/23(金) 快晴 美濃戸⇄赤岳鉱泉⇄硫黄岳  
深夜2:30に松本の自宅を出た。美濃戸口の辺りで別荘区画に迷い込み右往左往。カーナビと地図を頼りに美濃戸に4:10着。予想に反して駐車車両は数台。連休初日には少ない。少し休んで、真っ暗な中ヘッドランを点け出発。寒い! 歩くと暖かくなると思い薄着だったのが間違い。重ね着する。林道を辿る。1時間程で夜明け。間もなく林道も終わり登山道となった。この辺りから数日前に降った雪が積もっていた。石ころが無い分、夏よりも歩き易い。沢沿いに付けられた道を行くと1時間で赤岳鉱泉に到着した。

美濃戸5:00⇒赤岳鉱泉7:30⇒硫黄岳頂上  
10:10⇒赤岳鉱泉11:15⇒美濃戸12:40

## ご報告

江田和則 12月15日

体育会本部副委員長・江田です。

12月15日のリーダーズキャンプにて甲南大学体育会山岳部が体育会賞を受賞しました。

谷さんの活動が高く評価された為の受賞であるので、僕個人が山岳部所属という変な意味は一切含まれていません。

## シブレ山ハイク

山本恵昭 12月17日

今日、ぽっかりと日程が空いたので、妻を誘って西区木津のシブレ山へハイキングに行ってきた。

した。車から約1時間で山頂。展望も何も無い藪山でしたが、太陽と緑の道に指定されているだけあって、道はよく整備されていました。

ラーメンとコーヒーでのんびりしていると、マウンテンバイクチームがやってきてしばし談笑。最近の自転車は、前後輪サスペンション付、ディスクブレーキなんですね。見ていると欲しくなってきました。

息子が、スキー同好会に所属し、冬休みは戸狩スキー場でアルバイトをしながらスキー合宿に行くとのこと。スキー板の調整を手伝いながら、いつも時間がすれ違う息子と久しぶりに親子の会話。自分で稼ぎながら行くのは良いのですが、うらやましい。代わって、私が行きたーい!

皆様は、冬の予定はもうお決まりでしょうか。

## 谷君冬山山行

武田 雄三 12月27日

去る22日より前穂北尾根(慶応尾根より)／前穂／吊尾根／奥穂／白出し下降のルートにチャレンジしておりましたが、本日AM11:50計画完遂し無事下山の旨連絡有りました。

## 陣馬山

早川 榮二 1月5日

昨年は、元旦に初日の出を見にいったのですが、あいにく天気が悪く何も見えませんでした。今年は、3日の早朝4時半に八王子の兄の所に集まって、また昨年同様、和田峠より5時半からヘッドランプをつけて登ったのですが、今年は、雲ひとつなく、富士山もくっきり見えて、ご来光に赤く染まる富士山、遠くには中央アルプス、横浜のランドマークタワー、東京湾まで眺められました。

朝倉君の黙祷と家族や友人達・先輩方・後輩達のご健康とご多幸をお祈りしました。

今年は、いい年になりますように。合掌

## 六甲越え有馬下りの道について

平井吉夫

1月14日

1月13日(日)に越田、広瀬といっしょに六甲山から有馬温泉に下りました。車も通れそうなほど整備された魚屋道です。先年そこを1人で歩いたとき、道の半ばで射場山を右に巻く道と左に巻く道の分岐があり、私は左を下りました。今回は右を歩いてやろうと思っていたところ、やはり途中で分岐があり、左は有馬温泉駅、右は瑞宝寺公園とありました。私はそれを先年の分岐と勘違いして、同行の二人に「こっちだ」と言って右に入ったら、整備された有馬下りの道とちがって、運動靴ではやばそうな山道が各所にあり、オヤオヤと思いました。それなりに

その瑞宝寺谷沿いの道を歩いていたとき、越田が「旧制甲南山岳部の部報第2巻に田口一郎・二郎さんが瑞宝寺谷探索のことを書いていた」と言いました。また、その道を歩いているうちに、私は高校時代に有馬下りで、えらく厄介なルートを歩いて難儀したことを思い出し、これがそうだったのかな、とも思いました。地元識者の皆様のご教示をお待ちします。

筆屋道 開設経緯

雨宮宏光

平井吉夫君の質問に答えるべく、文献【神戸スポーツ草創史。スポーツ人風土記。道と書院・棚田真輔著】と格闘しましたが、結論は不明です。

文献では、1875年～1910年代の、神戸居留外国人、グルーム、ガウランド、アトキンソン、ウエストーン、ドント、ワレー他の、六甲山登山道開発の歴史の詳細ありますが、その開発は、六甲山南面(神戸市内から登山するため)が多く、有馬温泉からの開発はありません。太閤秀吉が、駕籠に担がれて、湯治にやってきた道は、どのあたりでしょうか。

ご存知ウエストーンは1888年～1895年、神戸に教会の見習父師として住んでおり、背山のMt, ロッキーに、よく登ってます。

ちなみに、再度山への道は、ワレーが自費で、日当、一円五拾銭の人夫を動員して、開発してます。

他、今も残る“道の名称”には、やたらとカタカナ(英語→カタカナ)が多く、サースロード、ノースロード、シュラインロード、ゴールディン・ポイント、アゴニー坂、ドントロック、トゥエンティクロス他、ヒマある人【昭文社・エリヤマップ・六甲・摩耶・有馬・1997年版】を見てください。

これらの道名称はすべて、居留外国人が、つけたのです。日本人が開発した、徳川道、魚屋道。そして”筆屋道“は筆の穂先になる動物を追った、先人たちの、踏み跡が、現在の道となったと推測します。間違ってたなら、すみません。これ以上の調べは、どなたかにお願いします

筆屋道 開設経緯

塩崎将美

私も去年秋最高峰からの下りでこんなとこに道があると迷い込み瑞宝寺で思わぬ紅葉を楽しみました。

有馬には有馬筆というのが有るようです。かつてはかなりの生産量で有名だったようで、これにちなんで筆屋道と名づけられたのでは?この他炭屋道と言うのが有るようです。

六甲越え有馬下りの道について

越田和男

予定外に入り込んだ瑞宝寺谷だったけど、小雪まじりの風情が楽しめた。この谷の名前だけは記憶の片隅にあつて、古い部報で田口兄弟が書いていた、と発言したのは思い違いで、帰宅後部報No.2(1929)を見てみたら、香月慶太さんによる「十八町谷及び瑞宝谷調査」だった。

香月さんは昭和4年9月22日に単独で杖捨橋

から瑞宝谷を遡り「460m等高線上に太鼓滝あり。一寸美しい。…（土砂止めが多く）源までに滝より数えて32を算す。…クライミング・ゲレンデは十八町谷より少なし。瑞宝谷東尾根の西微北面に一大岩壁あり。堅そうだ。…キャンプサイトは650m線の上にある第29土砂止めの上であり、眺望、水、薪は不足なし。…」などと報告されている。

80年も昔の高校生の観察だが、ふとしたきっかけで、このような古い文章に接し、当時の裏六甲の様子などを想像するというのも山歩きの楽しさのひとつです。

### 伊藤愿さんのご遺族のこと

越田和夫 1月16日

次女の松方恭子さんからメールで頂いた写真をアルバムにUPしてもらいました。ちょっと経緯を説明いたします。

きっかけはこのHPで、まことにネットの威力と感じ入った次第です。平井一正先生ご執筆の愿さんについての文章がこのHPに載っていることをご親族の方がみつけられ話題となり、恭子さんが平井先生に連絡を取られ、お会いになったのが昨年暮のこと。平井先生経由でご遺族の近況などお聞きしたところです。

丁度、昨年の夏にご一家でツェルマットを訪れ、56年前（昭和26年）愿さんがマッターホルンを単独登頂された折に写された、マッターホルンをバックにした有名な写真の撮影場所（ツェルマットから2時間ばかり登ったところ）を見つけれ、同じアングル、同じポーズで写真を撮ってこられたとのことでした。この写真については、小生は見逃したのですが、昨年9月NHKのTV（関東地区）で放映されたそうで、是非甲南山岳会のHPにも掲載させてほしいと、お願いし快諾を頂いたものです。

なお、未亡人の房子様は、お元気に卒寿を迎えられ、暮には御一統23名の方が集まってお祝いをされたそうです。恭子さんのご主人富士雄さんは、元日本山岳会の会長もなさっていた松方三郎さんの次男で、75歳の今も元気に山やマラソンを続けておられ、娘さん達も山好き、来年はマッターホルン登頂を考えて居られるとかです。

また、愿さんが昭和26年の欧州旅行中に奥さん宛に出された99通のハガキを中心にした遺稿集を近々出版されるとのこと。このハガキのコピーは平井吉夫、飯田進両君がかつて田口二郎さんから預かって保管していたものです。

さらに、愿さんが昭和11年、今西錦司さんらの要請でK2遠征の準備に単身渡印されたときの写真が40枚ばかりお手許にあるとことで、平井先生とも相談のうえ、近い機会に拝見できればと思っています。

### 雪見会

飯田 進 1月19日

雪見会 参加者 19日 現在の日程です。間違っていたら訂正願います。

25日 深夜 田辺 山本 塩崎親娘

26日 夕刻 雨宮 武田 浪川 岡

27日 帰る人 田辺 山本

28日 帰る人 塩崎親娘

29日 帰る人 雨宮 武田 浪川 岡

以上。小生25日夕刻到着。28日帰ります。

雪見会のお礼 山本 恵昭

飯田様、急なお願いにもかかわらず、大変お世話になりありがとうございました。

帰りは青木湖で大渋滞に引っかかり、Uターンして更埴IC経由で、今朝2時頃帰宅しました。

26日吹雪の天狗原下では強風と寒さでへこんでいた娘も、すぐ新雪の滑りになれて成城大小屋に着く頃にはジェットコースターより面白

いとご機嫌でした。また、27日は初めての信州のゲレンデを堪能していました。

塩崎さんのお嬢さんのスピードに乗ったかっこ良いボード姿を見ていると、ボードもやってみたくなりました。

一泊では慌しかったですが、諸先輩方の酒を囲んでのお話も面白いし、充実の3日間でした。またご一緒させてください。

#### 雪見会御礼 小西啓右(関学)

飯田様 甲南の皆様

梅池では大変お世話になり有難うございました。天狗原からの下りの滑りは一年目は10パーセント、2年目は30パーセント、今年は60パーセントの満足度でした。まだまだです。山本恵昭さんのスタイルには惚れ惚れしました。少しでも近づけたらと思いますが無理です。初めて参加させて頂いた私共の田中会長は甲南の皆様は非常にお上手でよく飛ばされると感心しておりました。また4日間仲良く楽しく過ごさせて頂いたと感謝しており、皆様によろしく伝えておいてくれと申しております。ありがとうございました。

#### 雪の摩耶山

山本恵昭 2月16日

今日、雨宮さんからいただいた登山靴の試し履きをかねて、摩耶山へ行ってきました。

車を穂高湖の近くに止めて、シェール槍の西斜面を下り、新穂高の北斜面から南斜面へ、黒岩尾根の北斜面を適当に登って摩耶山頂へ。この寒波で、場所によっては足首上の積雪があり、適当に道はずれて歩くとなかなか雪山気分が味わえました。

クラストした雪の上に点々とキツネ?の足跡、その横にズボズボ踏み抜いたイノシシの足跡。なんか現役時代の住友さんと今は亡き藪内さんを思

い出しました。毛勝の冬山合宿で、体重の軽い住友さんがトップでトレースをつけると、その後ろで筋肉質の藪内さんがズボズボとトレースを踏み抜いていました。時には木の根もとの空洞に胸まではまり込んで、日ごろ体力自慢の藪内さんが困り果てていたのが、昨日のようによみがえります。

ここ数年、山スキーを楽しむようになったのは、元はといえば雨宮さんから山スキー用具を頂いたのがきっかけです。この度は雪山用登山靴をいただき、久しぶりに固い靴の感触を楽しみました。これから先、この靴で懐かしくも新しい世界がどんな風に広がるのか自分でも楽しみです。雨宮さん、ありがとうございました。

私も甲南 Today を見ました。発生物学のパイオニア：岡田節人先生より、谷君が前に紹介されているのに驚きました。谷君の後に続く学生が出てきたら良いですね。

#### 報告

武田 雄三 2月25日

去る23日(土)開催の、平成17年度甲南大学課外活動表彰式に於いて谷君が「同窓会課外活動会長賞」を水野正人同窓会会長より授与されました。

この受賞は、「谷君個人の活躍」は勿論、「会員各位の支援」有ってのもの大変誇らしく思います。諸兄弟のご支援を、此処に改めて厚く御礼申し上げます。

#### 銀杏峰

山本 恵昭 3月9日

本日、浪川さんと銀杏峰へ行ってきました。

土曜日夜発1時頃着で車中泊。朝になると車が次々とやってきて沢山の人が登っていきました。ゆっくり準備をして北尾根経由で山頂に。

この半年、仕事が忙しくトレーニング不足だっ

たのですが、体は正直、息ゼイゼイでした。

それに引き換えネパール帰りの浪川さんは絶好調。「山本の息の乱れを聞いていると嬉しくなってくる」そうです。先行パーティが見えると俄然ハイペースとなり追い越しまくりでした。

下りは銀杏峰北斜面から小葉谷へ。重い雪でしたが、急斜面にシュプールを刻み、昼には駐車場に到着。なかなか良いコースでした。

大野市でおろしそばをご馳走になり、あったかランドで垢を落とし、いつものスーパーで焼き鯖寿司を買って、岐路に。

## 頸城の山

kannroku

3月24日

山本恵昭君主催の“山スキーを楽しもう”3/20夜～3/24早朝に参加してまいりました。

糸魚川頸城山城の鉢山(1,575)、昼闇山(1,840)、前烏帽子岳(1,040)を登り又山スキーを楽しんできました。鉢山頂上直下は急なる雪面の登攀となり下から見上げて、こら67歳の年寄りが登る山では無しと悟り、Donnkichi、恵昭両君におまかせし、下のコルより観戦。

昼闇山はただ長い長い道のりで疲労困憊のていで頂上にたどり着く。そこから見た金山、雨飾の女性的な容姿にうっとり。

三日間ハードな行程であったが、好天に恵まれ頂上を登ってからの帰りのスキーには大満足で、我等3人が思い思いのシュプールをえがきテントサイトに。山スキーの醍醐味を堪能した3日間でありました。計画立案から装備・食料とすべてをやっていた山本君、心よりありがとう。

頸城 中高年合宿

山本恵昭

3月20日夜発で、カンさん、浪川さんと頸城に行ってきました。

21日朝、焼山温泉での仮眠が熟睡となり、8:00にゆっくり出発。20数kgの重荷にひたすら

耐えてスキー登行。アケビ平には林道ができていて歩きやすくなっていた。昼闇谷を越えて、吉尾平の谷の手前の台地にBC設営11:30。烏帽子岳、阿弥陀山を目前に絶好のロケーション。

13:00から偵察をかねて、前烏帽子岳へ向かう。西向きの谷をつめて緩い斜面を登ると前烏帽子岳着14:30。快晴のもと、火打、焼山、昼闇、吉尾平、阿弥陀、烏帽子とまるで頸城の展望台。烏帽子岳へのルートは雪庇の乗り越しがいやらしそう。快適に滑ってBCへ15:30。テント前に雪のテーブルを作ったのんびり夕食。

22日7:20、小さな難峰、鉢山を目指す。BC前のブナの巨木がある尾根を登り、900m付近から右の谷へ入り、980m付近から右の緩い尾根に取り付いて、鉢山のコル10:30。浪川さんと雪庇の張り出したいやらしい雪稜雪壁をザイル確保で5ピッチ。その後、傾斜の落ちた雪稜をコンテで鉢山山頂12:30。雪が緩んで雪崩れそうな雪面を慎重に下って、カンさんの待つコルへ13:40に戻る。ひさしぶりのザイルワークに緊張した。

アイゼンをスキーに履き替えて吉尾平へ。岩峰を眺めながら、広い緩中斜面を快適に滑る。最後に谷を渡ってBC15:00。雪テーブルでお茶、夕食。

23日6:45、昼闇山へロングアタック。昨日と同じルートで鉢山コル上に9:00。鉢山と昼闇山の間ピークを越えた二重山稜の雪原でスキーをデポ10:00。アイゼンをはいて、時々踏み抜きに苦労しながら、5月のような雪稜をひたすら登り昼闇山11:45。焼山が近いが生憎の曇り空。スキーデポまで戻り12:45、ピークを超えた1,590m付近でシールをはがし滑降準備。

ピークの北西斜面は樹木も少なく、快適な中斜面に登りに使った谷まで続いている。雪の安定を確認してスタート13:30。適当に先頭を交

代しながら、斜面の変化を楽しんでいると、あっという間に谷の 900m 付近。登り 2 時間半、下り 15 分、これぞ山スキーの醍醐味。あー楽しかった。ここから下は谷割れがあるので、尾根コースに戻り BC 着 14:00。

もう 1 日あるが、天気も下り坂なので、撤収下山 15:00。重荷にたえてひたすら滑ると焼山温泉駐車場へ到着 15:30。焼山温泉で汗を流し、糸魚川でご馳走をよばれ、雨の北陸道を仮眠しながら 24 日早朝神戸着。

重荷と連日のハードな行動は、まるで合宿でしたが、好天にも恵まれて、山スキー＋雪稜を堪能しました。いつもながら、熟年チームのパワーには感心しました。日ごろのご努力の成果でしょうか。

今晚は、カンさんにいただいた小鮎の佃煮を着に、買って帰った超辛口の糸魚川の酒「月不見の池」と家族の笑顔で疲れを癒しています。

\* \* \* \* \*

## 現役の書き込み

### 文登研夏山①

現役 谷 勇輝 6 月 13 日

6 月 1 日から 7 日まで文部科学省主催の登山リーダー研修夏山①（通称、文登研夏山①）に 2 回生の奥田と私の 2 名参加してきました。

研修場所は立山にある登山研修所及び劔沢周辺にて主にプロガイド及び県警警備隊の講師の方々を実地にて指導していただきました。

現地では班分けされて、各々講師が付き研修を行います。

ここでは私の班の行動を記します。

5 月 31 日

### 大阪～立山

研修所に来たのは昨年参加した夏山①、夏山②、山岳救助研修 B で今回が 4 回目。立山駅から研修所までの道のりも慣れたもの。けれど、毎回違うメンバーで研修を行うので他大学との交流の場となるので新たなメンバーとの顔合わせにキモチが高まります。

6 月 1 日（1 日目）

開会式、講義「登山の医学」、入山準備、ロープワーク。昨日合流できなかった班のメンバーとも合流。班は 1 班。講師は日本アルパインガイド協会の山下氏と富山県警山岳警備隊の野中氏。メンバーは龍大山岳部、同志社山岳部、立命山岳部、の計 4 名。

6 月 2 日（2 日目）

班別協議、ロープワーク、入山準備。食堂で朝食を済ませた後、班毎に分かれて研修。

6 月 3 日（3 日目）

入山、劔沢雪洞掘り（BC 設営）  
5:00 起床。食堂で朝食を済ませ、7:20 立山駅発のケーブルカーへ乗り、バスを乗り継ぎ室堂へ。室堂に到着後、各班ごとに研修を行いながら劔沢へ。

6 月 4 日（4 日目）

劔沢にて雪上訓練

6 月 5 日（5 日目）

BC～源次郎尾根～劔本峰～別山尾根～えびルンゼ～平蔵谷下降～BC 帰幕。

6 月 6 日（6 日目）

下山、搬送訓練

6 月 7 日（7 日目）

記録整理、装備返却、閉会式。

### 富士山雪上訓練／関学・甲南合同

現役 谷 勇輝 11 月 20 日

この度、縁あって関西学院大学山岳部と富士山

へ雪上訓練へ行くことになり、そのご報告をさせていただきます。

両校の現役が‘合同で何かをする’というのは久しぶりの事ではないでしょうか。

目的；

- ・雪上での歩行・登攀技術の向上
- ・高所経験
- ・頂上ビバークによる耐寒訓練
- ・概念把握

日程；

11月22日（木）離阪、20時大阪・中央郵便局前集合  
23日（金）富士吉田～五合目佐藤小屋付近  
BC⇔八合目付近にて雪上訓練  
24日（土）BC～雪訓～頂上にてビバーク  
25日（日）BP～お鉢周り～BC～帰阪  
26日（月）予備日

参加メンバー；

＝関学＝

中島 健郎 理工4 23歳  
山本 大貴 社2 21歳

＝甲南＝

谷 勇輝 理工4 22歳  
奥田 剛史 営2 19歳

尚、今回の計画は関学山岳部サイド及び、甲南山岳会（武田会長）の了承得ております。

## 富士雪訓

現役 谷 勇輝 11月27日

25日深夜に全員無事、帰阪致しました。報告遅くなり、ご心配おかけして済みませんでした。以下、報告させていただきます。

＝行動・天気概要＝

積雪量は例年と比べて少なかったものの、連日、好天に恵まれたおかげで主な目的にある雪訓・頂上ビバーク訓練を無事行うことができた。

また、両校の習慣・技術で違いがあったものの、それについて議論、検証することでお互い得るものはたくさんあった。それに加え、両校現役の友好も今まで以上に深まったと確信している。

＝行動詳細＝

22日（木）

大阪駅前に20時、4人全員集合した。私と中島さん・山本は面識あるが、奥田は今回が初対面である。

自己紹介を早々に済ませて車に乗り込む。車内にて奥田は昨年、南米を旅してきた山本の話に興味津々。他に遠征話で盛り上がる。

名神、東名高速を乗り継ぎ、山梨へと向かう。6h程で御殿場ICへ到着。高速を下り、下道を走ること1h。翌日、午前3時過ぎ、吉田口登山道の車止めである馬返しに到着。既に1パーティーテント内で仮眠していた。

我々もテントを建てて、しばし仮眠をとるために準備する。

車から出るとやはりサブイ。御殿場IC付近の標識では気温-5℃と表示。馬帰しは標高1,400m程。それ故、恐らくここは-10℃くらいあるのだろう。

車の排気ガスも白く消えずに空中を浮遊している。空を見上げると、快晴で星が良く見える。冷え込みがきついのもうなずける。

23日（金）晴れ

5時起床。各々朝食を済ませ、テントをたたんで装備の割り振りを済ませて出発。

馬返し（1合目）から佐藤小屋（5合目）まで歩くこと3時間、佐藤小屋に到着。そこにテントを張りBCとした。

山頂を見ると8合目付近まで雪らしいものが殆んど見えない。中島さん曰く、去年は6合目付近で雪の上にテントをはったそうだが、今年

は氷のかけらさえ見当たらない。

‘山頂でのビバーク訓練は雪洞ではなくツェルトか…’と話しつつ、雪訓の準備を済ませ雪のあるところまで登ることにする。

8 合目付近まで登ると雪訓できそうな雪面が残っており、歩行訓練・滑落停止・スタカットの練習を3時間弱行う。ロープ・ギア類をその場にデポした後にBC帰幕。テン場には我々以外に5張り程テントが建っていた。その中には防衛大学山岳部さんのテントも並んでいた。

水は小屋から入手できたので、食事の準備がラクであった。と言うか、雪が無いので小屋からもらわなければならない。夕食はなんと、カニを丸ごと1匹鍋にぶち込んだカニ鍋！&牛汁！美味しい！

カニの取り合いで喧嘩をすることなく、満腹になった後就寝。

24日(土) 晴れ

4時起床。昨夜より暖かい。辺りは月明かりに照らされ案外明るい。

頂上でビバークできる装備(本来、アタック時に担いでいる装備と個人マット)をザックに詰め込み出発。ヘッドラをつけてしばらく歩くと太陽が顔を覗かせて、麓の雲海が綺麗に見える。

昨日、登攀具をデポしたポイントまで行き、回収して山頂を目指す。9合目手前から、アイゼンを履き登山道を離れて、雪面に移り2人1組となりアンザイレンしてコンテニユアスの練習をする。表面がカリカリで訓練には打って付け。

しばらく、コンテでの登った後、頂上手前からスタカットで登ることにする。スノーバー・スクリュューによる雪上からの支点の確保、アックスによる支点作り。また、雪上でのビレー技術の習熟など、特に奥田にとっては得るものが

たくさんあったと思う。

頂上に到着後、みやげ物屋の風下に吹き貯まっている雪山に雪洞を作ろうと試みる。

真横へ掘り進めたところで、何とか4人が寝られるだけのスペースを確保し、入り口横にブロックを積み上げて閉じてしまい、出入り口にはツェルトを張る。

寝床を確保したところで、少し場所を移動してセルフレスキューの訓練を行う。夕方に近づくにつれてぐんぐん気温が下がり、手足がかじかむ。風も少し増してきた。訓練を終えると早々に雪洞へもどる。

この時間になると、頂上には人っ子一人としていない。ましてビバークしているパーティなど。

雪洞内はやはり寒い。外はモット寒い。

あまりにも寒いので4人でツェルトをかぶる。まずは暖かい飲み物をとガスをつけると一気に暖かくなる。夕食時には個人装備であれよあれよと酒・サバ缶・スルメ・チキンラーメンがお出ましになる。

夕食後、ガスを焚くともったいないのでローソクに火を灯してグダグダと話す。内容はお察しの通り、ココには書くことはできません。

午後8時頃、そろそろ寝ようかと‘巣作り’をするためにローソクの火を消すと、一気に本来の状態へと早代わり。早々にシュラフカバーへ入り、その上からツェルトをかける。やはり体の末端部分の冷え込みが激しい。足の指が冷え切っており、動かして血行を促すが感覚が無い。しかし、ツェルト1枚かけるだけで想像していたよりも暖かい。これなら何とか朝まで耐えることができる。

25日(日) 晴れ

3時20分起床。身を寄せ合い殆んど一睡もで

きないまま、翌朝を迎える。体は心から冷え切っている。驚くことに、誰も頭痛（高度障害）がでなかったようだ。ただし、奥田は前日に頭痛の兆候がみられたので、頭痛止めをのんでいた。

その要因として、中島さんは3月の遠征で順応しているまた、山本は昨年の南米で4千m台まで順応、私も先日の遠征で順応しているからだと思う。

で、まずは暖かい飲み物をと前日、テルモスに入れていた水を沸かす。(ガスの節約のため少し熱くなったところでガスを止める。)ぬるい味噌汁だが格別に美味い。

そして、暖をとるために水作りをする。すると、ツェルト内はこれまた一気に暖くなる。冷え切った体がどんどん温かくなる。

朝食後、私以外の3名はお鉢周りへ行き、私は昨日の雪訓で膝を痛めたので先にBCへと下りることにする。(実は、奥田と2人で雪上でスタカットの練習をしている際、支点でタイオフして使用していたスノーバーが抜けて滑り落ちてくるではないか。セカンドで登っていた私がそれを捕まえようとしたが、猛スピード滑り落ちて来るので手で止めきれずに右膝に衝突したのだった。で、今朝もまだその痛みが残っていたために先にBCまで戻ることにした。)

BC到着後、テントをたたみ3人の帰りを待つ。待つこと2時間弱。ようやく合流し、ほぼ安全域に達しているので予備食のラーメン、カレーうどんを食す。

満腹となり、動くのがいやに成りかけた。しかし、3連休の最終日とあって帰りの高速の渋滞で終電に間に合わない心配もあり、ゆっくりもしてられない。温泉にも浸かりたいので。

佐藤小屋から1時間少々で車止めまで行き着

く。

河口湖駅前の観光案内所でオススメの温泉を尋ねると、駅から車で5分ほどのところに溶岩温泉があると聞き、早速行ってみる。銭湯のような温泉だったが、まあまあいいところであった。

#### 総括

今回、初めての関学山岳部さんと合同登山を試みました。私と中島さんは以前、一緒に八ヶ岳へアイスクライミングへ行ったものの、それ以降一緒に山に入ったことが無く。山本と山へ行くのは今回が初めて。それに、奥田は関学2名とは今回が初対面。また、両校の習慣・技術面。などなど。色々と心配種はあったものの、そんな心配を吹っ飛ばすほど有意義な山行となりました。

#### 追記

午後3時過ぎ、大阪へ向けて出発したが、案の定渋滞につかまり。中島さんと山本を大阪駅で見送り、私の家に近い奥田を自宅へ送り届けて帰宅すると日付けが変わっていた。山梨から9時間もかかった。

#### 山岳会ホームページアドレス

<http://homepage2.nifty.com/konan-alpin/>

#### 大学山岳部ホームページアドレス

<http://www.club.konan-u.ac.jp/~alpine/topframe.html>

## 編集後記

会報発行のカナメは原稿集めですが、編集担当としては割りに恵まれた環境にあることを感謝しております。

まず、直接・間接にお願いしてお寄せいただくものがあります。この号では会員短信などにお書きの話題から、山以外の楽しみをお持ちの方にお願ひしてみました。

矢吹さんはジョギング。いゝ加減だから続く、と書いてはおられますが、20年続けるのは大変でしょう。お好きだから続けておいでなんだろうなあと拝読しました。

大勝さんは一人でできる健康維持。私も軽快車「改」を一時期愛用していましたしメカも好きです。そんなこと

で、自転車はナルホドと思って拝読。ただしカヌーは基本カナヅチなのでパス。

谷君のヒマラヤ原稿もこのタイプ。

別に、書いたゾ、とお送りいただくこともままあります。本数としたらこちらのほうが多いですね。福田さん・柏さん・浪川さんの海外3編。皆さんフットワークよくお出かけです。今回はヒマラヤでアクシデント、致命的な大事に至らないのが年の功でしょうか。

雨宮さんの論考は独特の文体、いつもの長編です。読書の量と資料の量は膨大だろうなあ。この項は見出しの文字数の関係から段組にしています。

表題が意表をつく平井さんの朝倉さん追悼。高校時代からの友人を思うお気持ちが伝わります。

越田さんの図書紹介、「妻におくった九十九枚の絵葉書・伊藤愿の滞欧日録」。著者は伊藤愿さんのお嬢様、松方恭子さん。愿さんが亡くなられて随分経過してから遺稿集を上梓されるいきさつ、越田さんの解説で了解できました。この経過だけでもひとつの読み物に。

その松方恭子さんの「わたしの夏休み 56年ぶりの慰霊アルプス行」。ホームページへのご寄稿を越田さん経由でご了解いただいて転載しました。

仕上げの最終段階に、「山の男の歌」を中澤章浩さんから。中澤さんは亡くなられた朝倉さんと同期入部の方です。卒業までのメンバーではありませんが、学部・大学院と長く甲南においででした。月見コンパにはご自宅(お宮さんです・官幣大社ならぬ村幣大社と笑っておられました)から持参の一升瓶とともに友情出演、酒も歌も思い出たくさんです。今年の慰霊祭では部歌をご一緒しました。

毎年のことになりました。事務局井上さんが作ってくださる会員短信のページ、塩崎さんが管理しておられるホームページからの転載も大切な記事です。お二人にもお礼申し上げます。

来年、原稿のお願いを申し上げますら、どうぞよろしくお願ひいたします。書いたゾ、もお待ちしております。

原稿宛先 山嶽寮編集担当

大森雅宏

電話/ファクシミリ

Eメール

山 嶽 寮 第 63 号

甲 南 山 岳 会

神戸市東灘区岡本 8-9-1 甲南大学内

2008 年 (平成 20 年) 10 月

編集人 山本真博 印刷 カツヤマ印刷